

無限の反省を請求しては居るまいか』

自分は深く思ひ入つた。

少時してから、

『けれど、この自然兒！ このあはれむべき自然兒の一生も、大いなるものゝ眼から見れば、皆その必要を以て生れ、皆その職分を有して立ち、皆その必要と職分との爲めに盡して居るのだ！ 葬る人も無く、獸のやうに死んで了つても、それでも重右衛門の一生は徒爾ではない！』

と心に叫んだ。

何時去つたか、傍には既に友は居らぬ。

戸外の雨はいよゝ／＼侘しく、雲霧は愁の影の如くさびしくこの天地に充ち渡つた。丘の上の悲しい煙は、殆ど消ゆるかと思はるゝばかりに微かに、微かに靡いて居るが、村ではこれに對して一人も同情する者が無いと思ふと、自分は又簇々と涙を催した。

あゝその雨中の煙！ 自分は何うしてこの光景を忘るゝ事が出来よう。

一一一

諸君、自分は其夜更に驚くべく忘るべからざる光景に接したのである。自分は自然の力、自然の意のかほどまで強く凄じいものであらうとは思ひ懸けなかつた。其夜自分は早くから臥床に入つたが放火の主犯者が死んで了つたといふ考へと、連夜眠らなかつた疲勞とは苦もなく自分を華胥に誘つて、自分は殆ど魂魄を失ふばかりに熟睡して了つた。熟睡、熟睡、今少し自分が眼覺めずに居つたなら、自分は恐らく全く黒焼に成つたであらう。自分の眼覺めた時には、既に炎々たる火が全室に満ち渡つて、黒煙が一寸先も見えぬ程に這つて居た。自分は驚いて、慌て、寝衣の儘、前の雨戸を烈しく蹴つたが、幸にも鬮の溝の浅い田舎の戸は忽ち外れて、自分は一簇の黒煙と共に戸外へと押し出された。

押し出されて、更に驚いた。

夢では無いかと思つた。

何うです、諸君。全村が丸で火！ 鎮守の森の陰に一つ。すぐ前の低いところの一隅に一つ。後に一つ。右に一つ。殆ど五六ヶ所から、凄じい火の手が上つて、それが灰色の雨雲に映つて、寝惚けた眼で見ると、天も地も悉く火に包まれて了つたやうに思はれる。雨は歇んだ代りに、風が少し出て、その黒煙とその火とが恐ろしい勢で、次第に其領分をひろめて行く。寺の鐘、半鐘、叫喚、大叫喚！

自分は低い山に登つて、種々なる思想に撲たれながら一人その悲惨なる光景を眺めて居た。

實際自分はさまざまの経験を爲たけれど、この夜の光景ほど悲壯に、この夜の光景ほど莊嚴に自分の

心を動かしたことは一度も無かつた。火の風に伴れて家から家に移つて行く勢、人のそれを防ぎ難ねて折々發する絶望の叫喚、自分はその刹那こそ確かに自然の姿に接したと思つた。

諸君！ これでこの話は終結である。けれど猶一言、諸君に聞いて貰はなければならぬ事がある。それは、その翌日、殆ど全村を焼き盡したその灰燼の中に半焼けた少女の屍を發見した事で、少女は顔に手に當てたまゝ打伏に爲つて焼け死んで居た。かれは人に捕へられて、憎惡の餘、その火の中に投ぜられたのであらうか、それとも又、獨り微笑んで身をその中に投じたのであらうか。それは恐らく誰も知るまい。

自分は其翌日萬感を抱いてこの修羅の巻を去つた。

それからもう七年になる。

其村の人々には自分は今も猶交際して居るが、つい、此間も其村の冒險者の一人が脱走して自分の家を探ねて來たから、あの後は村は平和かと聞くと、『いや、もうあんな事は有りはしねえだ、あんな事が度々有つた日には、村は立つて行かねえだ。御方便な事には、あれからはいつも豊年で、今でア、村ア、あの時分より富貴になつただ』と言つた、そして重右衛門とその少女との墓が今は寺に建てられて、村の者がをり／＼香華を手向けるといふ事を自分に話した。

諸君自然は竟に自然に歸つた！

(明治三十五年二月)

梅屋の梅

梅屋の梅

この夏で首尾よく大學を卒業するといふ年の三月下旬であつた。例年よりも餘寒が厳しく、野には美しい若草が既に幾番の春を領して居るにも拘らず、寒い寒い風が東京の街上に吹き渡つて郊外の多摩、秩父の山々にはまだ白雪が閃々と朝日夕日にかゞやくといふ工合、花になるのなどは何時の事かと思はれるのであつた。自分の本郷の下宿は、二階の一隅の、まともに西を受けた、下は懸崖のいろ／＼と眺望の好い處であるから、従つて風を受けること太甚はなまはしく、まご／＼すると鬮の溝の浅い障子が紙鳶か何ぞのやうに自分の頭上に落ちて來て、筆立は倒れる、筆記は飛ぶ、書籍の頁は翻るといふ大騒動を日に幾回となく惹起すので、自分はしたゝかこの東京の餘寒を恐ろしいものに思つて、朝起きて西の空に薄紫に鼠を交ぜた風雲の靡いて居るのを見ると、氣が減入つて了ふ程うんざりするのが常であつた。こと

に、一番閉口なのは、風が吹くと、頭が岑々と烈しく痛んで、いと難解の國際法が更に更に解らなくなつて、幾度同じ處を讀返しても容易に要點を攫取事が出来なくなるので、風の吹く日ほど自分は弱つた事は無いのである。それにしても大學生の境遇ほど苦しい憐れむべきものはあるまい。それは、財産があつて、自由が利いて好きな参考書も勝手に買へ、其上、香氣の好い西洋烟草をも燻すことが出来、一月に七八遍も美しい少婦の居る眞砂町邊の西洋料理の門を潛ることが出来る身分ならば、それは随分呑氣でもあらうし、随分面白くもあらうけれど、自分のやうな苦學ではとてもそんな眞似は出来ぬ。出来ぬどころか、下宿料を拂つて、月謝を納めて、筆記の手帳の一月分も買つて、それで豊國にでも入つて牛鍋でも突つくと、もう財囊は空虚になつて、大學生の品格を保ちたくつても保てなくなつて了ふ。仕方が無いから、苦學の暇を偷んで、交際しなくつても好い當世評判の雜誌記者や所謂文學者先生などに交つて、五六枚の翻譯ものでも買つて貰つて、それで、何うやら彼うやら小遣でも拵へるといふ有様——それはあはれな者さ。

けれど翻つてその氣焰なるものを聞くと、それは實に盛で、今から考へると、よくもあんな無責任な議論を遣つたものだと思はれるばかり、やれ國際法の彼の條文は改良しなければ不好いの、やれ憲法の初めの一節をあ、解釋するのは悪いの、伊藤侯が何うの、李鴻章が何うのと、當局者が聞いたら、一言で呆れて了ふやうな極端な議論ばかり聞はして、それでお互に極端などは少しも思はず、これで當然である、自分の理想であると力んで居た。其れもその管であらう、其頃には胸に非常な狂熱と、非常な空想を抱いて居て、人生をこんな平凡なこんな複雑なこんな色彩の無いものとは思つて居ず、寧ろ極端な思想の多い、色彩の非常に深い、面白い處と思つて居たから……。

けれどこんな愚癡は、自分の今これから話さうとする物語と何の關係をも有つて居らぬから先好加減に廢めるとして、さて三月の下旬——確か二十四五日だと覺えて居る。と言つて渠は立つて、クロス表紙の、青の縦線の細く入つて居る、小さい手帳を五六冊、書棚から下して、その明治三十二年三月二十日前後のところを檢し始めた。左様だ、二十五日だ、此處にかう書いてある。

二十五日

朝より例の風にて閉口す。

寒さは寒し、頭腦は痛し、憲法はよく解らず。いつそ友人にても訪問せんと思ふ。されどこの風にてはと思ひ留まりぬ。

午後三時、今川来る。一時間ばかり後れて櫻井来る。大に談ず、國際法の事に就き、余と櫻井との間に大衝突あり。されどこは今に始りたるにあらず。

三人して牛鍋をつつきながら談じて夕に至る。

不圖この春休みの事に及び、何處か靜かに讀書する所は無きかと今川いふ、色々の評議の結果、こ

の東京の近くにては下野の鹽原よからんといふに決す。

兎に角手紙を出して尋ねて遣らばやとて各々一通づゝの葉書を書く。余は香嶽樓、櫻井は鳶屋、今川は梅屋なり。

夜、風少しやむ。二人の歸るを送りて本郷の大通を散歩す。

これが自分の話さうとする第一着で、其日の事を思ふと、今でもその下宿の一間の光景が見えるやうである。この櫻井と今川とは、自分の親友中の親友で、二人共高等學校以來の同窓であるが、今川の沈着いて、しつかりして、意志の強いのに引きかへて、櫻井は飽まで感情的に飽まで狂熱的に議論を遣り懸けると、口角沫を飛ばし、面上朱を點ずるといふ極の神経家で、あれで法律を遣らうなど、言ふのは間違つて居ると一度逢つた人は誰でもいふ。けれど、神経家に似合はぬ強い處があるのがこの男の長所で、假令何んなにその態度は激して來ても、その論ぜんと欲する點は飽まで明快に飽まで鋭利に、自分の議論を通した上でなければ決して止めぬといふ、非常に押の強い性質を有して居るから、もし將來それが世の中に成功するならば、それは必ずその性質がする爲であらうとは、自分等の夥伴なかつの一般の評であつた。今川はそれに比べると、感情は極く發達しない方で、何でもその前に横たはつて來るものは悉く冷靜な意志の力で判斷して済して居る。否、意志の力で判斷してはならぬものであるもかれは平氣な顔で判斷して了ふのが剛だ、其故人によるとかれの性格を誤解して、情愛などは少しも知らぬ木堅英の

やうに思つて居るものも少くないけれど僕は決して左様は思はぬ。只かれの感情——純粹な美しいかれの感情がある境遇に邂逅しない爲め、まだ十分に發展しないのに止まるので、もしこれが石に觸れて火を發する場合にもなつたなら、それは何んなに花々しい光を發するか知れぬと自分は常に思つて居た。その證據には、平生いろ／＼話をして居ても、折々思ひも懸けぬやうな美しい感情が無意識にその冷靜な言葉の中から漏れて來るので、それに觸ると、自分の冷い胸は言ひ知らず無限の暖かさを感じるのであつた。二人とも、文學には極く／＼の門外漢で、もし文學の趣味を多少でも持つて居たならば、それは文學好の自分の感化で、少くとも自分は二人——否法科の學生などには似もつかぬ文學好であつた。自分は試験の近づいた忙しい時間にも、猶ゲエテの詩集や、ハイネの散文や、乃至は現代の小品を手から離した事なく、文科の學生すら知らぬやうな事を知つて居るので、なかつ伴侶からは文學狂と渾名されて、君は文科かなどと白ばくれて訊られる事なども度々ある。其日も今川が遣つて來るとすぐ、自分の机の上に外交史や、農政學や、最近經濟原理や、憲法や國際法などの散ばつて居る中に、金縁の美しいパウ、ハイゼの短篇集の半讀みさしてあつたのを手に取つて、

『この辭竟に止むべからずかね』と言つて笑つた。

『相變らず綽々として餘裕ありだらう』と自分が返すと、

『餘裕も凄じいね。今にギウ／＼言つたつて知らんよ』

『君ぢやあるまいし』

『怪しからん！ 僕が何時ギウ〜言つた！』

『今に見給へ』

其頃の話の面白さ！ 活氣があつて、問題が多くつて、思想が豊富で、友情が籠つて、何んな小さなつまらぬ會話でも、一度相對して口を開くと、其處に美しい花が開いて、何とも形容されない楽しさが集つて来る。否、互に顔を合せさへすると、もうかう心が熔けるやうになつて、風の侘しかつた事も、國際法の難かしかつた事も、何も彼も忘れて了つて、唯々無意味に、眞摯に、何ともなき事をいろ／＼と語り合ふ。

その楽しさは忘れぬ。

櫻井讓次は丈の高い、眼のくりりとした、髪の毛の濃い、色の薄黒い、人に對する時一種言ふに言はれぬ物懐しい顔色を爲るのが吾等の間に有名であるが、先程本郷の勸工場の前で逢つた時今一時間程して、弓削の處に行くつて居たと今川が自分に話したので、もう遣つて來さうなものと二人して噂して居ると、ふと階梯を上る登音がして、それが段々近寄つて自分の室の前に立留つたと思ふと、背の高いその洋服姿がにこ〜と例の物懐しい態度を爲ながら入つて來た。

『不相變御機嫌が好いね』と今川が透さず言ふと、

『來るとすぐは嚴しいね』と莞爾と笑つて居る。

『今噂して居た處なんだよ、君』

『何うせ碌な噂を爲てやしないんだらう』と言ひ乍ら、小さい火鉢の前に跣座をかいて坐つた。

『なアに、入つて來る時君が屹度例のにこ〜した顔をするから見て居給へつて、弓削が言ふからね』

『僕がそんな事を言ふもんか』と慌てゝ自分が辯解すると、

『まア、兎に角、御機嫌の好い顔を拜したから、好いさ』

『呆れるなア、君達は。來る早々、人の顔の店卸を爲て……』

『店卸なもんか』

『好いよ、好いよ』と尙莞爾々々して居る。

こんな罪の無い事を言つて居るかと思ふと、忽然にして狂瀾天を覆へすがごとき大議論！ 自分はその大議論の如何に始り、如何に進み、如何に終つたかをよく覺えては居らぬ。けれどそれは随分烈しかったに相違ない。日記にもある通り、大衝突であつたに相違ない。自分は覺えて居る、其日は夕日の影のすつかり障子に消えて了ふまで、夕飯の準備も命ぜらずに口角沫を吹いて頻りに大氣焰を吐いて居た事を。否、餘に烈しいので、終には今川も傍で見兼ねて、いろいろ仲裁説を持出した。運命といふものは

解らない者だ。先に進んで後を振り返つて見ると、丁度高山の絶頂から今迄過ぎて来た路を指點するやうに、極めて分明と見えるけれど、其時は何ういふ事が何ういふ原因になつて、何ういふ運命を形づくつて居るか、それは少しも吾には解らぬ。かうやつて話して居る一場の話、それには或はある人のある運命を作つて居るかも知れぬのである。

二

『さうだ、鹽原が好い』と今川成義は膝を拍つて、

『僕はまだ行つて見んから、よく知らんけれど、何うもこの近傍では鹽原が好いやうだ！ 昨年文科の水田が矢張今頃行つたが、それは静かで、あんな好い處は無いと言つて僕に話した。何うだ！ 三人して鹽原へ行かうぢや無いか』

と一方ならぬ乘氣。

訖には牛鍋がもう残り少なくなつて、ジツ／＼と音を立て、居る。酒は飲まぬけれど、非常に激論して腹が減つた處にウンと飯を詰め込んだから、いづれも少し憚乎として、眼の皮が稍弛んだといふ氣味合である。來月一日から始まる春期休業、それを無駄に、花見やら遠足やらに潰して了ふのは愚だ。こゝとに三月後には一生の大難關を控へて居る身の、この十日間に一通り筆記をも復習し、参考書をも見て

置かなければならぬ。東京に居ても出来ぬではないけれど、不愉快な風、友人の訪問、興を殺いだり、邪魔を爲たりするものがいくらもある。それよりは金のかゝらぬ、人の多く行かない——静かな山の中か海岸かを選んで、其處に行つて、讀書する方が……と自分等は今しもその地を選択し始めたので、三月ばかり前の古くなつた旅行案内を書棚から引張り出して、彼處か此處かと頻りに頭を鳩めて相談した。箱根、熱海、修善寺、沼津、興津、房州、三浦……

或は費用の點、或は道路の遠隔、何うも思はしい處が無いので、いづれも考へ倦んで居る時ふと最初に自分の胸に上つたのが『鹽原』の二字。

すぐ今川の大賛成。

『鹽原が好い、鹽原が好い。費用もあまり高くはないし、路程もさして遠くは無いし、靜かに讀書するには持つて來いだ、只少し寒いかも知れんけれど、温泉があるから苦にならんサ』

と今川はいふ。

野州鹽原は自分の久戀の地。何うか一度は行つて見度いと豫ねて昔から願つて居ながら、未だ其願を達する事が出来なかつた。其地の山水は天下にも稀れなる程卓れて居て、箒川の流れの清さは殆ど形容する事すら難かしいとの人の噂。殊に、鹽原に行つて忘れられぬのは、温泉の玲瓏透徹些の塵影を留めぬ點にあるとかで、山を好む人は、あれ程心地の好い温泉は無いと言つて居る。それが今……と思ふ

と、その浴客のまだ来ない山中の温泉場の光景が、ありありと空想深い自分の胸に簇つて来る。山と山との間にさびしげに挟まれた一村落、二階三階の大きな旅亭が皆な雨戸を堅く閉ぢて、温泉の湯氣ばかり茫とところ／＼に靡いて居て、その前には灰色の岩石に碎けた白い溪流が、丸で木枯の凄じい響を聞くやうにその狭い一帯の谷地に満ち渡つて、まだ春の氣勢などは少しも至つて居ない其の山中の高い二階の南側の戸を少し開けて、その一室に都の春に背いて、讀書三昧に耽る三名の青年……と思ふと、堪らない興が胸も狭しと集つて來た。

『行かう、行かう、三人一緒に行かうぢやないか』と自分も叫んだ。

『三人一緒に行かう者なら、勉強どころか、朝から晩まで遊んで了ふ』これは櫻井。

『だから、始めから遊ばないやうに約束して行くさ』

『危い者だ』

『何アに、心の持ち様で大丈夫だよ』と自分は言つて、更に、

『櫻井、何うだ君は』

『賛成するさ』

今川は頻りに旅行案内を繰して居たが、

『それで、鹽原は何といふ家が好いんだらう？』と言つた。

自分も身を寄せて、今川と共に旅亭に關する記事を読み始めたが、鹽原では香嶽樓といふのが一番好く、次が蔦屋、次が梅屋、外にも小さい旅亭は澤山あるが、まア此の三つに指を屈するといふ事である。そして眺望は三軒とも大した相違はなく、内湯の構造、宿泊料など皆な似たり寄つたりであるといふ。

『三軒に僕等三人で葉書を遣つて、その手紙の工合で、一番優待しさうな家に行かうぢやないか』と自分は笑つて發議した。

『好からう／＼』といづれも大賛成。

丁度葉書が手許にあつたので、銘々それに好加減に書いた。自分が香嶽樓、櫻井が蔦屋、今川が梅屋。

一時間後には自分等三人手を組合さぬばかりにして、本郷の大通をぶらり／＼逍遙つて居た。終日吹荒れた風は漸く風いで、街頭には夜見世を出して居る古本商、玩具屋、古道具屋などちらほら見える。大通を少し行くと酒屋の角に、いつも厄介になる一箇の郵便函があつて、夜の色の中に黒い影を隈取つて立つて居る。それに自分はこの三葉の葉書を投じた。

『誰のが一番成功するか』

『僕のさ』と今川は信ずる處ある如く。

『これが、何うだ、面白い結果を來して、美人でも居る家か何ぞに邂逅つて、我々と鹽原との間に離るべからざる關係でも出来るやうになつたら……』と櫻井は言つた。

『そんな事があるものか。ライフ、イズ、ナット、ローマンス！』と自分は殆ど氣にも留めなかつたが、これがこの一場の物語の種にならうとは誰が知らう。

自分は下宿に歸つて、臥床に就いても、猶思ふのは野州鹽原十三郷の山水であつた。

三

三葉の葉書が如何に山中の温泉に運ばれ、如何に三軒の温泉宿に配達され、いかにその戸毎の主人の手に移され、讀まれ、點頭かれたか、それは吾々には解らぬが、兎に角何とか言つて來るであらうと、頻りにその結果を待つて居た。

三日経つた。

けれど何うしたのか返事が來ぬ。

『何うだ、君の處には來ないか』

『來ない』

『何うしたんだナ』

また一日。

『まだ來ないか』

『來ない』

『可怪しいナア』

ところが五日目にはその待焦れた返事が三軒一緒に來て、自分の下宿に再び三人、寄り集つた。

香嶽樓から來たのは、さぞ年老いた人が書いたであらうと思はれる御家流の細い葉書。弓削新太郎殿の殿の字が非常に大きく、弓の字などは意氣地なく震へて居る。昔風に極く崩して書いてあるので、それを完全に讀むには一方ならぬ努力を要するのであつた。けれど書いてある意味は極々普通平凡で、これと言つて人の心を惹く様な箇所は少しも無い。これは落第！ と次の蔦屋のを見ると、これはそれよりも一層烈しい活版印刷！ 間代、食料、調度料などが一面に刷つてあつて、客に對する文などは一句だに無い。當世流で、却つてこれが好いと云ふ人が多いかも知れぬが、自分等のやうなロマンチックな胸には、何の響をも何の面影をも何の興をも起さしめないのは遺憾である。楮、最後の梅屋は？ と見ると、これは又非常な鄭重。葉書で済むのを態々封書にして、女文字かと思はれる程すらくくと達者な筆跡の、文章も滿更ならぬ書振ゆかしく、釣込まれて讀んで行くと、先始めに毎々の愛顧を謝し、次に今の光景の寂寞にして蒼蠅き客などの一人だになきを言ひ、次に防寒具の完全に整頓せる事を述べて、

決して寒氣を感じしむるやうな不取扱は爲ぬと言ふ事から、間代、食料、調度料に至るまで、その記事の綿密なる事、前の二軒に比べると、殆ど雲泥の相違がある。

『これだねえ』

『行くんなら此處だねえ』と異口同音。

少時してから、

『何うだね、行くかね』と今川は訊ねた。

自分は無論行く積りであつたし、又非常に行きたくもあるのであるが、その手紙と前後して國から少し話し度い用事があるから、この春休みには是非歸つて來いといふ手紙を受取つたので、返事しかねて、少し躊躇して居ると、

『何うしたんだえ、厭に悄氣ちやつたぢやないか。行くんなら、一緒に行かう、僕は別に差支ないのだから……』と愈々迫る。

『君は何うだ』と自分は櫻井に向つて訊ねた。

『僕は行つても好いけれど』

『けれどなんざア困るぜ！』と傍から今川が言葉を挿んだ。

『僕は行きたいけれど……實は少し金が足りなくなつて了つて……』

それと同時に、自分も、

『國からかう言つて來たもんだから』と手紙を今川に示した。

『おや、おや！』とさも落膽したやうに今川は言葉を落して、『それぢや聞いて遣つた甲斐がありやしない。厭になつちやアうナア』

『僕は行き度くつて仕方が無いんだけど……』

『櫻井は好いんだらう、別に差支は無いんだらう、金位何うでもするア、行き給へ。僕と一緒に。僕は一人ぢや厭だからナア』

『行つても好いけれど……』

『行き給へ』

少時経つてから、

『僕は廢さう！』

『厭になつちまふナア、君等は何うも不熱心で可かん！』

『君も廢しちやい！』と今度は櫻井から逆撃に出た。

『呆れちやアうねえ、君達は。自分で散々計畫して置いて、勝手に自分で破壊して置いて、その舉句「君も廢しちやへ」は酷いね。餘りだね』

『櫻井、君は行き給へな、僕は國からさへかう言つて來なけりや、行き度くつて仕方が無いんだけれど……』と今川の常に似ぬ熱心を氣の毒に思つて自分は言つた。

『僕は廢す！』と櫻井は斷乎として動かぬ。

* * * * *

今川は一人では厭だと言つて居たが、それでも猶鹽原の風景がその心を動かしたと見えて、春休暇に故郷の下總に歸つた三日目に、自分は野州鹽原の消印を捺した一葉の葉書を受取つた。そしてそれにはかう書いてあつた。『僕は一人で此處に來たのを此上なく喜んで居る。君や櫻井などと一緒であつたら、決してこんな美しいある物を全く占むる事が出來なかつたに相違ないと思ふと、君等の不信であつたのを神に謝せずには居られない。思ふに、君はこの葉書を読んで、何の負惜みと言ふであらう。負惜み、負惜みも時には好い、負惜みの悲しき境遇をも時には神様が惠んで下さる。君、その惠は何んな物であると思ふ。中てゝ見給へ』

自分は思はず微笑んだ。先生一人で行つて淋しさの苦しまぎれにこんな文句を書いて寄越したのだなと思つた。けれど、その鹽原の山中の風景は流石に自分の空想を引いて、其淋しい溪流に向つて友の一人ぼつ／＼歩いて居る後姿がそれとなく眼に映つた。

四

『漸く歸つて來たつてね？』

『あゝ』

『君、逢つたかね？』

『逢つた！』

『一體何うしたんだ？』

『どうも變だよ』

『何か事でもあつたのかね？』

『先生は、何にも有りやしない、少し悠々調べて歸らうと思つた物が有つたから、それでつい遅くなつたんだつて言ふけれど、何うも様子が變だよ。丸で一言一行が此間とは違ふんだからね』

『何ういふ風に』

『何ういふ風につて。何だかかう鬱ぎ切つてる様で、僕等と話を爲て居ても、奥齒に物が挟まるやうな、何か祕密を心にかくして居るやうな處が見えて、何うも變だ、第一、君、何んなに調べて歸らうと思ふものが有つたつて、試験前ぢや無いか。肝心の卒業試験前ぢやないか。それなのに、四月の初に行

つて五月の中頃まで鹽原から歸つて來ないなどとは只事ぢや無い。殊に、先生は、僕等のやうな怠惰者とは違つて、熱心なる勉強家なだからナア』

『本當だ』

『何うも變だよ、何か事が有つたんぢや無いかと思ふよ。僕は左様思つたから、釣出して見ようと思つて、色々鎌を懸けたけれど、先生容易に打明けようとも爲ない。そして、際どい處まで行くと、巧にそれを外して了つて、他の事を言ふから始末に終へない。それもね、君、二月前に見た今川君なら、何んな堅い壘でも打破つて了ふのだけれど、丸で人物が違つた様に、その態度が一變して居るんだから、驚いて了ふよ』

『何うしたんだらう？』

『何か事が有つたに相違ない。僕は竊に案ずるに、鹽原の温泉には美しい魔物か何か棲んで居て濃厚なる今川君を誘拐したのではあるまいか』かう言つて、元氣なる櫻井讓次は笑つた。この會話は、學校の庭の新緑を二人で歩いて居る間に交されたので、自分は親友の今川成義が鹽原に行つた切り、手紙を遣つても返簡も寄越さず、學校が始まつても歸つて來ず、何うしたのか知らんと心配に心配を重ねて居る途端、不圖、今朝歸つたといふ報知を得て、一安心したその午後、ゆくりなく寄宿舎の傍で、櫻井讓次に逢つて、それで伴立つてこの會話を始めたのであつた。

少時してから、

『僕はまさかそんな事は有るまいと思ふけれど……』と自分が口を開くと、

『逢はない中は、左様思ふのも無理はない。今川君のやうな意志一方で物事を判断して居る人がそんな事に迷はされるとは鳥渡想像が出來んからね。』と櫻井は一寸途切れて、『けれど、僕の考では、これ迄十分に開けなかつた先生の性格のある部分が今回或る物に觸れて、忽然として不可思議の發展を爲たのぢやあるまいかと思ふね。その證據には、態度が丸で變つて居る。同じく沈着ではあるが、何處か精神に狂つて騒いで居るところがあつて、眼色も元のやうに靜かに澄んで居ず、體も何處かそはくと落着かない。まア、今夜にも行つて見給へ、君も屹度左様思ふから』

『體は瘦せたかね』

『瘦せたツて言ふでも無いが、何處かかう物思に沈んだといふやうな處がある』

『お安くない話だナア』と自分は思はず笑つた。

『本當にさ！』と友も同じく。

『少し冷かして遣れば好かつた』

『それや、隙さへありや、僕の事だから、冷かしもするし、笑ひも爲るさ。けれど、その一寸の隙も無いのだから堪らない。大眞面目で、少しでも突込まうとすると、すぐ厭な顔を爲るのだからね』

『それア、何うも唯事ぢやない。何うもそれは問題が大き相だ』と自分は歎息して、そして、

『卒業試験を前に抱へて、そんな大問題に逢着しちや困るナア』

『本當だよ』

又五六歩。

『そして、鹽原の事を少しは話したかね？』

『うん、少し話した』

『何んな事を』

『何アに、唯景色の好いといふ事さ。漸く五月に入つてから、桃や梅や櫻などが咲いて、今はまだ八汐の躑躅などが眞盛りだといふ事だ。始めは淋しくつて、話相手が無くつて、非常に困つた相だが、段々家の人や、近所の者などと懇意になつて、歸る頃には別れるのが辛いやうな氣が爲たと話して居た。景色の好い事と、温泉の清潔な事は、それは非常な相で、箱根でも、伊香保でも、熱海でも、とても彼處には敵ふまいと言つて居た。それに、散歩する區域も却々廣く、溪流の上流に遡ると、材木岩の奇勝があつたり、山の方に登つて行くと、炭焼の谷の奇觀があつたり、随分彼方此方を探險した相だ』

『それで、梅屋は何うだつたつて……』

『梅屋、うん、旅亭か、その話も少し爲て居た。何でも鹽原で、一番古いのは梅屋で、一番繁昌して

居るのは香嶽樓だけれど、梅屋も敢て二流に下らない相で、その款待が深切で、丁寧で、客に無駄遣を爲せないといふところなど却々古風で好いつて褒めて居た。何でも終には婆さんや主婦さんなどと親しくなつて、家の様な氣が爲て歸る氣にならなくつて仕方がなかつた相だ』

『娘でも居るんぢや無いか』

『何んとも知れん、そんな事は噓にも出さなかつたけれど』

『それで、少しは勉強して來た様子かね』

『何だか、どうも覺束ないものだ』

『經濟書がまだ切つて無かつたし、國際法もねつから手がつけて無いやうだつたから、調べる者だつて、何を調べたのか解りや爲ない』

『この試験前で、どうも、それは、困つた者だ』

『けれど、まア、今夜でも行つて、よく觀察して來給へ、僕は思ひ過しを爲て居るかも知れんから……。けれど僕は決して觀察を過つて居ない積だ！』

いつか大學の門を出た。自分は右、臺町、櫻井は左、駒込に歸らなければならぬので、一寸立留つたが、

『何うだ、これから僕の家に行つて、一緒に先生の處を襲つて見る氣は無いか』と自分が誘ふと、

『いや、今日少し調べるものがあるから、又にしよう。失敬！』
『左様なら』

二人は別れた。

五

成程櫻井の観察した通り、今川成義はこの一ヶ月半ばかりの中に甚しく變つたのである。昔は極の落着いた、鳥渡の談話にもすぐその理性的長所を顯はすのが常であつたのに、今は其胸があるものに向つて絶えず憧がれて居る様子で、時々堪へられないやうな長嘆息を吐く。昔は何も彼も吾々の間には遠慮なく打明けて、露隠す處が無かつたのには何だかかう物を包む様な態度が見えて、一步突込んで聞かうとすると、すぐ顔色を悪くして厭に鬱ぐ。昔は快活で、透徹で、敏捷で、此方が何んな混亂した考を以て向つても、立地にそれを判断して、曾て澁滞するところが無かつたのに、今は自分から迷つて、自分から苦んで、自分から煩悶して、殆ど遺瀨が無いといふ風があり／＼と舉動に見える。否、そればかりではない、顔色の上、身の上にも無限の變化が認められるのであつた。先づ頬は昔より瘦せ、眼は昔より輝き、唇は昔より燃え、髪は昔より亂れ、額は昔より物思はしげに、何一つその變化を表して居らぬは無いのである。

『何うも非常に變れたね、何うかしたぢや無いか』自分が訊くと、
『否、何うも爲やしない！』と空々しい。

『まさか、山中で野菜物ばかり食つて居たからでもあるまい』と自分は笑つて、『櫻井の評では山から下りて來なかつた事といひ、態度の變つたところといひ、何うも何か有つたんだらうツツて言つて居たぜ』と一本突込んだ。

『馬鹿な！』と笑つて答へない。

『何も隠さんだつて好いちやないか』

『隠しやせんよ』

『それぢや何ッして一月半も山から下りて來なかつたんだ？』

『調べ物があつたからさ！』

『虚言だよ』

『何故』

『何故つたつて態度が表白してる』

少時沈黙。

『梅屋に娘でも居たんだらう』

『馬鹿言つてらア』と軽く言つたが、氣の故か何だか顔の色が少し紅くなつた様に見えた。

『隠さんだつて好いぢやないか。僕等ア、冷かすんぢやなし、人に吹聴して歩くんぢやなし、寧ろ同情して君の幾分の煩悶を醫やして遣らうとして居るんだ。これでも、君、心配してゐるんだ！』

『それや有難いけれど、有りも爲ない事を白状しろつたつて、それア無理ぢや無いか。僕は困つて了ふ！』と言つた。其聲が如何にも眞面目で、如何にも眞實らしいので、それでは自分等の推量は過つて居つたか、自分等の觀察は違つて居つたかといふ氣も出て、その儘それを追窮するのを止めて了つた。そして、種々鹽原の話やら、試験の話やら、學科の話やらを、楽しく面白く、半日語り合つて、日の暮れ暮れに下宿に歸つた。

六月となると、試験がもう近いので、殆ど必死と言つても好い程の烈しい勉學、學校にも碌々教授が無いから、一日に一時間行つたり、二時間行つたり、餘は二階の一室に籠つた儘、筆記の出來上つたのを幾度となく讀み返す、友人のを借りて不完全な筆記を書き加へる、参考書を読む、表を作る、その忙しさは眞實に譬へやうも無い位。それも毎日であるから、終には頭腦が勞れて、夜などは書籍を讀んでも、少し込入つた議論になると、何が何だか、更に論理が分らなくなつて遂には自暴を起して寝て了ふ事も度々ある。であるから、友人が遣つて來ても、始から終まで皆な試験の準備の話ばかり、流石の自分も文學書類を少時手から離したのであつた。それも其咎である。この難關さへ一度通過すれば、滑か

なる浮世の大道は髪のごとくかれ等の前に横はつて居るのであるから。

けれどわれ等三人は猶絶えず互に往來して居た。櫻井の説によると、今川の態度は今猶依然たりで、何うしても鹽原にはかれを迷した者が居るに相違ないと言つて居た。現にある時などは、机の上に女文字で書いた手紙の斷片が散ばつて居て、『こひしきくわが君』と書いてあつた文は見たと鬼の首でも取つた様に得意になつて自分に語つた。又一度は本郷の勸工場で今川が女の半襟や簪を買つて居る處を見付けて、酷く取占めて遣つた事もあるといふ。其時は先生酷く弱つて、親類の娘に遣るんだなど、辯解して居たけれど、何うも先生には贈物をするやうな親類に娘のあるのを今迄つひぞ聞いた事が無いから必定鹽原に送つて遣るに相違ないと話した。實際かういふ證據は無くとも、今川の非常に迷つて居るのには、自分の眼にも明らかに見えるので、先生、この大瀬戸場で、この大問題に逢着して、太く苦しんで居るのは、その一言一行によつてもよく解る。ある日、自分の下宿に一寸遣つて來たが、非常に浮かぬ顔をして居るから、

『何うしたね』と訊くと、

『非常に弱つちやつた、今年はとても駄目かも知れん』

『何故？』

『何故だか、勉強しても、氣乗が爲なくつて仕方が無い』

『鹽原の病みつきでかね』

『何うだか知らん、そんな事は……』と長大息を吐いて、『本當に何故だか知らんが、何を見ても氣乗が爲なくつて面白くなくて何うも困つた』

『白狀しちやい給へ』

黙つて居る。

『何うせ、解るから、白狀しちやい給へと言ふのに……』

『君は、國際法の二月頃の筆記を持つてるだらう』と全然關係のない事を言出した。

『持つてる……けれど、まア、それよりも……』

『貸して呉れ給へ、僕は丸で國際法は手が着いて無いんだから……』と言つて、更に、

『あゝつまらん！』と絶叫した。

『厭に厭世家に爲つたぢやないか』

それは聞かぬ風で、

『あゝつまらん、つまらん！ 試験なんか一層やめちまはうか知らん！』と続けざまに絶叫しながら體の置き場所に困ると言はぬばかりに、氣怠るさうにとどまりと體を横に倒し、左の手で柎し氣に頬杖をついた。眼が凹んで、頬の肉が落ちて、それは氣の毒なほど憔悴して居る。

『一體何うしたツて言ふんだ』

『まア好いよ』とさも蒼蠅さうに言つて、そしてぢつと眼を見張つた。其光は絶えずある空間に向つて放たれて居る天上の星の輝きのやうで、一刻毎にさし迫つて來るらしい胸の煩悶は、靜かなる海岸に烈しく打寄する怒濤に似て居るのであらう。自分はぢつとこの意味深い一場の沈黙を見詰めた。

少時経つた。

思返したやうに立上つて、

『それぢや貸して呉れ給へ』と自分の渡す五冊ほどの國際法の筆記を受取り、『仕方が無い。落第したつて仕方が無い。遣れる丈け遣つて見よう』

失敬とも言はずに、ふいと室を出て行つて了つた。

『非常に變つちやつた！』と思はず自分は獨語した。

六月の下旬から、徐々試験が始つた。かうなると他の事などを苦にして居る暇は無いので、唯々他より少しなりとも成績よく遣らう、一科目でも失敗しないやうに注意しようといふ氣ばかり先に立つて、腦中に往來するのは、其日其日の成績の如何と明日の試験の復習の準備ばかり、殆ど我を忘れて了ふほどの忙しさ！ 毎日新阪の上の新緑の梢深くなつた蔭をてくく〜と歩いて行つて、そしてその同じ路を或は喜び或は愁ひつゝ歸るばかり、友も來なければ、人も訪ねず、唯々讀書の三床にのみ苦しい日を送

つて居たが、憲法、國際法などの難かしい課目になつて來ると失敗して中途で匙を投げて了ふ學生が段々出來て、學校の長い廊下は今日は誰がやめた、誰が來ないといふ評判が日毎に喧しく、至る處に何となく殺氣が立つて、平生洒落の好きな平塚といふ男さへ、黙つて浮かぬ顔をして茫乎ぼんぼ立つて居るのを自分自分は認めた。

今日で、兎に角に難關を切抜けるといふ日の午後、答案を納めて、扉を排して出て來ると、十分ばかり前に出た今川が青い顔をして、兩手をだらりと下けて、長い廊下をぶらりくやつて居る。自分の顔を見ると突然傍に寄つて來て、

『僕は今日で投げる！』

『何うして？』

『全然失敗しくじつて了つたから』

『そんな事を言はずに、遣れ、遣れ、折角此處まで遣つて來たんぢやないか』

『遣つたつて、駄目に極つてるんだから』

『そんな事はない』と言つたが更に、

『何を失敗しくじつたんだ？』

『今のを、すつかり失敗しくじつちやつた』

『何に、大丈夫だから、遣り給へ』

『駄目だ』

自分は兎に角試験を終るだけは終り給へと無理に勸めて歸つたが、そのあくる日は何うだらう先生出て居るか知らんと内々心配しながら行くと、流石に捨鉢すてばちに爲り切れなかつたと見えて、渠は青い顔をして、南の窓に凭り掛りながら、兀々答案を作つて居た。殆ど一ヶ月も煩悶苦痛の空氣で充ち渡つて居たこの試験室！それも今日限りと思ふと、氣の故か、誰の顔にも新しい希望が花の如く畫かれて居るやうに思はれて、自分は何となく愉快を感じた。最後の煩悶、最後の苦痛、最後の戰鬥、最後の答案……。自分の扉を排して戶外に出る時には、今川は猶ペンを離さずに頭を下けて頻りに書いて居た。

*

*

*

*

*

*

*

*

それがそのあくる日には先生もう鹽原に飛んで行つたといふ事を、櫻井から聞いた。そして櫻井も、一先芝の家に引上げて、二三日用を達してから、後を追つて鹽原に行くつもりだ相で、『僕が、すつかり、種を上げて來るから、待つて居給へ』と得々として言つた。

六

その所謂種を櫻井から聞いたのは、確か八月十五日で、自分が故郷の下總から將來の方針を略定めて

再び上京した三日目か四日目であつた。思ひも懸けず突然遣つて来て、

『すつかり上げて来た！』と言ふから、

『一體何うしたんだ』と膝を向けると、

『丸で、小説だよ、君。筆さへ立ちや、立派な小説が出来る』

『先生、まだ向うに居るのか』

『否、一緒に歸つて来た』

『よく歸つて来たね』

『居ても仕方が無くなつたんだもの……』

『ぢや、もう終を告げたのかえ』

『The end』と書くには、まだ少し早いかも知れんけれど、まア、一段落はついたと言つて好からう

ね』

『一體何うしたんだ。素人か、それとも魔物か』

『まア、聞き給へ、それは本當に小説だから』と言つて話し出した。

聞くと、梅屋には果して娘が居たのださうだ。名はお梅と言つて、年は十八、容色も却々すぐれて居て、鹽原などの山の中では、他に探しても無いといふ程の評判娘であつたといふ。ことに、一三年前ま

で東京の親類に来て居て、行儀作法も一通りは見習つたし、學問も少しは爲たので、東京生れと言つても黙つて通る位の人品は十分に備へて居る。そして、この女の表情の力を最も完全に顯して居るのは、その光輝ある黒い眼と、脊のすらりと高い柔かな體のこなしとにあるとかで、凡そ女の眼であの位伶俐な働を爲る眼は見た事は無いと口の悪い櫻井も感心して自分に話した。

けれど今川は彼地に行く早々、この娘に戀したといふ譯ではない。寧ろ今川は始めは娘の居る事にさへ氣が付かなかつた位であつた。今川の行つたのが四月の一日、東京でさへ何うかすると雪が降る位の時侯であるから、まして萬山の中の一村落。温泉があるとやつても寒い、寒い、寒い、それは骨に染み徹るばかりの寒さ、まして木枯が溪流の騒がしい音に伴れて、絶えずその狭い淋しい谷を襲ふので、客も無く閉め切つた二階三階の雨戸はがたくと鳴つて、時には鼯鼠なども隙を求めて入つて來るといふ始末、淋しいの、淋しくないのつて、それはお話にも何にもなりや爲ない。今川の居る室は、丁度二階の東の一隅の六疊で、その前に當るところ丈け、雨戸を五六枚明けて、室の中央に炬燵を懸けて、其傍に桐の大きい唐机を置いて、それで、今川は孑然と讀書して居た。客といふものは、殆ど一人も無い様子で、三度々々下婢が飯を運んで來るばかり、始めの二三日は殆ど無聊に倦んで、たとへ靜かな處が好いといへ、物好にもこんな山の中まで來なくとも好かつたものを……と後悔した位であつた。只、内湯の清潔なのと、溪流の美しいのとは、淋しい中のせめてもの心遣で、退屈すると、湯に飛込むか、散歩

を爲るか、この二つで辛くも心を慰めて居た。ところが、四日目の夕飯の給仕に始めて遣つて來たのが、その娘。いつもより少し後れて、燈を點けるにはまだ早く、室の隅々には薄暮の影が少しづつ、押寄せたといふ頃であつたといふ。膳を運んで來た様子だから、例の下脹れの莞爾くした下婢の氣で、何氣なく振返ると、薄暮の覺束ない光の中に輪廓鮮かに震ひ付くばかり美しい顔。

『遅くなりまして……』と嬌喉一轉。

今川は非常に面喰つたといふ事だ。けれど先生の事だから、左程それが爲めに心を惱ましも爲なかつたに相違ない。美しい女が居るな位に思つたに過ぎないのである。ところが、それからは前の下婢が里に歸つたとかで、毎日三度三度その美しい人が給仕に出る事になつた。今川の様な木強漢でも美しい姿は眼につくと見えて、前のお多福の下婢よりは、つい繁々その顔も見る氣になるし一言二言話も爲懸けて見る氣にもなる。遂にはその顔を見度いが爲に一時間も前から飯の來るのを待つやうな氣も起つて來るといふ工合で、段々日を積むに従ひ、度を重ねるに連れ、言葉を交す數の多くなると共に、今まで百里を隔て、互に相知らなかつた二つの心の一角と一角とが不思議にも相觸れて來て、其處に何とも知られない微妙な暖かさとなつかしさと嬉しさと樂しさとが集つて、離れ難いと言ふやうな情が盛に起つた。

けれど、これだけなら、まだ何の事はないので、路上の少女にも毎日逢ふとこの位の感情は起るのである。ところが、無聊に任せて、段々娘の身の上などを聞くと、それが丁度次第に深くなつて行く泥深い沼のやうに、愈かれの心を惹いて、つい、陥ると氣が付きながら、何うする事も出來なくなつた。

娘は十一の時に母に別れ、今は生のではないといふ。後に子供が無いから、世の例のやうな無慮な養育は受けなかつたけれど、美しい伶俐な娘にやさしい母の情の無いほどそれほどロマンチックな事はあるまい、まして娘の眉のあたりには絶えず愁の雲が懸つて居て、體格の瘦せて居るのにその平生多病であることが察せられ、乳の小さく胸の狭いの、いろく悲しい思を藏めて居るであらうと想像されて、憎ましいといふ感が簇々と起る。これがもしまぎるゝものゝ多い東京であるなら、さういふ感を起しても、直き何物かで醫す事を得るけれど、この寒い、淋しい、満目只荒涼たる山中の温泉では……

まして、次のやうな事があつてから、愈其戀は募つて行つた。

それは他でも無い。四月十日頃のことださうな。ある晩非常に寒氣が烈しく、まだ日の暮れぬ中からすつかり雨戸を閉て、了つた事があつた。今川は夕飯を済したが、炬燵に入つて居ても胴震がして寒くつて、仕方が無いので、湯にでも入つて暖つて來ようと思つて、其儘廊下を湯殿に行つて、大凡一時間近くも出たり入つたりして居たが、やがて好い心地になつて、手拭を下けて、廊下にゆるく戻つて來ると、ふと、前に黒い影が倒れて居る。

驚いて見ると、それは娘である。癪持の身の急に差し込んで來たのであらう、白い手を胸の鳩尾の處

に當てた儘、聲をも立てずに苦んで居るではないか。

『何う爲ました!』と叫んで、今川はいきなり身を寄せて、その白い胸の邊に手を挿入れながら顔をもつけるやうに近く、

『何うしたんです』と二度三度。

男の湯あがりの暖かい手に抱起されて、少しくわれに返つたらしく、亂れた髪の眞蒼の顔を擡けながら、(廊下は暗いけれど湯殿の洋燈の光が微に此處に及んで居た。)

『え、もう、……治ります、少し……籠^{こま}上げて參つた者ですから』と微かな聲。

『癢が起つたんでせう、こんな寒い處に、こんなにして居ては、それこそ猶悪いですから』

『え、え』と微に點頭いたが、再び烈しい差込が遣つて來たと見え、いきなり、兩手を胸の鳩尾に當て、苦み始めた。

今川はこれは好けぬと思つたから、駈出して行つて、これ／＼と店に知らせると、いづれも驚いて繼母が走つて來る、父親が飛んで來る、下婢が遣つて來る、それは／＼一方ならぬ騒動。

床に臥かしてからも、二度三度烈しい差込が來たさうだけれど、一時間も経つと、それも段々治つた相で、『お蔭様で、まことに……』と繼母が二階に禮を述べに來た。

聞くと、此度のやうに癢を起す事は度々あるとの事で、『何うも、病身で困り切ります。一粒種ですか

ら、もしもの事が有つてはと、幼い頃から心配致したのは一通や二通ではありません、東京の醫師にも懸けましたし、いろ／＼療治も致しましたけれど、何うもすつかりといふ譯に參りませんで困り切ります。それに苦勞性で、一人でいろ／＼な事を考へ出しては一人で心配して居りますので何うも爲方が無いので御座います。今少し捌けると好いのですけれど……それも性分でも致し方がありません、あれの亡くなつた親と言ふのが、矢張苦勞性だつたつて申しますが、好い處は似ないで、悪い處ばかり似るもので、おほ／＼／＼』と言つて下りて行つた。

美しい容色、病身、苦勞性、癢持、一粒種、繼母、——何とロマンチックでは無いか。

まして温泉の淋しい宿。

『ラブに落ちるのも無理ぢや無いね』と櫻井は話し懸けて笑つた。

『本當にロマンチックだね。これぢや先生、擒になつたのも無理やないよ。その場合に處して巧に斬抜けるのは、それは餘程場數を踏んだ剛の者でなけりや、到底駄目だ』

『君なんかでも脆く參る方だらう』

『無論サ』と自分も笑つた。

『それから何うした』

『それから先生、段々家内の者とも親しくなつて、娘の寢て居るところにも見舞に行く、東京から送

つて来た菓子などを贈物にする。いよく深みに陥つて行つた』

『それで、何うかね、その娘は、君が見て何う思つた？』

『中々鋭敏だね、一寸話をして田舎の娘らしい處は少しも無い。ことに、僕の驚いたのは、表情の力の全身に満ち渡つて居る事だ。譬へば先自分の思つて居る情を表さうとすると、眼色、態度を巧に働かして、それをすぐ人の心に染み込むやうに傳へる。口數を多く聞かずに、相手に自分の思ふ所を默契せしめる。その情の純粹ですぐれて居る事は、實に驚く可きものありと言つて宜しい。今川の處に来た手紙を見ても解るが、普通の女には何うしても書けぬやうな複雑な情が巧にその中に露はされてあつて、小説中の女性が言ひさうな事を言つて居る』

『一種の天才だね』

『さう言へばさうかも知れん。どうも、僕は随分女を知つて居るが、あんな情の烈しい女は始めてだ』

『それから何うしたね？』

促されて櫻井は話を續けた。

今川は次第に親しくなつて、十日経ち、二十日経つても、東京に歸らうとの氣は少しも出ず、娘は、娘で、病氣が治つてからは、隙さへあると、今川の室に行つて、只うか〜と面白く送つて居るといふ始末。これには家でも多少心配したに相違なく、今川が當世流の男であつたならば、とうから試ふべから

ざる罪惡を犯して居たのに相違ないのである。けれど、幸にも戀の神は二人を護つてこの青年男女をしてさる苦痛暗黒の谷に陥らしめなかつた。

別る、前日、娘は別離を惜んで、またこの夏には必ず来て下さいといふ事を返す返すも述べたが、終に、記念に私は好い物を貴郎に上げますから……と絶々に言つた。好い物とは何であらう、と好奇心に驅られて、その贈物を何時か〜と待つて居たが、其晩も持つて來ず、其朝になつても更に音沙汰が無い。何うしたかしらんと怪しみながら、ふと廊下の處にかの女が悄然と泣きさうにして立つて居るのを見たから、傍に寄つて、

『何か呉れるツて言ふ物は？』

『もう貴郎の包の中に入れて置きました』

『虚言ばかり』

『虚言なものですか。けれど此處で明けては不好ませんよ。汽車の中で明けて下さい！』

汽車の中で、明けて見たその贈物は何であつたらう。縮緬の色々あつめて丹精して縫つた肘附と一通の手紙。

その手簡には何んなに細い優しい情が書かれてあつたか。始めに、おのれの到底山の中に埋れて了はなければならぬ事を敘し、次に、いかに御身の眞心の厚かつたといふ事を記し、最後に、まゝならぬ浮

世の悲しさをさまざまに歎いて書いてあつたが、それを見た時には、いつそ引返して再び鹽原に行かうかと思つたと今川は言つた。そして、それからといふものは、絶えず手紙が二人の間に往復されて、半襟を送つて遣る、簪を送つて遣る、向うから愈烈しい切な情を言つて來るといふ工合で、卒業近く、渠の煩悶して居たのはそれが爲めだ。

ところが、試験の今二日で終りにならうといふ日に、娘から手紙が來て、親に強ひられて餘儀なく明日養子と結婚するといふ事を報じて來た。

大苦痛、大煩悶。

『よく聞いて見ると』と櫻井は話の調子を替へて、『今川から、手紙を遣つたり、種々な物を送つたりするものだから、親達は心配して、間違の無の中に身を堅めて了ふ方が當人の爲めと、薄々決つて居た親類の従兄かに當るものを至急に呼入れて結婚させたものらしいよ』

『それぢや、此間行つた時、もう養子は居たのかえ』

『さうさ』

『それは何うも……』

『なもんだから、今川先生、自暴自棄の形で、酒ばかり飲んで仕方が無かつた』

『女は何んな顔をして居たえ。餘り好い顔も爲てなかつたらう。言つて見れや、騙したのも同じだから』

らナ』

『さうぢや無い。それは誤解だ。女は非常に養子を嫌つたんだ相だ。だから、今川が行くと、顔を見ては涙を流し、手紙を書いては情を訴へ、終には癪を起して寝て居つた！』

『養子は何んな男だ』

『つまらん平凡な人間さ。今川とは男振も悪いし、田舎臭いし、學問は無いし、到底比べ者にはならん』

『それぢや、今川は戀はあるけれど、浮世の義理で仕方が無いといふやうな譯なんだね』

『左様さ』

『けれど、これは仕方が無い……』と自分は少し考へて、『世の中には歴史が作つた階級の差別と、賢愚の相違がある。位置や、階級や、學問が相應して居ないと、互に相思つて結婚した處で遂には不幸だ。それよりは一寸惚れたのなどは、直き忘れて了はうから、相應なものと結婚するのが得策だ。今川なども一寸惚れたと言ふので、無理に結婚したつて、遂に幸福は得られないのだから、さう極つて了つたのは好い事だ』

『左様言へば、左様に違ひないが、何うもあの女のはさう手軽くは無いやうだ。非常に惚れてるんだから……』

『それぢや、姦通も爲兼ねまいといふ風なのかね?』

『まア、左様言つた風なんだ。男は二階で自暴酒を飲んで居るし、女は下で癢を起して寝てるッていふ騒ぎなんだから、何んな事が始まらんとも限らん。だから、僕は、いろ／＼に和めたり賺したり、威したりして漸つとの事で伴れて歸つて来た』

『先生何處に居るね』

『宅に居るだらう』と噂を爲て居ると、廊下を走つて来る人の登音がして、續いて階梯を上つて、顔を出したのは赤ら顔のいつもの下婢。

『今川さんが』

『お上んなさいッて……』と言つて、

『噂をすれば、影だ、もう遣つて来た』と二人で笑つた。

今川成義が入つて来た。

『櫻井、來てるね』と言つてじろりと見る。

『すつかり、艶聞を聞いちやつたよ。好男子はだから困ると言ふんだ』と自分が言ふと、

『櫻井、もう饒舌つちやつたのか、困るナア』

『困らたつて、仕方が無い。僕は旅費を費つて、態々其の材料を取りに行つたんだもの』

『怪しからんよ、君達は』

『何方が怪しからんだ。人の女房に癢を起させたりして……』

一座は皆笑つた。

此日は非常に話が乗氣んで、鹽原の話やら、戀愛の話やら、姦通の場合の問題やら、試験の成績やら、將來の方針やら、いろ／＼さまざまの批評も出れば、議論も出る、冷評も出れば同情も出る。そして賑かさは殆ど梁の塵を動かすばかりであつた。殊に、卒業祝に（成績は昨日張出されて、あまり好い方では無いが今川も兎に角及第した）西洋料理を五品ほど取寄せて、葡萄酒とを出したから、いづれも十二分に快よく酔つて、果ては久し振の拙い櫻井の詩吟も出た。

『何うだ、君』と櫻井は自分に向つて、『これから鹽原に行かんか』

『静かかしら』

『今月さへ過れば、ぐつと静になる』

『静なら行つても好い』

自分は、高等文官試験に應ずる準備に取懸る決心であるから、何處か静かな處をと思つて居たので。

『行き給へ。半月位はわい／＼騒いでも好いだらう。跡さへ静になりや』

『それは好いさ』

『行き給へ』

『行かうかな』

横になつて居た今川は不意に、

『僕も行かう!』

『申戯言つちや困る! 漸く昨日無理遣りに伴れて来たんぢやないか』

七

翌日自分は櫻井と偕に野州鹽原の温泉に行つた。

その山、その水は自分に何んな印象を與へたであらうか。何んな感覺を起さしめたであらうか。自分の鹽原を思ふのは、既に久しい前からで、その奇岩、その溪流、その温泉、その洞窟、寫真を見る度に、人から噂を聞く度に、殆ど戦慄が出るほどに深く深く憧がれて居たのであつた。それが、今、十年の苦學の結果たる卒業試験を済まして、これからは花々しく浮世の舞臺に打つて出ようとする勇しい晴々しい望ましい心を以て、その美しい自然の大景に接するのであるから、胸が引緊めらるゝやうに烈しく躍つて、那須の平原の熱い日に照り付けらるゝのも苦にも思はず、寧ろ打渡す山々の深緑の上にふはくゝと白い雲の畫のやうに靡き渡るのを、限りなく楽しくうれしく打見やりながら、一刻も早く其の風環に鳴

すが如き溪流の眼前に展けられんことを望んだ。山に入つて、一步二歩その涼しい樹蔭、その滴るごとく深緑、不意にその間から夢かとはかり打開かるゝ溪流の屈曲大屈曲。一ところ美しく日に閃めいて、鏘々として流るゝ音の清さ。また心地よさ! 何んとしてもこれがこの汚れた世の中のものと思はれぬので、自分は一颯して既に全く魂を奪はれて了つた。況んや、山を廻る毎に、一景は二景を生じ、或は溪流の屈曲したるところに驚くべき危橋を架し、或は洞門の暗黒を穿ちて幻のごとき奇觀を描き、對岸岩石の奇怪、前山翠嵐の搖曳、自分は俥の上から幾度友を顧みて激賞の聲を擧げたか知れぬ。これも理であらう、自分は天然の風景に非常に渴して居ながら、五六年の間は、殆ど満足にその美を享けることを得なかつた身であるから。

自分の俥は、山と山との陰の、あんな處に路があるであらうかと思はれる嶮峻の間を、よぢよぢと右に縫ひ、左に縫つて、絶えず箒川の清瑩なる流と鏗鏘たる響とを見且つ聞きながら、次第に幾つとなく、山を背後に重ねて進んで行つた。見て居ると、雲——と言つても極く薄い極く軽い丸で烟のやうなものかふはくゝとすぐ向うの山の一角に懸つて、それに美しい日の影がさし添つて桃色ともつかず薄紅色ともつかぬ一種形容せられぬ色を染めて、それが段々上へ上へと騰つて行く。と思ふと、瞬く間、それが全く變つて了つて、今度は稍濃い灰色の雲がそのすぐ傍の山の腹からふいと出て、それが段々大きくなつて、深く濃く廣くひろがり渡る。山中の自然の變化の面白さ、自分は益われを忘れて了つた。

ふと、眼を地上に落とすと、いくら見ても見倦きぬ岩石、溪流、路傍にゆくりなく咲いて居る紅い撫子——美しいナア、徒歩ならば、折つて挿す位の風流心はあるのに……と思つた時、からりと向うの岩蔭に俤の音がして、やがて顯れたが、一臺、二臺、三臺、中央の蝙蝠傘の蝦茶の色が美しく日に光ると思つたら、乗つて居るのは、赤い帯揚をした眼の美しい十七八の令嬢、前が父、後が母、湯治歸りかと思ふと何となく懐かしい氣がして、胸が言ひ知らず動き出した。その刹那に續いて思出されたのが、友の戀した梅屋の娘！ 何んな娘だらう、何んな容色だらう、神経質だと言ふから、嘸ぞ眼が……と思ひ詰めて居ると、がらくと長い溪橋。

福渡戸はすぐ其處である。

梅屋とは、何んな旅亭。梅屋の娘とは何んな容色。自分の想像は八分までは中らなかつたけれど、その中らないのが悪く中らないので無くて、寧ろ想像外に好いのに驚いたのである。梅屋といふのは、二流の旅亭だと人は言ふけれど、その地位の高爽なこと、言ひ、眺望のすぐれて居る工合といひ、客室の清潔なさまといひ、何れにも勝るとも劣るやうな處は見えぬ。夏の盛りであるから、兼ねて聞いた寂しい冬の面影などは少しも無く、店頭には番頭三四人、下婢五六人が一齊に頭を下け褌を外して、客を迎へるといふ賑かな光景。樓上、樓下の客室にはいづれも二三人づゝ客が充滿して、階段を昇降する草履の音、廊下を走り行く下婢の聲、縁側には浴衣をぞろりと着流した八字鬘が立つて居る、欄干には束髪

の美しい少女が振袖を翻へして凭り懸つて居る、何の事はない、不意に一場の仙郷を現出したやう。自分等が行くと、二三日前歸つた櫻井が又遣つて來たので、家では非常に驚いた様子で、何うか爲たのかとか何とか頻りにそれを不思議がつて居たが、櫻井がこれと話したのに疑ひ解けて、やがて案内されたのが二階の最も上等の八疊の一室。

溪流が遠くまで見えて、山が面白く打渡されて、そして、北と南との二方がすっかり明放してあるから、風が思ふまゝに通つて、その涼しさと言つたら無い。ことに、北の山の翠微が殆ど座を壓するばかり迫つて、室にある人の顔は皆青く、夜は月が満面に射し込んで、その心地よさは到底想像に堪へぬと縷々として櫻井は語つた。

やがて下膨れの肥つた下婢が茶を運んで來て、今日は御暑う御座いましたらうの何んのか言つて居るのを、櫻井は突然、

『若い細君は何うしたね？』

『居りますよ』

『店に見えなかつたから、何處かに行つたのだかと思つて……』

『いゝえ』

『ぢや、手が空いたら、一寸來てお呉れと言つて呉れ。實は頼まれて來たお安くない物があるんだか

ら

『あら、まア、来る早々、あんな事を……』と下婢は既に薄々知つてゐるらしい。

『本當だから、左様言つてお呉れ』

『申しますよ』と笑ひながら立つて行つた。

『もう皆な知つてるのかい』と自分は驚愕の眼を睜ると、

『否、皆なツて言ふ事もないが、あの女は少し知つてるんだ。あれア、今川の初めて来た時から居る

婢だからね』

『まさか亭主は知つては居まい！』

『とは思ふが、……此間なぞ随分烈しかったから何とも知れんよ』

『困るナア』と自分は叫んだ。

自分は實際今川から色々な品物を頼まれて来たのだ。夏懸の薄い涼しさうな草花の縫のある縮緬の半襟、蒔繪の凝つた細工の施してある美しい櫛、小さい綺麗な香箱、絹ハンカチーフ、根掛など。けれど若い細君は中々遣つて来なかつた。茶を呑んで、菓子食つて、湯に入つて、欠伸の五つ六つも爲て、何うしたんだらうの十邊も繰返しても、まだ自分は其姿に接することが出来なかつた。終には倦んで、いろ／＼他の話を始めたが、段々その方に興が移つて、いつか若い妻君の事を忘れて了つた。……と、

不意に、自分の横に成つて居る後で、

『好く入来しやいまし』といふ優しい聲が爲た。

驚いて身を起すと、丸髷、赤い手柄、大縮の派手な浴衣、蝦茶と黒を合せた晝夜帯……

やがて擧げた顔、眼、髪、眉、額。

成程美人である。

『や、また来ました』と櫻井は極めて調子を軽く、

『病氣は何うです？ 治りましたかナ』

『えゝ』と恥しさう。

『今川がまた来るつて、何うしても言ふ事を聞かんで困つた！』

『あんな事を』と言つたが、その聲は氣の故か何となく沈んで聞える。

『宜敷くつて言つて居たよ、それから頼まれて来たものが澤山有るんだが……』

『虚言！』と言つて此方を見た眼！

『虚言なものかね。現にちやんとあの鞆に入つて居る。けれど一時に遣ると、餘り嬉し過ぎて、又癢を起すと好けないから、一箇づゝ遣る事にして！』と傍の鞆を開けて、先づ第一に引出したのが、その半襟。

『綺麗だらう』とそれを渡して、

『先生、一生懸命に氣を揉んで見立てたんだぜ！ これでも』

『難有う御座いました』と櫻井の戯言を眞面目に、如何にも沈み切つた態度である。自分は思つた、成程これは感情家らしい、成程普通の女性とは異つて居る。普通の女ならば、——浮氣で戀をするやうな女ならば、決してこんな眞摯な沈んだ態度を備へては居らぬ。もつと浮々した、派手な、調子の好い、臆面なく戯言を言ふやうな處が無くてはならぬ。それに、この女は態度ばかりではない、眼にも口にも、額にも、非常に眞面目な處がある。今川の戀したのも無理はない。少時してから、

『それで……』ときまり悪氣に、もぢくして、

『今川さん、もう御國に歸んなすつて……』

『唯、歸るつて言つてた、大阪に歸ると、彼地で離さないから、もう東京には滅多に來られまいつて……』

『さう』と軽く受けたが、その胸は俄に高まつて來た様子である。

暫時半襟を弄り廻して居たが、

『今一度お出なされば好いのに……』

『來たつて仕方が無いサ』

『それも左様ね』

いかにも悲しさうな調子である。

『そして……』と言葉を繼いで、『彼地に行らつしやると會社にでも御出なさるのか知ら。……それよ
りか、東京に居て御役人にでも爲つて下されや好いのに……』

『左様すれや、時々逢はれるからね』

『さういふ譯ぢやありませんけれど……』

『けれど……逢はれた方が好いんだらう』

『櫻井さんはお口が悪くつて、本當に酷いから、好い』少し顔の色を變へて、表情の力烈しき情ある
眼色を爲た。

『そりやあ、今川君のやうに、温順くつて、初心で、口數が少くつて、色が白くつて、男振が好くつ
て……』

『好う御座んすよ』と少し怒つた態度で、起上らうとする、その裾を押へて、

『まだ頼まれて來たものが澤山あるんだよ』と鞆に手を入れて出さうとする。

此時、

『お神さま、お神さま！』と呼ぶ聲が階下に聞えたので、

『呼んでますから』と慌て、押へられた裾を振切つて、貰つた半襟を急いで懐に納めながら、あたふたと駆けて下りて行つた。

一日また一日、次第に土地に馴れるにつれて、家内の光景、家族の多少、娘の態度なども段々解つて、その所謂養子なるものにも逢つて話もして見た。年が二十五とかで、脊の低い、頭顱の丸く尖つた、眼尻の少し下つた、色の白い、鼻の低い、言葉付のいやに丁寧な、一見して常識に富んで居ることがすぐ解る。何方かと言へば商人風の男であるが、此處に来るまでは同じ國の黒羽とかに小學校の教員を奉職して居た相で、理想とか空想とか愛情とか狂熱とかいふ天才肌の分子は露ばかりも無い極く質素な平凡な危つ氣の無い性質であるらしい。それは、顔を見ても解る事で、例へば眼にしる、額にしる、口にしる、眉にしる、完全に表情の力を備へて居るところは一つも無く、言ふことが丸で機械的、消極的、受納的で持切つて居る。かういふ男は一生何事も仕出來さずに神の受けたまゝの運命を従順に守つて、子供ばかり澤山に拵へて、年が老つてからは孫の守に長い日の徒然を暮らすといふ部類である。

それから、この家族の關係、これが又觀察して見ると中々面白い。娘の烈しい感情的の性質はこれは梅屋の代々の血統を引いて居るので、娘のまことの母——これは二十三で子宮を病んで死んだ——は家附の一人娘であつたが、非常な感情家で、取越苦勞ばかりして、手を附ける事が出来なかつたといふ。その祖父はそれ程では無かつたが、それでも随分剛愎持で、自分の氣に入らぬ事は何處までも遣り送す

といふ克己主義。梅屋の今日あるは實にその克己主義に負ふ所が多いので、この人は極力おのれの家を興さん事のみ心をそゝぎ、死の床に臨んでまでも、縷々節儉を説いて止まなかつたとの話である。であるから、梅屋の純粹の血統は祖父より母に、母より娘にその烈しい感情とつゝまやかな克己的傾向とを傳へたので、後に嫁して來た今の主婦や、其初め養子に入つた今の主人などは更にその性質に觸れて居らぬのである。即ち梅屋の純粹のすぐれた思想は、諸方から入つて來たいろ／＼な異つた思想に取巻かれて、壓迫されて虐待されて、緊縮されて居るのである。

それも父親なる主人公が自我の人間であり、克己の人間であつたならば、後れて嫁して來た今の主婦に意氣地なく尻に敷かるゝやうな憂もなく、また牝鶏の晨するやうな忌はしい光景を現出しなくつても好かつたのであるが、この主人公といふ人が、その顔色の圓滿にして一點不調子を認める事が出來ぬやうに、何んな失敗を爲ても、どんな過失を犯しても怒つた例は無いと言はるゝ程の好人物、萬事皆細君任せ、番頭任せ、下男任せで、娘などの平生に關しても、少しも心を惱ますやうなところも見せぬ。

唯々諾々とはかういふ人を言ふのであらうと思はれる。

さうは言ふものゝ、今の主婦が決して悪人といふでもなく、昔の小説にある様な慘酷な繼母根性であるといふでもない。否、世間の多くの後妻に比べたなら、寧ろ卓れて好い性質を有つて居るかも知れぬのである。又牝鶏の晨すると言ふのも、夫が好人物で役に立たぬ處から、自然自分から手を出さなけ

ればならぬやうに成つたのかも知れぬ。女らしい弱點はそれは相應に備へて居るやうではあるが、客に對する親切なる款待から推し、雇人を使ふ様子の行届いた工合から考へると、何うも性質の悪いものとは思はれぬばかりか、一家——ことに温泉宿の主婦として、まア卓れた立派な女と言はなければならぬ。それ故もし娘があのような感情的でなく、あのやうに熱狂的でなかつたなら、別に不自然な處は出來ずに、好い完全な家庭として平和に圓滿に笑聲屋に満ちたであらう。悲む可し、人の性格は千差萬別、親子の間と言はず、兄弟の間と言はず、夫婦の間と言はず、罅隙あれば即ち相侵し、缺陷あれば即ち相觸るゝのは、實にこの上もなき人生の恨事である。

自分は一月ほどわい／＼と騒いで居る間に、彼方此方から材料を蒐めて、皮相かも知れぬが、兎に角さういふ觀察を爲た。娘は夏場の忙しさで、緩り物を思つて居る暇も無いのであらう。朝から晩まで、下婢共に立交つて、座敷の掃除、食事の給仕と手をも留めず立働いて居るが、それでも折々は思ひ出すかして、孑然と欄干のところ立つて涙を零し相にして居る事もあれば、不意に我々の室に入つて來て何彼と今川の事を聞かせて呉れと迫る事もある。かと思ふと、さも睦じさうに夫と話しながら、自分等の室から見える中庭を小屋の方へと歩いて行くので、

『おい、見ろ……』と櫻井は指して、
『あんなに言ふけれど、あの睦じさを見ると、何うか納つて行くと思えるね』

『左様さね』と自分も笑つた。

實際、戀の何のと騒いだつて、十日一月一年経てば、段々その熱が醒め、傷痕が醫えて行くのは人間の自然で、人間が神に進化しない以上は到底理想は満足せらるべきものではないのだ。従つて一途に嫌つたものも一年も一緒に居れば、何うやら彼うやら其處に微暖ぬくもが出て來るものだ。

けれど自分はこの斷案の一面の眞理であるのを知ると共に、又、人間には他の一面の到底容るべからざる癒すべからざる悲しむべき性格のあるのを見た。それは他でもない、この梅屋の娘の胸に！

八

九月の初旬に、まだ仕残した用事があるとして、櫻井は急に東京に歸つて了つた。自分は室を西隅の六疊に移して、机を山に向つた方の一隅に据ゑて、小さい水入に娘が採つて來て呉れた桔梗を一輪挿して、獨り靜かに讀書を始めた。

山には秋の立つこと早く、二三日前の散歩に既に空の色の尋常ならず清く美しいのと、秋の氣の何處よりももなく人の心胸に沁入るのを感じたが、朝夕の嵐氣座ろに肌を襲うて、蕭々たる一夜の雨、翌日を懸けて猶晴れざりしに、浴客の歸心頓に動きて、そのあくる日は歸京の客の俤の影、殆んど溪橋の畔に絶えぬといふ始末。梅屋の二階も氣の抜けたやうにがらんとして、昨日まで喧しかった前の湯殿の

鼻歌もひつそりと音なく、絶えず昇降した下婢の草履の響も絶えぬに、その俄かの淋しさと言つたら殆ど譬へやうも無い位。まして秋の蕭颯たる悲しい氣は、山に水に、空に、草に残る處なく充ち渡つて、巖をわたる風の音は吼ゆるやうに長く遠く、前を流るゝ溪流の響は他界の消息を聞くがごとく杳かに微かに、置きわたす露、聴しけなる星、影多き空、感情の烈しい人でなくてすら、夕日のあかゝと秋の風に山の端に沈んで行くところなどを見ると、我しらず袖に涙を零すのが常であるから、多情多恨の人はこの秋の來るのに逢うて、斷腸の思に堪へぬのも無理ではない。

一日経ち二日経つて、いつか九月も半を過ぎた。毎年この頃には臺灣地方から恐ろしい低氣壓が押寄せて來て、新聞紙上の天氣豫報に警報の三つも四つも掲示されるのが例であるのに、今年は何うしたかと思議に思つて居ると、一夜、擔頭の雲俄かに騒いで、その飛ぶこと矢よりも早く、蔽ひては晴れ晴れては蔽ふ弦月の空、瞬く間に西より曇り、それと共に物凄き風梢を鳴してまだ一時間も経ぬ中に、車軸を流すごとき大雨萬山に滿つるの光景。

その凄じさ！

自分は雨戸を推して、洋燈を點けて、獨りその大風雨の天地に暴れ廻る凄じい響を聞きながら兀々と机上に商法を繕いて居た。けれど其勢が餘りに凄じく、その音があまりに烈しいので、暫し其書を読さしてどつと耳を傾けてみた。樹のなる音、風の吹る音、山の鳴り渡る音、物の折れる音、溪流の怒り狂

ふ音、をり／＼これにても足らぬかと言はぬばかりの雨の傾瀉！

凄まじい天地のすさびに氣を取られて、背後の障子の開いたのも知らずに居ると、不意に唳かなる聲で、

『酷い暴れで御座いますのね』

驚いて振り返ると、自分のすぐ傍にその若い細君が莞爾と笑ひながら立つて居る。夜目にはさだかに分らぬけれど、湯にでも入つて一寸化粧を爲て來たと覺しく、洋燈の光に微かに照された頬は薄紅にほんのりと上氣して、白粉を薄くつけた襟首の美しさ！丸で石膏細工の横向の美人を見るやうな心地が爲る。衣服は大縞の柄の好い浴衣を裾長に着て、帯はわざと質素を好んだ黒縹子の合せもの、頭の大丸髷もよく似合つて、旅亭の細君には惜しいと思ふ程品が高い。

『本當に酷いですナア』と自分は挨拶を爲て、其儘置洋燈を近く寄せた。

『本當に酷いですこと！こんな事は滅多に有りません』

『酷く暴れなければ好いですが』

『左様で御座いますよ』と軽く受けて、机の向うの一隅の處に斜に坐つた。

『櫻井さん、お歸りになつてから、淋しくつて御困りでせう』

『いや、勉強するつもりで遣つて來たんだから、寧ろ先生が居ない方が好いです、先生、元氣でわい

く騒いでばかり居て、始末にいかん！」

『本當に元氣な御方ね』

今日はいつにも似合ぬ氣分の好さうな調子である。

少時して、自分は、

『すつかり御客が歸つて、急に淋しくなつて、がっかり氣が脱けた様でせう。十日前まではあんなに忙しかつたのが……』

『本當ですよ、何だかすつかり氣が脱けて了ひました。これからは、もう温泉場は淋しくなるばかり、紅葉の時にはそれでも少しは客は参りますけれど、それは長く居るものはありませんからほんに一寸の間で御座んす。冬になつて、雪が降るやうになると、それは本當に寒くつて淋しくつてお話にも何にも成りはしません。それから思ふと、東京や大阪は……』と言ひ懸けて、急に顔を曇らし、

『大阪と申せば……もう今川さんは彼地にお歸んなすつたんでせうね』

『四五日前歸つた筈です』

『彼地へお歸りなすつては、もう東京にお出なさる事などは滅多には御座いますまいね』

『左様な事は無いさ。彼地に行つて會社に入る筈だから、その用事でいく度も出て來る事はあるです』

『それでも、もう鹽原などへは……』

『何アに、僕が伴れて來るよ』

少時物思はし氣にして居たが、

『彼地には御兩親に、お妹御様に、祖母様がお出なさるんですつてね……』

『左様だ』

『お父様は商船會社の重役でお出なさるんだつて……』

『よく知つてるね』

『奥様も、う極まつて御出なさるんでせう？』

『いや、そんな事は有るまい』

『でも……』と何事かを言はうとして、止して、そしてまた言葉を繼いで、

『こんな事を言つて、本當に恥を知らない女と思召すかも知れませんが……東京で、今川さんにもしお逢ひなすつたなら、もうお手紙は上げませんが、一生思つて決して忘れないッてさう仰有つて下さいまし』

悲哀が不意に胸に押寄せて來たやうに、語尾が急に曇つて、涙が既にその兩眼に溢れて來た。

ザーと戸に打當てる雨の音！

二人は黙つて口を開かぬ。

自分は胸に言ひ知らず烈しい感動を受けたので、この女の情——只假初に思ひ合つた戀にこれ程深く心を打込むこの深い情に、何とも名状せられぬ深い大きいある物を感じたので、世の常ならぬ悲哀が自分の胸にも簇々と集まつた。

『けれど……』と自分は口を開いた。『けれど、そんなに深く思つたつて仕方が無いぢやありませんか。貴婦はもうかういふ身になつて居るし、今川は遠く大阪に行つて了ふし、何んなに思つたからつて、何うする事も出来んのです。それよりも其様な事に氣を揉まずに、體をよくして、……』

皆まで言はず、

『それはもう承知なんで御座いますよ。今川さんを何うのつてそんな考は少しも無いので御座いますよ。けれど思ふ事はこんなにも思つて居りながら、お話も爲る事も出来ないかと思ふと、悲しくて……』

『それは私にも解る。世の中には思ひ合つた者が首尾よく夫婦になれば、それはそれ程結構な事は無いです。けれど世の中はさうは行かん。左様思つた様には行かん物です。また、首尾よく成就したからとて、強ちそれが幸福になるといふではない。思ひ合つて結婚してその結果の面白くなかつた例はいくらもあります。また非常に嫌つても長く一緒に連れ添つて居る中に、深い愛情が起つて來て、一生の幸福となるものも随分ある。貴婦の今の心——言ひ換へれば互に思ひ合つた其心、その心と云ふものも、

仔細に觀察し來つたならば、或は一時の出來心と言つたやうなものかも知れぬ。一年、二年、三年も経つて考へて見て猶今と同じであるか何うか、それは一寸疑問であると私は思ふです。だから、其様な考は捨て、今のおのれの家庭の爲めに大に力を盡さなければなりません、今の御主人に對しても、一家の妻としても、そんな考を持つて、獨りで身體を弱くして居るのは、道徳上にも許すべからざる罪惡だと私は思ふ』

若い細君は黙つて低頭して居る。

『けれど、私は貴婦の心が解らないと言ふのでは無い。貴婦の心はよく解つて居ます。一片の清い美しい感情を貴んで、それに一身を犠牲にしようと言ふのは、今の浮薄の世の中には珍らしいと私は感心して居ます。今川も貴婦のやうな清い深い戀を享け得ずに一生を送るのは非常な不幸であるかも知れないます。いや、貴婦のやうな清い熱い戀を他の女に見出す事が出来ずに、つまらぬ女を妻にしてこの世を送つて了ふかも知れん！』

『いゝえ、そんな事は……』

涙がほろ／＼と兩頬を傳はつた。

戸外には暴風雨が愈烈しくなつて、今までは兎に角に樹の撓む音、溪流の狂ひ吼ゆる音、山嶺の鳴り渡る音、雨の車軸を流す音が各々それと區別する事が出來たが、今はそれが一緒になつて亂れ合つて、

狂ひ合つて天地唯悪魔の横行すると疑はるゝばかりの光景となつた。

「無いとは限らんです」と自分は前の言葉を受けて、「けれど、これが、この思ひのまゝにならぬ處が悲しい人生で、とてもこの人の世では完全を望む事は出来ないのです。いや、貴婦などのはまだ好いですが、世の中には片戀に心を攪して狂して了ふものさへあるです。貴婦などは、假令思ふまゝにならぬとしても、大阪と此處とを隔てゝ二つのまことの心が相通じて居る。二つの一致した心が互に波打ちつゝある。寧ろ幸福ではありませんか」

「ですから、私は……私は……もうさう思つて喜んで居ります。隔てゝ居つても、一生手紙を遣らず、顔を見ないでも、心は決して變らないのですから……」

堪へ兼ねてか、両手に顔を掩つて、打伏になつて歎歎けた。

自分は此時から愈娘に對する同情を厚くしたので、その清い心とその烈しい情とは言ひ知らず自分の乾燥せる胸を濕したのであつた。自分は滔々たる浮薄の女性の中にこんな純粋な性質を得ようとは夢にも思つて居らなかつたので、これを見ると、何だかかう沙漠の中に非常に美しいオ、シスでも發見したやうな心地が爲た。

暴風雨は二日二夜あれにあって、漸くその勢を失つたが、猶雲の往來の早きことは飛ぶがごとく、氣味悪き迄深く碧に澄み渡れる空からは黄ろく悲し氣な日影が射して、深みに染まれた草や木の哀れなる風

れは、坐ろに秋の悲しさを行して餘りあるのであつた。若い細君は、かの夜以來をり／＼自分の室に遣つて来て、いろ／＼話を爲るのであるが、秋の日は次第に淋しく、空の色を見ても、草の上の露を見て、殆ど情を成さぬばかりに腸を斷つと覺しく、ある日など自分が欄干に凭つて居ると、突然傍に寄つて来て、

『貴君、本當に今川さんは一生思つて居て下さるでせうかね！』

『何故』

『思つて下さらなかつたら、何う爲ようかと思つて……』

神経性の胸には無窮に對する無意識の煩悶と、感情に伴ふ不可測の苦痛とが隙間なく襲つて来て、時には身の措き處も無いやうに思ふと見える。と思ふと、ある時は、

『私は本當に苦勞性で仕方が無い。つまらない事ばかり氣にして、自分で自分を苦しめるやうな事ばかりして、これでは本當につまりませんから、もう考へる事は一切廢して、長閑に氣を遣はずに居りませう』といふ。

ある時はまた、

『あゝ、何うしよう……妾はいつそ死んで了つた方が……』

など、顔を眞蒼にして、下唇を食切つて、さも絶望したと言はぬばかりに呟く事もある。

下婢に聞いて見ると、若い細君の態度は此頃非常に狂つて居るとの事で、つまらぬ些少な事を氣に礙へては一日一語も言はずに長大氣ばかり吐いて居たり、無闇に感情の昂つた言葉を放つてわざと繼母に衝突して見たり、夫の機嫌を損するやうな仕打をしてその怒るを見て冷笑したり、殆ど常識あるものゝ素振とは思はれぬ程であるといふ。そして下婢は言葉を繼いで、『何うも御新造様はあれだから困るので御座んす、誰も何とも言ひも爲ないのに、自分で種々な事を拵へて、それで一人で苦んで御出でなさるんですから……それや、御養子が御氣に入らないのは、それは存じて居りますけれど、何も彼様に爲さなくてはならないものですから、それで、ぢれて、あのやうになるので御座いませう。考へると、元は御氣の毒なのですけれど……』と話した。

九

『何故妾は此様に不幸福なんでせう！』と沁々言つて梅屋の妻君は、伴れ立つて歩いて居る自分の顔をぢつと見た。

秋は早九月の下旬、悲しい淋しい心細い氣が既に野に山に通ねく滿ち渡つて、草は凋み、葉は色付き、露に咽ぶ蟲の音も宵毎に次第に微かに絶々に、やがては木の葉散り、時雨ふり頻りて、木枯の風坐

ろに山巔をわたるやうにもならば、それこそ温泉場の淋しさは殆ど思ふにだも堪へぬであらう、その淋しさが、もう今からあたりにはひそかに及んで居はせぬかと思はるゝ此頃の心細さ、その加減でか、多情多恨の細君は、ある夜持病の癢を起して、そのまゝどつと臥床に就いたが、それから容易に床を離れることが出来ず、自分が見舞に下りて行つても、縫かに枕を擡けて、いろ／＼悲し氣なる事を言ふばかり、美しき髪は亂れ、紅なる唇は色なく、眼の光また澤を失ひて、坐ろに美人薄倅の感を深くしたが、十日程も経つと、それも段々落着いて、覺束ないながらも家の内を歩くことが出来るやうに成り、醫師も近い處ならば少しは散歩した方が好いと言ふやうに爲つたので、今日は午後三時頃から、進まぬのを無理に誘ひ出して、山奥の炭焼澤へと出懸けて行つた、今はその歸途である。

炭焼澤を出る時は既に暮色が狭い谷に充ち渡つて、ところ／＼の炭焼小屋の烟が茫と黄昏の空に斜に棚引いて、言ふに言はれぬ秋の暮の淋しさを深く自分の胸に刻んだが、澤を出て山路にかゝると、山脈の東に盡きた那須野の上に亮かなる十三日の月は晝くがごとく既に出て居て、夕露の肌に徹る冷かさ！自分等は實に名状せられざる感に撲たれたのである。

自分の顔を見ても、自分は黙つて、何事かを思つて居るので、

『何か考へて御出なさるの？』

自分にはッとして、

『否……』

『それでも……かういふ夕には、何かお思ひなさるでせう』

『それは、少しは……』

『私などは、秋になると、毎年いろんな事を考へ出して、終には體を悪くして了ひます。ですから、秋は私の身には一番禁物なので、殊に、こんな晩など……考へると、泣き度くなつて仕方が無いのですよ』と言つてほろりとした。

『餘り考へん方が好いですナ』

『それは存じて居りますけれど……癖と言ふんでせう、涙がほろ／＼と滲れて、胸がかう迫つて來て……』

路は岩角に懸つて、下には箒川の流るゝところ美しく月に閃めき、暮烟を罩めたる福渡戸の一區は立のぼる温泉の湯氣と共に幻影のごとくわれ等の前に廣げられた。自分は押し黙つて、その細く屈折せる路を一步步下りて行つた。

不意に、

『今川さん、今頃は何を爲ていらつしやるでせうね？ このお月様を見て何と思つていらつしやるでせうね？』とさも悲し氣に。

自分は黙つて答へようともせぬ。自分の胸には、今人生といふ感がひしと張裂けるばかりに簇つて來たので、この娘の一生、この山中の温泉に無意味に月日を送る人の平凡なる生涯、さまざまの分子から成立つた家庭の不和などいふ事が、丁度旋風の回轉するやうに烈しく急にめぐり始めた。あんな氣の合はぬ夫に添つて、娘はこれから一生の長い間、厭な月日を送らねばならぬであらうが、それには種々衝突も起らうし、さまざまの活闘も演ぜられるであらう。癪を起して五日六日も枕を着けた儘起きられぬやうな事もあるであらう。今の様な體では、とても小兒は出來ないであらうから、それに慰められて其の煩悶を忘れるといふ事も無いであらう。氣の毒なはこの娘の一生である。

それにしても、不思議なのは運命ではないか。もし自分等があゝの風の吹いた日の夜に、鹽原に來ようなどとの心を起さず、あの三葉の端書を本郷の通りの角の郵便函に投じなかつたならば——また梅屋でも他の二軒の旅亭のやうに平凡な普通な返書を自分等に寄越したならば、百里を隔てた狂熱の二人の胸は全く他の方面に向つて波打ちつゝ決して相觸るゝ事は無かつたであらうに、否、たとへ娘の感情は、いかに烈しく、狂熱はいかに強くとも、この梅屋の家庭は永久に平和にその普通の夫に満足して決して今のやうなあだし心を起さなかつたであらうに……悲しむべきはその端書！ と深く思ひ入つた。

かの女もいろ／＼なる追想やら記念やらに全く心を奪はれたと覺しく、以前のやうに自分に言葉を懸けようともせず、黙つて低頭いた儘、とぼ／＼と自分の後に跟いて歩いて來た。既に夜になつて、月の

光は水のごとく天地を照し、山の影は黒くつきりとその間に聳えて、秋の夜の淋しさは譬へんに言葉が無い。

阪を下りて、これから里に入らうとするところの一平地！ 其處からは、箒川の末が明かに月に見えて、溪橋、山嶺、人家、——一方ならぬ好眺望であるので、思はず自分は足を留めた。

『好い景色ですナ？』

『稀に御覽なされるので、東京から来た人は皆な好いと仰有いますけれど、私等は少しも美しいと思ひません！ こんな山中に一生暮さなければならぬのかと思ふと、いつそ……もう……』

『それは、餘り我儘です。人は、各々その境遇に安んじなければならぬのですから……』

『審ぢそ死にたい……』と烈しい言葉。

自分等は又黙つて了つた。

すると、すぐ下で、人の語り合ふ聲がして、頻りに何か捜して居るやうな氣勢。何かと思つて見て居ると、一箇の提燈が段々上へへと上つて来てやがて明かになつたのは、大きく記した『梅屋』の二字！

餘り遅いので向ひに來たのであつた。

『や、お新造さん！』と番頭が見付けて叫んだ。

『一體何うしたんだ！』

これは亭主の尖つた聲。

自分はすぐ思つた。人の妻をかう遅く迄伴れ歩いてまことに濟まぬ事を爲た。かうと知つたら今少し早く歸るのであつたのに……。疑はれた。自分は確かに疑はれた。と思ふと、簇々と厭なく心地がする。

『つい遅くなつて……』と妻が辯わづら疏しゆを爲ると、

『つい遅くなつた！ ぢやない。女の身で、病氣上りで、遅くまで出て歩くといふ法は無いぢやないか』

傍に自分が居るのも態と知らぬ振で、あて付がましく言ふ。

愈不快で堪らぬ。

一同の若き妻を取巻いて下りて行くのを見遣りながら、久しくなる迄、自分は其處に立盡して人生を思つた。

月光、水聲、山影！

* * * * *

その夜に懲りて、それからは自分は餘り若き主婦に親しく爲なかつた。若き主婦もそれと知つてか以

前のやうに餘り繁々と自分の室に遣つて來なくなつた。秋は次第に淋しく、鹿の鳴く聲も聽ては聞ゆるであらうといふ。

高等文官試験の期が近いて東京に歸つたのが十月五日。間もなく自分は新居を本郷駒込の奥にトして住んだ。

一〇

それからと（また日記の小さい手帳を繰つて）此處にかういふ一條がある。これは見落してはならぬ。

十月二十五日、晴、
時は早初冬なり。

林の木の葉墮つる事雨の如し。

午後、櫻井、吉沼來る、昨日鹽原より送り越したる松茸を肴に大に飲む。酔ひて、大阪の今川に連名の書狀を書く。事、かの女に關してなり。醉墨淋漓、一驚を喫するならん。

その連名の書狀はよく覺えて居らぬけれど、随分亂暴で、随分烈しい事が書いてあつたに相違ない。その中に、確かかういふ文句があつた。『君の爲めに鹽原の〇〇の萬歳を祝す。こはこの佳味なる松茸を

得たるは實に君の賜なればなり。されど、好男子たるものは宜しく記せざるべからず、君を思つて日に衰へ行く佳人の其山中にある事を……』

また、

『京都大阪の地由來美人多し。われ等鹽原のかの女に代りて、君がその節を二三にせざらん事を祈る』

更に、

『何うです、結婚話が有りますか。美人で、學問があつて、氣質が善くつて、堪らないやうなのいくらかもあるでせう。好男子しつかりしろ！』と書いた。

これは櫻井である。

それから一年経つた。自分も高等文官試験に及第して間もなく大藏省の參事官に任命せられ、今川も段々地位を得て、その會社の副支配人心得とまで昇進したさうであるが、其年の秋の十月九日十日のこの日記を見給へ。（と言つて指示した。）

十月九日

今川より結婚の約成り、結納の取かはせ濟みたりとの報あり。

その未來の夫人は有名なる大阪の豪商の〇〇〇氏の令嬢なりといふ。

櫻井といひ、吉沼といひ、皆已に夫人あり。今又かれの賀に逢はんとす。喜ぶべきか、將た弔すべきか。

十日

驚くべき報あり。

鹽原の梅屋の妻肺を病んで死するの報を得たり。書簡零細にして詳しく知る能はざれど、その肺を得たるは已に昨年にあるが如し。

今川――

今川の今の境遇にしてこれを聞かば――果して如何の感を起すべきか。

かの女は遂に現世の人にはあらざりしと覺し。

夕暮、駒込の奥を散歩す。林の中にて、久し振にて、人生を思ひ、戀を思ひ、死を思ひ、不可思議を思ひ、轉じて梅屋の梅を思ひ、今川を思ひ、殆ど日の暮るゝを知らず。

木枯終夜屋を遶りて眠を爲さず。

それからもう五年になる。けれど自分は今でも時々其女の事を思ふので、それを思ひ出すと、表情力に富んだ眼色と眉と態度とがすぐ眼前にちらついて見える。鹽原には、其後行つて見ぬから何うなつて居るか知らぬが、大方その養子に後妻でも出來て、子供でも産れて、平和な家庭をつくつて居るのであ

らう。今川にも昨年二番目の男の子が生れた筈だ。

(明治三十五年五月)

女
教
師

女教師

君は僕等夫婦の間柄をもよく知つて居るし、二人の戀の如何にして成立つたかをよく御存じの筈。

實際、僕等の戀位、單純で、圓滿で、そして最後まで兎に角愛情を續けたものは餘り世間にも澤山はあるまいと思ふ。戀とは不思議な者で、成立てば忽地覺める、結婚をするともう私の居る所では無いと言つたやうに、その意地の悪い戀の神は倉卒と逃げ出してさふ……。それ故、半年も経ぬ中に死ぬほど思つた愛情が覺めて見たり、戀しい人の顔を見るのも厭になつて見たり、中には、その最初の愛情が悉皆覺めて了つても、あまり其心の節操の無いのを自から叱して、厭々ながら、義理で一生をつまらなく暮して了ふ者もある。それ等の者から比較すると、我々の單純で、平凡で、これと言ふ烈しい熱情も無い代り、兎に角今でも——妻の死んで了つた今でも、其の甘い記憶を繰返して、世間のさまざまの誘惑に

打勝つことの出来るのは、此上もない幸福と言はなければならぬ。

記憶——さう、記憶といふ字で思ひ出した。士官学校の裏手の淋しい通りで、僕は君に僕の堪へ難い若い戀の苦惱を話して、僕はかの女の性質に就いてはまだ何等の詳細をも知らん。いや、彼女はこの自己に對して、まだ些少の戀の心をも動かして居らんかも知れぬ、けれど僕はかの女の極く稚い、まだ蝶々鬚を結つて居る頃からよく其の生立を知つて居る。そして、其時々、自分は色々な考を起した。その考の記憶——そればかりでも自分はかの女と一生幸福に生活する事が出来ると思ふ。そればかりでも、自分は戀の後に當然起つて来るさまじくの障礙に打勝つ事が出来る、と、かう君に話した事があつた。あゝ、その記憶、それが今かういふ風になつて悲しく自分の心を支配しやうとは！ 君も同情を借んでは呉れぬだらう。

實際、今だから言ふが、僕の妻は非常に卓れたところを有つて居た。君も知つてゐる通り、一寸見ると、極々單純な、幼稚な、何處か間の抜けたやうなところのある女だが——いや、僕もかの女の死ぬまでは左程に精神に深いところのある、感化力を持つて居る女とは思はなかつたので。ある時などは、他に美しい、伶俐な、學問の出来る、會話の上手な細君方に比較べて、何故、自分も今少し立派な、今少し融通の利く、世才に長けた女を妻にしなかつたであらうと口惜しく思つた事さへあつた。けれど、今になつて考へて見ると、それは自分の誤で、妻は飽まで無意識に自然に似たやうな大きな精神を有つて

居た。

あゝ、死んだ兒の容貌、今更繰返したつて仕方が無い。

けれど、君は僕の家庭の有様をも、僕の亡なつた妻の性行の或部分をもよく知つて居る無二の親友、假令それが苦々しい感を君に與へやうとも、暫く忍んで聞いて呉れ給へ、僕の妻が僕に忘るべからざる紀念を與へたその話の一伍一什。

二

小石川に居る間は、君は一週間に一度は屹度僕の宅に來て、一閑張の茶湯臺ちやまぐだいに牛の煮たのを突き合つた仲間だから、其間の僕の家庭の出來事は細大洩さず君の眼中に映じたに相違ない。先、第一に、その小さな茅屋。周圍が、竹藪と松林と低い丘とで圍まれて、風の吹く日などは、木の梢は鳴り、篠の葉は戦ぎ、丸で深山の奥にでも住んで居るかのやう。門と言つたら、低い低い四格子の扉で、年を経て棧が利かなくなつて居る爲めに終日ばかりと風に煽られて、訪ふ人はそれより外に無いといふ光景。室は三疊、六疊、八疊の三間。六疊に栗の樹で造られた長火鉢が置かれてあつて、其上に南部製の茶色の鐵瓶が懸けられてあるが、我々夫婦は其處に差向ひで、何んな他愛ない楽しい物語に耽つたであらうか。實に、その室、其家は僕には忘れ難い紀念である。殊に、その八疊の日に面して暖かい室に、多年

使ひ馴らした机を据ゑて、いろ／＼頭腦に湧いて來る思想を忽地紙に移して行く時の心地、まだ碌々名も世の中に聞えないあはれな文學者とは何うしても思はれなかつた。

それに、僕の妻は下手なりにも、何うやら彼うやら琴を弾くので、月の夜などの興の面白さは、とても他人の想像すべからざるものであつた。あれは、結婚してからまだ二月ほどしか経たぬ頃であつたが、丁度梅が咲いて、夜風がやゝ暖くなつたといふ頃で、月が裏の松林、前の竹藪、向ふの丘の上一面に美しい銀色の光を投げて、樹の蔭、物の影の濃さと言つたら、とても秋でなくては見られぬといふ程の空の冴えやうであつたが、自分は近所の友人の許で夜を更して、彼是もう十時近くに、てく／＼家路へと戻つて來た。いろ／＼熱情の激しい物語の餘波は未だに其胸に跡をとめて居ると見えて、人生の悠遠な事や、宇宙の不可思議な事が、意味もなく唯かう胸を壓迫するやうに簇つて來て、何だか自然と相距る事一步であるといふやうな深い、深い感が激しくこの身を動かさずには居られなかつた。で、思はず知らず、君不見黄河之水天上来、奔流至海不復回と小聲に打誦して、同じ番地の阪をだら／＼と五六歩下りた。

梅の薫、月の光、琴の音！

其琴の音の主は誰だと思ふ。まがふ方なき僕の妻。六段の曲は今まさに佳境に進んで、一轉、悲壯の調に入らうとしつゝあるのである。地上を見ると、つくろはぬ自分の影が、黒く長く阪の路へと落ちて

居る。

佇立したまふ、自分は暫く恍惚として、天地のある物に聞惚れて居た。あゝそれにしても何たる幸福、何たる平和。君は、僕が一步／＼其家に近いて、其茅屋の戸を靜かに明ると、琴の音はぱつたり止んで、『お歸りですか』と玄關口まで迎へに出づる妻の笑顔をいかに僕が嬉しく思つたかを想像する事が出来るであらう。

平和、平和、實に僕の其間の生活は平和であつた。

否、現にある友人などは廣瀬はその家庭の幸福に満足して、永久に事業の上に埋れて了ふのではあるまいかと心配した位だ。

翻つて、僕等夫妻の毎日の間柄はと言ふと、これも亦随分平和で、随分幸福であつた。戀の後には必ず來るといふ恐ろしい旋風も吹かねば、(勿論、性格上から二三の衝突は免かれなかつたが、)空想と實際との間に生ずる忌むべき暴風雨も襲つては來なかつた。唯此處に非常に遺憾に思つた事が一つある。それは何かと聞くのか。

待ち給へ、これはこの物語を爲るにつけては是非共君に語らねばならぬ事で、實はこれが僕の家庭の悲劇の原因となつたのであるのだ。それは、他でも無い。僕の妻の文學の趣味を解せぬといふ事だ。勿論、僕はかの女を戀するに當つて、かの女の文學の趣味を解せりや否や、當世的才學を具へたる婦人な

りや否やといふ事を仔細に研究した譯では無いから、結婚して後、其の趣味が無いからと言つて、別段何うする事も出来ぬのであるが、それでも僕はさうと知つて非常に失望した。僕の理想では、夫の書いた原稿の清書を爲て呉れなくつても好いが、兎に角、小説を読むことが好きで新派の花やかな和歌位は詠めて、夫の机に向つての煩悶を時には慰めて呉れる位のは爲て欲しかつた。であるのに、僕の妻はその方面に向つては全くゼロ、その應揚な無邪氣な、自然らしい性質はさる、人工的のものに向つては何の一顧をも與へる必要が無かつたのである。僕は、先、自分の書いた作品に手を觸れやうともせぬ妻の無頓着、無趣味に失望したが、更に、それを改善しやうと思つて、一層深く失望した。君、僕の妻の胸には、諸大家の精神を籠めて作つた傑作も更に何等の反響をも印象をも與へぬのではないか。否、僕がいかに力を盡し、心を砕いて、その面白味を傳へやうとしても、更に何等の功も無いのではないか。

僕の妻とて、左程無學のものでは無い。普通の教育は十分に受けて、學問といふものゝ價值をも能く知つて居る。それであるのに、文學の趣味を解し得ぬとは、果して如何なる事であらう。殊に僕の怪訝に堪へぬのは、かの女は音樂の妙味を解して居る。琴を弾く事を殆ど朝夕の飯より深く嗜んで居る。それにして、同じ藝術たる文學の趣味を解する事が出来ぬであらう。實に不思議だ。
性質といふものは、先天的のもので、非常に神秘の境にその尖頭を突込んで居る。ある人とある人と

の、別に何等の原因も無くして終生相合ふ事が出来ぬのも、互に相反せる性質を有しながら、その親愛の情殆ど兄弟も及ばぬやうな異觀を呈するものも、皆な其の先天性の所爲である。神秘の致すところである。其故、世の中でもその不可思議を思議し兼ねて、性が合はぬから何うも仕方が無い、とか何とか言ふて居るでは無いか。

自分の妻の竟に文學の趣味を解し得ぬのも、つまりはこれに歸するのであらう。で、自分も遂には斷念してあまり喧しく文學の事を妻の耳には入れぬ事に爲た。けれど、それは何んな苦しい悲しい犠牲であつたか、自分はこれから長い一生の間、文學者の嘗める机邊の苦悶を獨りで受けなければならぬのであると思ふと、實に何とも言はれぬ悲哀と失望とを一時にこの全身に覺ゆるのであつた。

三

従つて、僕の妻は夫の文壇に於ける勢力や、名譽や、評判や、そんな事には更に無頓着で、夫が何ういふ作品を世に公にし、何ういふ批評を受けて居るかなどには少しも心を悩まさぬのであつた。それでも、評判が好いと言ふことを話せば、それは滿更喜んで呉れんでも無いけれど、何うもその喜び方が普通の人と變らぬので、文學者たる自分の頭腦を満足させるには、餘りにその態度が冷淡であつた。否、妻の方でも自分のことは、流石に心に懸かると見えて、折々困つたといふやうな顔を爲て、妾は日課に

して小説を読んで見ませうかねえ。何うも妾は昔から小説などを讀むのが嫌ひでしたものだから』とか、『歌を詠んで見やうと思つて、今日も裏の林の中を一人で歩きましたけれど、何うしてだか、妾はそんな氣になれんのですもの』とか、いろ／＼申譯見たやうなことを自分に向つて言ふ事がある。ある時などは、六疊の間で、

『何故、妾のやうなものをお貰ひなすつたんでせうねえ。こんな、小説嫌ひな、文學嫌ひの妾を！』と投げるやうに言ふではないか。

何うしたのかと思つて行つて見ると、細君今しも火鉢に凭り懸つて、頻りに小説を讀まうとして居たが、何うも面倒臭くつて、面白なくなつて、いかに忍耐しても、何うしても讀むに堪へぬので、自分から愛想を盡して、書籍を傍に捨て、そして、この遺瀨ない嘆聲を洩したのであつた。

『何故、こんな妾をお貰ひなすつた！』

かう言つた眼には、既に涙が閃いて居る。

『一體何う爲たんだ！』

『妾は、文學者の妻ですから、何うかして、小説位解るやうに爲り度い。歌の一つ位は出来るやうに爲り度いと、此間から、種々して居るんですけれど、何うしても、性に合はないと見えて、今も今、つく／＼悲しくなつて、何うして妾のやうなものを貴郎がお貰ひなすつたかと……』

『何だ、つまらん、そんな事を心配せんでも好いに』

妻は自分の心を非常に氣の毒に思つたのである。

『だつて……』

『何に、好いよ、小説なんぞ讀めんたつて構ひやせん。お前のそのやさしい心が即ち小説にもなれば、歌にもなるので、お前はそのやさしい心を常に持つて居てさへ呉れれば、それで充分慰められるのだから』

『左様仰つて下されや好いけれど……』

と少し途切れて、

『けれど、貴郎、本當に左様思つて居らつしやるんでは無いんでせう。お腹の中では、こんな女を貰つて、飛んでも無い見損ひを仕たと、實は後悔爲すつて居らつしやるのでせう？』

と莞爾する。

『馬鹿！ そんな事を思つてる者か』

『何うですか』

『お前は中々疑惑深いね』

『だつて……左様ですもの』

『何アに、そんな事があるものか。己は、お前が己のやうな貧乏文學者のところによく来て呉れたと常に心から感謝して居るのだ!』と言ひかけて、少し調子を改め、『それは、お前が小説を読んだり、文學が好きだつたりすれア、それは此上無いけれど』

『それ御覽なさい!』

『まア、待ちな……それは好いに相違ないけれど、それは己の慾で、何アに文學などを嫌ひだからつて、己はちつとも構ひやせん。お前を貰つたのは、文學で貰つたのでは無いからナア』

『左様仰つて下されや、難有いわ』

『だから、其様な心配を爲んでも好い』

『さう』

と再び莞爾と笑つて、

『それぢや、そんなに無理に爲なくつても好いわねえ、其中には、段々好きになりますから』

『それが好い!』

と僕は幾重にも慰めて遣つた。

僕はそれからといふものは、愈文學の事を妻の耳に入れぬやうにと爲た。妻の無邪氣な心、それを傷けて何の利益があらう。妻の文學を解せぬのは、つまり自分の不運なので、妻には少しも貰むる所が無

い。それに、自分も今言つた通り、自分のかの女を愛したのは、決してかの女の文學的趣味の有無に關しては居らぬのである。かの女の愛情、——暖かいやさしいその愛情の慰藉さへあれば、自分はそれで足りるのである。

それで、自分は自分の文學的苦惱の愈烈しくなるにも拘はらず、成べくそれを妻に知らせぬやうにして、獨り八疊の屏風の中にその机上の煩悶を封じて了つた。それにしても、其の文學者の机上の煩悶! ああ自分は何様に淋しく悲しく心細く感じたであらうか。思想が麻のやうに亂れてこんがらかつて、それを何うしても紙上に満足に移すことの出来ぬ時は、自分は如何に狭い屏風の張り交ぜの蘭の畫に向つて、その淋しい心を放つたであらうか。自分はわが文學的生涯のロンリーなのに幾度か空しく涙を揮つたのである。

けれどこれが即ち、人生の人生たる所以、自分は到底厭世の兒たるを免かれぬのであるとかう思つて、辛うじて我等夫妻は平和な幸福な月日を送る事を得たのである。

君は、其時分、よく僕の厭世觀を非難して、かゝる平和、かゝる幸福の中に楽しい月日を送りながら、何處からそんな虚偽な音が出ると絶えず攻撃を加へて居つた。今でもよく覺えて居るが、ある夏の暑い日に、障子をすつかり開放して、裏の松山から来る涼しい風に胸襟を開きながら、何も無い、冷豆腐か何かの膳で、麥酒を二本ほど抜いて頻りに氣焔を吐いた事があつた。其時、君はあまりに主我なる

僕の思想に激して、馬鹿を言へ、そんな事があつて堪るものか、例があるなら舉げて見給へと言つた。僕はつくづく悲しくなつて、ロンリーライフ、ロンリーライフと続けざまに二言ばかり言つたが、君はそれを覚えて居るか。

ロンリーライフ、確かに僕の生活の一面はそれであつた。

けれど、まア、それは好いとして、兎に角平和に幸福に僕等は月日を送つたのである。其間に、長女は生れる、生活は愈複雑になる。もう戀だの、愛だのと若々しく騒いでも居られなくなつた。其翌々年の三月である。君も知つてる通り、僕はその結婚の記念のある丘の上の家を去つて、少時、田園生活を爲なければならぬ事と爲つた。

いや、別段爲なければならんと言ふのも無いが、少しく都會の輕佻な風にも倦きて來たし、田園の質朴な風をもよく觀察して書いて見たいと思つたので、書肆との契約の首尾よく整つたのを幸ひ、あまり東京にも遠くなく、さりとてあまり俗地でもないといふやうな處を彼方此方と探した結果、遂々あの入間郡萱田村のある豪農の別荘に建てた家を借りて、其處に生活する事と爲つたのである。

萱田村……と君もあの時そのあまりに名の聞えぬのに不審を打つたが、僕もあんな田舎にあのやうな氣に入つた處があらうとは少しも知らなかつた。いや、僕は好い處だ！ と友人が教へて呉れたから、遠足がてらに唯一寸と行つて見たばかり、それが遂に僕のある運命に爲らうとは夢にも思ひ寄りなかつ

たのである。

運命と言ふものは、實に解らぬ不可思議のもので、今其處に居たかと思ふと、もうすぐ飛んで何處かに行つて居る。十年も、百年も其處が唯一の場所かのやうに落着いてじつとして居るか思ふと、何かの具合で、ふつと何處かに行つて了ふ……。實際、何が運命の手になるか解らるので、扉を明ける微かな風、その風の爲めに一家の平和が破られる事は無いとも限らぬ。あゝ自分の家の平和と幸福とは實に、その友のわが家を訪はんとして扉を明けたその微かな風によつて全く破られて了つたのである。

噫……

四

入間郡萱田村と謂ふのは、川越鐵道の所澤驛から、大凡一里ばかりの距離で、小さい丘と丘との間に横つて居る一小村であるが、この村の風情は一にかゝつて西と南との間に美しうたゞへられてある小さい湖水にあるので、晴れた日などの夕照の其の水面に反映する具合と言つたら……。水は薄鼠色を爲して葦やら、藻やら、蓮やらを一幕の下に包んで了ふと、夕照は丸で焔のやうに明かに地平線を彩つて、それがかう何とも譬へられぬばかりに、靜かに消えて行く。段々湖面の色が、薄くなつて、暗くなつて、もう何も彼も其影の中に包まれて了つたと思つて、我知らず頭を擧げると、向ふの森の陰にいつも

鮮かに打仰がれる富士が濃い、濃い紫色になつて、其頂には金鶏の鶏冠のやうな雲を赤くふわ／＼と靡かせて居る。村はすつかり暮れて、靄が何處からともなくあたりを籠め盡したが、殊に後の林などは丸でその色と一つとなつて了つて、その静けさ穩かさはない。其の湖水、其の夕照に面した小高い丘の上に自分の借りた別荘が建てられてあるので、家は小さいが、間取が中々よく出来て居た。南の日當りの好い八疊、庭は芝草の梳つたやうな斜阪で、それが麥の畑、菜の畑を越して、ずつと湖水の紺碧に平らかに打渡されて居る。白鷺のよく來ては浴して居る湖水で、濃い水の上にその白い翼の透して映る具合などはそつくり油畫のやうだと幾度思つたか知れぬ。

妻は實家が遠くなつて滅多に母親にも逢はれなくなるのと、東京に生立つて、一體賑かな所が好きなのとで非常にこの田園生活に反對したのであるが、來て見ると、流石にあたりの好景と、世話をして呉れる人々の實情に富んで居るの心に心が解けて、これでは二三年住むのも變つて居て面白いかも知れませんねえ！ など、言つて居た。

重に、世話をして呉れる人は、僕の崇拜者（よく田舎にはさういふ豪農などの息子は居るものだ）で、去年まで東京に修學に出て居つたとの事だが、色の白い、脊のすらりと爲た、特長と言つては頗のところの瓢箪形の小さな黒子のある、年頃大凡二十六七といふ中々の好男子。明星派の新派の歌人で、熱とか、戀とか、神秘とか、涙とか、頻りにさういふ空想に耽つて居る若者であつた。移つてからは毎日の

やうに、僕の家に訪れて來て、やれ、戀の真相は何うだの、やれ人生の眞意義は何だの、とても一朝一夕に論じ盡す事の出来ぬ問題を提出して、よく僕を困らせたが、僕もまた、さういふ事には興味を有つて居る身の、淋しいまゝの對手撰ばず、随分いろ／＼な議論を爲て、東京の雑誌に寄稿すべき原稿の約をたがへた事も幾度かあつた。

ある日のこと、話にも倦きて、庭へと出たが、ふと、あるがや／＼する音が風のやうに耳に入つたので、

「この近所に小學校か何か有るんですか、此間から、小供の騒ぐやうな音が聞える／＼と思つて居たが」

「え、そら……」

と若旦那は立上つて向ふを指し、

「湖水の向ふに一ところこんもりと黒く樹の茂つて居るところがあるでせう。さう／＼、こつちの角のその向ふの、少し小高いやうになつて居る？」

「唯——」

「其處の木立の陰にちらりと白いものが見えるでせう。あれが、小學校の建物の一部分です」

「はア、左様か、道理で、小供の騒ぐ聲が時々聞えると思つた。一寸見渡したところにはそんな建物

らしいものも無い者だから、不審に爲て居つたのだが』

『萱田小學校と言つて、高等科もある、この近傍では所澤小學校に次ぐ程の大きな、まア學校ですナ。僕なんぞは其處で教育されたんですからナア』

『此方から行くにア、ぐるりと湖水を廻らんけりやならんから、餘程遠いでせう』

『何アに、船で渡るです』

『それぢや、君なんぞは毎日渡つて行つたんですか』

『はア』

『一寸詩趣がありますナア』

『はア、それア面白かつたです。其時分は村中の小供を乗せる爲めの舟が一艘買切つてあつて、朝の八時になると、ぞろ／＼其の、今でも見える、その埠頭に押懸けて行くですア。そして、我々は其處で、いろ／＼な悪戯を爲て待つて居る。丁度、東京などの學校の門のあかぬ中から詰懸けて居るのと同じ格ですナア。そして八時三十分になると、銅鑼のやうな螺貝を船頭が吹鳴らす。と、ぞろ／＼と後れた者も飛んで来て舟に乗り込む。それア、一寸面白かつたです。それに、船頭と言ふ奴が面白い老爺で、よく僕等を捉へて、昔、海の船頭を爲た頃の自慢話を始める。我々はそれを本當にして、爺の顔さへ見ると、よく話を爲ろ！』と迫つた者です』

『それは、中々詩的ですね、一寸小品文位には爲るぢやありませんか』

『はア、僕も左様思ふんですけれど……何うも面白く出来んです』

『それで……今でも左様なんですか』

『否、今ぢやそんな事を爲て居らんです。今の村長といふ奴が、さういふ事にはねつから世話を焼きませんから』

暫時話は絶えた。

『それで、學校の教員連中に、少しは話相手になる人は有りますか』

と自分は改めて問うた。

『有りませんナア』

と言つたが、ふと、心附いたやうに、

『唯、女教師に此頃一人話せるのが出来たです。三月ばかり前、東京の師範學校から遣つて來たんですが、僕は五六度逢つて、よく色々な話を爲たです。新派の歌が非常に好きで晶子女子のみだれ髪などは道を歩く時にも懷にして離さないといふ位。それは實に熱心な者です。小説では鏡花が好きだつて、貴郎のものも愛讀して居るといふ話でした』

『それは大變だ』

「いゝえ、本當です。それに、極く人がらな、様子の好い、感情を充分に顔やら、態度やらに顯はす事の出来る、やさしい性質ですから……。それに他から聞くと、何でも前の夫の事で非常に難儀を爲したとかで」

「夫が有るんですか」

「まだ、縁が切れんとか、切れたとか、それは好く知りませんがね」

「年は？」

「まだ、漸つと二十一か、二でせう。大きな英吉利卷にして、色の白い、鼻の高い、顔の輪廓は少し大き過ぎるが、眼の表情力は非常に強い……」

「は、ア」

と自分は點頭いた。

「何うか爲たですか」

「それぢや、あのカシメヤの蝦茶の袴を穿いて、黒い琉球緋の長い女羽織の上に紫の小さい肩懸を爲た——」

「さう、さう」

「その人なら、僕はもう二三度逢つた。始めて逢つたのは、移轉して来た夕方。少し用があつて、村

のあの櫛の樹の並んで居る處を歩いて居ると、向ふから色の白い、香の高い、一寸綺麗な、東京風の女が遣つて来た。東京なら、擲違つたからとて、別に目にも留めんのですけれど、この田舎に、その女學生風の態度が酷く目立つて、何人か知らんと思つたです」

「左様でせう。先生、その櫛の樹から二町ほど先の百姓家に下宿して居る筈ですから」

「それから、二度目に逢つたのは、湖水の畔で、僕はじつと夕照の景色に恍惚みとれて居た。すると先生、その傍を通りながら、僕の方を見い見い通りすがつて行つた。いや、そればかりでは無い、何でもまだ二三度逢つたよ。遂、昨日も畑道で逢つた！」

「向ふぢや、屹度、貴郎だといふのを知つてゐるんでせう」

「そんな事が有るもんか」

「だつて、僕が話したですもの、貴郎が此處にお出なさると極つた時、今度、廣瀬さんがこれ／＼で當地へ移轉なさると言つたら、先生、大層喜んで、さうしたら、いろ／＼御話も伺ふ事が出来るし、歌も直して戴く事が出来ると言つて居つたです」

「そいつは弱つたナア！」

「何アに、好いぢやありませんか。やさしい女ですよ」

「それでも……」

「何アに、好いです。僕が今度一緒に伴れて来て御紹介申ませう」と渠は笑つた。

實際、其の女は其の時もう多少の印象を僕に與へて居つたので、さうと聞かぬ中から、何となく美しい何となく自分の心を奪ふやうな心地が爲て仕方が無かつたのであつた。樺の樹の薄暮の光の中に、くつきりと際立つて白い女の顔！ 妻あり、子ある男の身で、——否、戀人をおのれの妻に爲た幸福者の身で、それに眼を呉れるとは、實に無節操極まると言はれるかも知れぬが、兎に角、僕の眼はそれを美しいともやさしいとも見たので、その眼の表情力は言ひ知らず僕の心に深い深い印象を與へたのであつた。それが、何うだ、文學好き……歌人……みだれ髪のアマチュア……自分の作物のアマチュア……歌を直して貰はれるから嬉しい……

久しく文學者のロンリーライフに甘んじて、會て机邊の苦悶の慰藉の些少だに得なかつたこの身、——この身がこれを聞いて、多少の感を起したのは、果して罪だらうか。

五

「大層やさしさうな好いお方ねえ、私も御友達が出来て嬉しいわ」とか、妻は言つた。

これは其翌々日若旦那が其の女教師と一緒に連れて来て、大凡一時間ほど、いろ／＼な物語を爲て、そして別れを告げて歸つた後の晚餐の膳に向つた時で、自分の胸には、さまざまな感を通り過ぎて、全く空虚になつたといふやうな、譬へて見れば、暴風雨のすつかり晴れた後の空のやうな有様を呈して居た。

「何ツて仰しやんですつて」

「何つて、何？」

「御名前はさ」

「渡邊國子」

「それではお國さんといふのね」

と妻は無邪氣に言ふ。

少時してから、

「やさしさうな、落付いた、好い方ですわねえ。私は、逢ふと直ぐ思ひましたわ。私の學校の御友達で、私と極く仲の好かつた篠崎さんに能く似て居らつしやると。篠崎さんといふのはね、それは私とは仲好でしたの、それが、私の此方に參る前の年に脚氣でつい亡くなつて御了ひなすつたが、其時は、私は本當に泣きましたのよ。ですから、渡邊さんにも屹度仲好になれると思ひますわ。眼付などは本當に

酷肖……』

『それは好い。こんな田舎で、お前の話相手が無くつて困ると思つて居たところだから』

『本當に好い御友達！』

と言つたが、少し何か考へるやうに、打沈んで、

『歌が御上手なんですッてね？』

『何アに、上手つて言ふ程でも無いけれど、……』

『それに、小説も……』

『何アに』

と自分は打消して了つた。

それで、晚餐を済して了つたが、小兒を次の室に寝かしてから、再び妻はその噂を爲し始めた。

『私は、貴郎にも、歌が讀めたり、小説が讀めたりするお友達が出来たのを、嬉しいと思ひますわ。

私はいつも貴郎を慰めて上げなかりやならんと、そればかり苦にして居るのですけれど、根が學問が無い者ですから、何うする事も出来ないのです、やきもき思つてばかり居りましたが、あの方がお出になつたので、大變貴郎も御話相手が出来て好う御座んすね。私ア、あの方に御懇意になつて、その事をよく御願ひ申して置きませうと思ひますわ』

『何アに』

と自分が取合はぬのにもどかしく、

『本當を言ふと……』

と自分の顔を見て、莞爾笑つて、『本當を言ふと、……貴郎にはあゝいふ人が來ると好かつたのね！』と戯談のやうに言つた。

『馬鹿を言つてらア』

『だつて、左様ぢやありませんか』

と笑つて居る。

『何が、左様だ？』

『何がッて、先刻お話を此方に居てうかゞつて居ると、それは本當に面白さうで、貴郎と言つたら、熱心になつて、聲まで振はせてお話しして居たぢやありませんか』

『馬鹿！』

『だつて左様ですもの』

と再び笑ふ。

何時もならば、戀と文學とは別だとか、お前といふやさしい戀女房が附いて居るぢやないかとか何と

か氣休めを言つて、頬の一つも突付いてやるのであるが、何うしてか其時はさういふ心には爲れなかつた。

否、其晩は遅くまで眠られなかつた。

眼に附くのは、其人の姿、其人の顔、其人の美しい髪！ 口を利く時に、かう長い眉を少し釣り上げて、眼を下向き勝に疊に落して、迫らず、言葉少なにその感情を言ひあらはす具合、實に自分の胸に驚くべき凄じい反響を與へたのである。勿論、始めて逢つたのであるから、互に充分に思ふところをも言はなかつた。ほんの初對面の挨拶位に過ぎなかつた。けれど自分等の胸には確かに互に相觸れる波動を感じて居つた。傍に人も居ず自分に妻も子も無い身であつたなら、二人は忽地にしてその互の胸の蟠りを打開いて再び離るべからざる情操を生じたに相違ない。

危険！

と叫んで、自分は夜半に飛起きた。

そして、傍にすやくと眠つて居る妻の顔と子供の顔とを見て、僅かにその非望の願を押へたのである。

それからと言ふものは、國子はよく自分の家に遊びに來た。段々交際して見ると、情熱家ではあるが、何處か、う正しい嚴格なところがあつて、意志の力が普通の女一倍すぐれて其の精神の上に働ら

て居るのを發見した。これを發見して、自分は動なからず心を安んじたので、一度起したその感もいつか靜かに穩かに押へられて了つた。妻も自ら言つた如く、直きに親しい間柄になつて、自分よりも却つて多く話をして歸つて行くやうになつた。

經歷を聞くと、生れは栃木縣の宇都宮ださうだが、幼稚な頃から、東京に出て居て、故郷のことなどは丸で覺えては居らんといふ事だ。早くから父に別れて、母の手一つに僅かばかりの公債證書をたよりに生活して來たので、隨分世の中の憂い目辛い目は見たやうな話。それに、十四の時、その杖とも柱とも頼んだ母親にさへ別れて了つたので、それからといふものは、丸で泣かぬ日は無い位であつたさうな。引取つて養つて呉れたのは、父方の叔父で、其頃大藏省の屬吏を勤めて居つたが、叔母といふ人が意地悪で、喧ましやで、吝嗇で、殆ど下女がはりに使はれたものだから、好きな書籍をも讀む隙などは少しもなく、勉強を爲やうと思ふと、夜、皆な寝て仕舞つてから、洋燈に解らぬやうに新聞をかけて、そしてこつそり讀まんければならなかつた。否、さうしてすら、時々、叔母の小用などに起きたのに發見されて、酷い小言を言はれる事は幾度もあつた。それでも、書籍を讀むこと又は艱難辛苦の中の唯一の慰藉なので、つとめてそれを手から離れた事は無かつたといふ。師範學校の選科に入つたのは、叔父の家を出て、つくづく辛苦を嘗めて、何うしても一本立でなければ駄目！ と覺悟を仕てからで、漸く去年卒業を爲て、何うやら獨りで生活が出来るやうになりましたとかの女は語つた。

「旦那さんが居らしたと言ふぢやありませんか」

と妻は突然問うた。

と國子は忸怩して居る。

『いや、今でも居らつしやるんでせう』

これは僕。

『いゝえ、もう居りませんので御座いますよ。夫と申すものには、もう懲々。一體、私のやうな性質

で、夫を持つのが間違ひで御座いますもの、我儘で、勝手に、癪が持病で、何ぞと言ふと、厭な顔ばかり

爲て居るものですから、夫が愛想を盡かすのも無理はありませんですよ』

『それぢや、もうすつかりお分れ爲すつて了つたのですか』

「えゝ」

それで話は途絶えて了つた。

けれど、其夫といふものは何でも非常な放蕩家で、亂酒家で、國子が此上もない眞心を盡したに拘ら

ず、財産から道具類まで一つも無いまでに費ひ果して、そして、最後には何處へか行方知れずになつて

了つたといふ風聞である。

一月ばかり経つた。

ある土曜日の午後、自分はいつもの散歩に出懸けて行つて、湖水の向ふ岸までぶら／＼と逍遙つて行

つたが、夕日が已に西に廻つたので、湖水の上から、その夕照の大觀を見やうと、其儘、舟で自分の家

の岸の方へ渡る事に爲た。蘆荻の深く深く生茂つて居るところを棹で押しながら、ずつと出ると、湖水

は既に一面に夕照の焰を映して、それに向ふ船頭の老爺の顔は丸で火のやうに赤く見える。

顧ると、富士の色！

思はず自分は手を拍つた。

で、稍少時その美しい風景に見惚れて、舟が湖水の瓢箪形にくびれて居るところにかゝるのをも知ら

ずに居た、心付いて見ると、もう其處は岬の鼻。其處からは自分の家が見える筈と頭を擧げると、果し

て見える！ 丘の上に黒く小さく浮き出るやうになつて居るのは、確かに自分の家。瞳を凝して見る

と、夕照のまともさし渡つた縁側のところに腰を掛けて餘念なく話し合つて居る二人の小さい影。

それは確かに、自分の妻とかの國子とに相違ない。

あ、今、妻が此方に向いた！

と思ふと、今年三つになる長女が覺束ない足取で、六疊の間から、ちよろ／＼歩いて來るのが、分明

見える。あ、今國子がそれを抱いた！

三十分後には自分はその遠くから見た畫圖中の人と爲つた。

「好く見えたぜ！」

と畑道にステツキを振りながら、高い聲を擧げながら、近寄ると、

「私の方からも、よく見えましたよ。貴郎が岬の鼻をお曲んなすつた時から、見て居るのですから、私達の方が、貴郎より早く見付けたのですよ」と國子は言ふ。

「何うだか」

と笑ひながら、夕照の眩い程さし渡つたその縁側の前へと行つたが、見る氣もなく見ると、自分の妻は何時もの快活にも似ず、目の縁を赤くして、何故か深く打沈んで居る。

「何うした？ 氣分でも悪いのか」

「いゝえ」

「だつて、何だか、氣が進まないやうにして居るぢやないか」

「私が」

と國子は奪ひ取つて、

「私が、つまらん身の上話を始めたものですから、それで、奥様の氣を悪く爲たんですよ。こんなつまらん事をお話せんけりや、好かつたですけれど、つい、奥様があまり優しく言つて下さるものですから」

「本當に御氣の毒ですわねえ」

と妻は猶深くその物語に撲れて居るのであつた。

「何アに、これも私の運が悪いんですから、仕方が有りませんのよ。だから、もうそんな事思はないで、文學を友として、一生を一人で送らうと思つて居りますの。詩や、小説の方がどれ程、私の力になつて呉れるか知れやしません」

と言ひ懸けて、傍に立つて居る自分の方に向ひ、

「それや、私の以前の夫と言ふ者は、文學などは丸で嫌ひで、私が小説などを讀んだり、歌の書籍などを繙いたりして居ますと、酷く疳癩に觸つて、それをひつたくつて、破いて、棄て、了つた事などは幾度も有りました。それに、妾は、こんな質で、文學でなけりや、夜も日も明けないう方で御座いましたから、何んなに書籍に運が無い身と口惜しく思つたか知れませんのよ。ですから、今の身の上などは本當に幸福で、終夜、小説を讀んで居やうが、歌を考へて居やうが、誰も何とも言ふものはありませんから、結局、私のやうな者は一人が好いので御座いますよ」

「そんな事は無いでせうけれど」

「いゝえ、もうさう極めて居りますのよ。随分難儀を爲ましたからねえ」
と莞爾笑ふ。

『それで、其御方は今何處に行つて居らつしやるの……』
妻は傍からかう問うた。

『何處に行つて居るか、よく解りませんが、ある人に聞くと、臺灣とか、支那とかに行つて、相變らずまご／＼して居る相で御座いますよ』

一座沈黙に沈んで了つた。

見ると、夕日がもう少しで西の多摩の山に落ちやうとして居て、其光の花やかさ、丸で大きな火の玉の徐かに轉つて居るやうにしか思はれぬ。雲は只一片、鳥の翼のやうなのがふわ／＼と其間に磨いて居るが、後景の山々の色の際立たしさと云つたら、實に形容するにも言葉が無い位。夕暮の空氣は晴れて、しんとして、湖水の向ふから起つて来る如何なる微かなる音も、手に取るやうに明かに聞えるばかり静かなる光景であつた。自分はふと我に返つて、其のわが家に如何なる人と如何なる胸とが相觸れ相動かうとして居るかと思つて、無限の悲しい感に沈んだのである。

日は暮れて行く。われ等三人は猶依然として沈黙！

六

女教師の下宿して居る家は、自分の家から大凡七八町も離れて居たであらうか。小さい、低い雜木林

の丘を一つ越えて、湖水の方へと流れて居る狭い里川の橋を向ふに渡ると、一方は田一方は樺の大樹の繁茂に路が通じて居つて、其方に曲る角のところに見まい聞くまい語るまいの庚申の石が立つて居る。其處から一軒、二軒、三軒目の家が則ちそれで、入口に非常に大きい樺の樹が二株三株並んで聳えて居て、一道の細い道が要めの樹やら檜の樹やらの間をよぢ／＼と縫ふやうに通じて居るが、其の向ふに農家があり來りの肥料溜があつて、先第一に、鶏小屋やら馬小屋やら、農具小屋やらが雜然として眼に入る。広い中庭には箕、肥料桶、俵、蓆などが順序もなく取散らされて、古ぼけた屋根の、さぞ雨が漏るであらうと思はるゝ縁側には、小兒の襁褓やら衣服やらが殆ど小山を築くばかりに積重ねられて居る。ことに、不潔なのは、その勝手手で、永久に流れ出でない溝には、澤庵の切かけ、味噌漉の斷片、お椀の缺片などが汚い黒いどろ／＼の水の中に捨てられてあつて、其處を通る時には、一種言ふに言はれぬ悪臭が凄じい勢で人の鼻を襲ふのであつた。けれど、女教師の借りて居る室に行くには、こんな不潔なところを通らんでも好い。中庭の、南向きになつて居るところの、細い樹間の路を、白壁のところ／＼兀けて落ちた土藏にすれ／＼に辛うじて通り抜けると、こんな處にこんな室があるかと思はれる一つの意氣な離座敷があつて、夜ならば、洋燈の光が明かに樹間を洩れて、煌々とあたりの緑に閃めいて居るのが見える。

裏門らしい處から、

「居ますか？」

と聲を懸けると、

「誰様」

とやさしい聲！

「私ですがね」

と言ふと、もう聲で僕を覚えて居て、「お待ちなさい、今明けますから」と嬉しさうな聲で言つて、そして急に立上る氣勢。間もなく、障子がぱつと明いて、其處に顯はれるのは、束髪に結つた、背の高い、琉球まがひの緋の長い羽織を着た其人の姿！

「よく入らしつてね！」

とさも嬉しさう。

其室の中が又よくこの女の性質を表はして居た。入つて見ると、そんなに立派な室でもないが、整然と物が片着いて居るので、何となく改まるやうな心地が爲る。大きな唐机に自分の手づから縫つたらしい縮緬のよせ片の美しい肘つきが載せられてあつて、何時行つて見ても、新刊の小説か、新小説か、文藝俱樂部が半ば読みかけられてない事は無い。床の間には日本文學全書と日本歌學全書とが積重ねられて、柱には自分の詠らしい短冊が奇麗な短冊夾に挟まれてかけられてある。ある時、それを見付けて、

立寄つて讀まうとする、「あらそんな者を」と顔を眞赤にして、忽ちそれを隠して了つた。掛幅は橋の曙覽の懷紙で、書棚の上には、寫眞版のチ、アンの受胎の圖、サランボアの圖、サツフォの圖などがずらり一面に並べられてあつた。寫眞夾の奇麗なのに、一枚寫眞が挟まれて置かれてあつたが、それは極く親しい友と撮つたのださうで、右に腰掛けて居る國子は派手やかなお召縮緬を着て、まだ非常に若々しい風であつた。ことに、眉と眼のあたりが此上もなくよく撮れて、何處か清怨に堪へぬといふやうな趣が歴々とその態度に顯れて居た。「これは、妾の十七の時、撮つたので御座いますけれど……今でも、これを見るとこんな時もおつたのかと思つて、變な心地が致しますのよ」とかの女は言つた。其言葉、唯其言葉、それが何故か非常に僕の心を動かした。

けれど、まア、それより始めて訪問した時の大感化を少し此處に話さんければならん。それは、前の夕照を見た日から三日ほど経つたある晩の事であつたが、ふといつもの散歩の歸路に遂に寄つて見る氣になつて、そしていつにも訪問客などのあつた例の無いその靜かな一室を騒がしたのであつた。先、第一、女の嬉しさうな態度が言ひ知らず自分の胸を動かした。丁度其時はおつくりでも爲た後か何かで、その眉目の鮮なること、殆ど驚かるゝばかりであつたが、そのそはくとして居た具合、何物にか絶えず憧がれて居る有様、自分はこれ程自分の胸の秘鑰の打開かれやうとした事を覚えて居ない。僕の最初の戀——それにも僕は十分の胸を開いたに相違ないのであるが、それとこれとは丸で違ふ。初めのは、

只無意味に、只盲目に、得度いと思つたものを一途に攫み度いとばかり思つて居たが、今度のは、落付いた、穩かな、靜かな悲哀が譬へやうも無くひしと胸に迫つて来て、黙つて座つて居ても涙が眞に心の底から溢れて来るやうに感ぜられた。

其時何を話したであらうか。さうだ、一番始めに、みだれ髪の机の上に置かれてあるのを取つて、その詩想の從來の詩人の上に傑出して居るのを太甚しく激賞した。女は自分の平生愛誦して居る歌に、赤い圈點やら二重圈點やらをつけて居つたが、その中の二三を示して、この歌などを讀みますと涙が滴れて……と言つた。それが、自分の好尚と相合つたのを發見した時、自分は何んなに胸の戦ゆるのを覺えたであらうか。自分のわが最愛の妻に求めて得ず、獨りこれからのロンリーライフを悲しんだ不滿不足はゆくりなくこの女の胸と相觸れて實に限りなき満足を來さうとしつゝあるのではないか。

それから戀といふ事に關しても随分語つた。戀と言ふものは神秘である。到底、我々の小さい智識ではそれを十分に知る事は出來ぬ。只沈黙、沈黙ばかりが纔かにそれに達する事を得るものである。そして、沈黙と言ふものゝ價值、人性の内部といふ事に就いても、色々語つたが、話が佳境に入ると、かの女は唯じつと眼を見張つて、さも〜遠い物音を聞くかのやうに、頻りにそれに聞惚れて居る。

かの女は確かに精神の人間である。

それから、自分はこの例の運命説をも持出して語つたのを覺えて居る。この宇宙には、三つの神秘が

ある、即ち、戀と、死と、運命とである。而して運命と死とは、パツシーイで、風の如く來り、風のごとく去り、人間には又何等の交渉をも爲て居らぬが、戀ばかりはアクチイブであるから極めて面白い。即ち、宇宙の神秘に達するには、戀の力を以てするより外に便なる方法は無いと言つても好いのだから面白い。だから、御覽なさい、戀と運命、戀と死、戀が何んなに不可思議界に足を踏込んで居るか、一寸考へても解る事です。それから世の中の人はこの日常行はるゝ事、假令へば政治界の問題とか、社會主義とか、道德問題とか、乃至は日常の交際、寒暄の談話などに重きを置いて、それより外には人生が無いやうに心得て居るが、それは非常な間違で、かれ等は目の見、耳の聞えない處に、此上もない眞面目な、此上もない必要な大問題の未だに解釋されずに閑却されてあるのを知らぬのである。其故、我々は精神の問題を研究して、その深い、神秘なある物に觸れるやうに爲なければならぬとかう語つた。

君、其夜の光景を想像して見給へ。丁度、薄月のある暖かい靜かな夜で、戸外には花の影が淡く地上を隈取つて居て、空氣は何とも知れない穩かさ^やと和かさ^やとを備へて居た。何處か遠くで蛙の鳴く聲がして、天地が丸で酒にでも酔つて、ぐつすり眠込んで居るかのやう。薄靄が段々深くなるに連れて、地上の花の影は次第に薄く、やがては有るか無きかの有様になつて了ふ。……あゝ自分は今考へても、まだ其時の光景が歴々眼の前に映つて、何うも爲らぬのである。まして、室内に明るい洋燈を挟んで相對座して居る二人の影！互に深く感に入つて、互に深く沈黙して、折々長大息を洩しつゝ、あゝ地上にあ

やがては酒にでも酔つて、ぐつすり眠込んで居るかのやう。薄靄が段々深くなるに連れて、地上の花の影は次第に薄く、やがては有るか無きかの有様になつて了ふ。……あゝ自分は今考へても、まだ其時の光景が歴々眼の前に映つて、何うも爲らぬのである。まして、室内に明るい洋燈を挟んで相對座して居る二人の影！互に深く感に入つて、互に深く沈黙して、折々長大息を洩しつゝ、あゝ地上にあ

る二つの靈魂は其時いかに深く互に相觸れたであらうか。

餘り遅くなつてはと、惜しい別れを告げて立上つたのは、彼是十時過ぎであつたらう。柴折戸を明けて、花の影の美しく濃淡の豎縞織り出して居る間を其儘白壁の土藏の方へ出やうとすると、かの女はあつたと後から追つて来て、

『餘り月が好いから、其處まで送つて参りませう』
いと苦しうな呼吸を吐いた。

で、二人は肩を摩り合はせぬばかりにして、その狭い白壁の土藏の間の路を、向ふへ出ると、樗の高梢から面白く月が洩れて、其の絶間々々に、ひろく薄靄に包まれた夢のやうな野が打渡さるゝといふ光景。胸が躍つて、頭腦が冴えて、實に何とも言はれぬ程の興を覺えたのである。

樗林を出やうとする時、

『妾は、本當に今夜のやうな面白い事は此迄に無くつてよ』
と、突然女は言つた。

『僕も非常に面白かつた。こんな田舎に貴嬢のやうな好い話相手を見付けやうとは思ひも懸けんではた』

『本當に面白いの、面白くないのツて、……私ア、胸が騒いで、氣がそはくして、こんな思ひを爲

た事は、本當にもう何年振にも有りは爲ませんのよ』

『僕も非常に好い心地が爲た！』

『私、確か、十六の時でしたが、一度これと同じやうな深い感を受けた事がありましたかね』

『何ういふ？』

と自分は女の誘に乗つた。

『何ういふツて、つまらない事ですけどもね……』

と口籠る。

『十六の時と言へば、何うせ、もう、ラブの事でせう？』

と態と笑ひ懸けると、女は自分の顔を見て、莞爾笑つて、

『まア、左様なよ、秋でしたけれど、丁度、今夜と同じやうな月の夜で、物語の中にもあるやうな有様でした……』

と言ひ懸けて、少し躊躇して、『もうよませう、思ひ出したら、何だか悲しくなつて來ましたから』
『好いちやありませんか』

頭を低れた儘、二三歩野の方へと歩いて行つたが、やがて、また波の寄するやうに胸に集つて來る思想を何うしても押へ兼ねたといふ風で、

『十六位の頃は、思想が單純で、悲しいと言へば、唯悲しい。戀しいと言へば唯戀しいといふばかりですが、それでも深いところまでは達する者ですねえ。今から考へると、先程御話にかどつた、精神の境に確かに達したに相違なかつたですからねえ』

と言つて調子を改へて、

『それでもまだあの頃は若う御座んしたね。悲しくつて、人に別れたのが唯悲しくつて、……その癖、其人を何うの彼うのツて言つたつて、とても駄目なものでしたけれど。いゝえ、あの頃は、唯あくがれて居たと言ふのが、一番適當なのですねえ、戀しいと言つたつて、誰が戀しいといふのでも無く、悲しいと言つたつて何が悲しいと言ふのでも無いのですから』

『本當に、左様だ！』

少時また黙つて歩行くのであつた。

『丁度、かういふ野原で……』と又、女は話し出した。『橋がありましたのよ。蘆荻などが其處等一面に繁つて、一寸風情のある處でした。其處まで妾が送つて來る、もう何うしても別れんけりやならんと言つて、すうと行つて了ふ。見て居ると、男といふ者は無情な者ではありませんか、振返りと爲すに、ずん／＼向ふに行つて、とう／＼松原の中に隠れて了ひました。もう……と思ふと、涙が溢れるやうに出て、じつとして何うしても立つて居られない。仕方なく、其橋の欄干に凭り懸つて、思ふさま、泣い

て、泣いて泣崩折れました。今でも分明覺えて居ますが、涙の出るのが烈しいので、橋の下に映つて居る月が遠い／＼數百里も奥にあるやうな氣が爲て、……いつそあの時死んで了へば好かつたのですけれど……』

と莞爾笑つた。

『それが、その、十六の時ですか』

『えゝ』

『もつと詳しく話して下さいでも、好いでせう』

『いゝえ、つまりませんもの……』

と僕の方を振向く。

其顔——その際立つて白い顔に、美しい月がまともにさし渡つて、レニーの名畫そつくりと思はるるばかりの艶色。よく似合つた束髪の後れ毛が二三本春の夜の暖かい風に吹なぶられて、漆のやうに房々と黒く多い髪に、恰好の好い、富士の形をした大きい額……。

見ると、いつかもう雑木山を越えて、向ふの湖水の一面に打渡さるゝ小丘の上に来て立つて居る。

『あ、御覽なさい、湖水の好いこと！』

『まア……』

と話に氣を取られて、氣が付かなかつた女は、指された方を瞥と見て、驚いたやうにいふ。
何たる絶景ぞ。夜の薄靄が鏡のやうに平かな滑かな湖水の上に、被衣でもかけたやうにふわりと被ひかゝつて、月が其上から微かに穩かに照り渡つて居るが、ところ／＼靄を洩れて湖面に落つる光はさながら一ところ態と磨き立てた金屬のごとく、きら／＼と眩ゆく光る……。對岸の林は鼠色の刷毛で塗つたやうになつて、此方の湖水の一角などは丸でほんのりと見えなくなつて居るといふ光景。
聞ゆるは唯蛙の聲ばかり。

『夢のやうですなええ！』

と女は言つた。

『本當に夢だ、夢に見る景色はいつでもこの位ぼんやりして居る！』

ゆくりなく右手を見ると、その茫とした夜靄の間を透して、黒い低い一軒の家の影と一穗絶えんとするごとき燈火とが微かに見える。これは自分の妻のわれを待てる燈火である。

『御家の燈火が見えますね』

『ええ』

『奥さんは、何處に行つたらうつて、待つて居らつしやるでせうね』
と笑ひながら國子は言ふ。

『何あに』

『何時でもこんな遅くまで出て居らした事は無いんでせう』

『無いけど、構はんです！』

少時話が途絶えた。

『それにしても、貴郎は御幸福ですわねえ。あんな好い奥様を御持ちなすつて……』

『何あに、駄目ですよ』

『少しも駄目な事は無いぢやありませんか、あんな、やさしい、あんな温順な、——私は感心して居りますわ』

『文學は更に解らんですからなア』

こんな事を言つてはならんと思ひながら、遂い口を滑らして了つた。

『だつて貴郎は奥さんを御望みなすつて御貰ひなすつたのぢやありませんか。其頃、いろ／＼雑誌にその噂が出て居りましたから、そんな事を仰しやつたつて、誰も本當には致しませんから大丈夫ですよ。それに、お嬢さんのお可愛いこと！』

自分は黙つてそして別を告げた。

二三步、歩いた後に、

「奥さんによろしく！」

といふ聲が響いて聞えた。

五歩、六歩。振返つて見ると、女はまだ其處に立つて居る。猶五歩、六歩。まだ立つて居る。何か深い空想に耽つたとも言ふやうに、じつと身動をせずに立つて居る。けれど、それも段々遠く、遠く、自分の家屋の燈火の愈鮮かに明かに見え出すあたりまで來ると、まだ依然として、其丘の上に立つて、此方を見て居るに相違ないけれど、もうその影も形も深い夜の靄の中に隠れて見えぬのであつた。静かな春の夜！

* * * * *

家に歸つて見ると、嘸待つて居るであらうと思つた妻は、長女と共に座敷に眠つて居て、迎ひに出たのは、今迄居眠を爲て居たらしい、赤ら顔の、間の抜けた下婢の顔！

妻を揺起して、

「何うかしたのか？」

と聞くと、

「頭痛が爲て何うも起きて居られませんでしたから」

と言ひ／＼立上つて、時計を見、

「おや、もう十一時……何處に行つて居らしたの？　こんな遅くまで」

「何あに、黒瀬（若旦那の家）に行つたら、色々の話が出て、遂い遅くなつて了つて……」

自分は自分の最愛の妻に、まさ／＼しき虚偽を言ふべく餘儀なくされたのである。

少時してから、

「頭痛つて、何んなだえ」

「ナアに、血の加減ですけれど、……もう七月になる者ですから、矢張彼方此方變で」

今まで言ふのを忘れたが、僕の妻は懐妊して居たのである。

七

君、僕はその不可思議なる運命と其後いかに戦つたであらうか。自分は兎に角一家の主人である。最愛の妻、最愛の子をも有つて居る。否、曾て一度純潔な戀を爲て、それで以て、今日の楽しい、穩かな、人から羨るゝやうな家庭をもつくり得たのである。それであるのに、假令其妻から文學的趣味の満足を得ぬからと言つて、その醇なる愛を他の女性に移すとは、餘りと言へば、無節操、無主義、無思想である。妻の身になつても考へて見なければならん。女の脆弱い身で、一生の苦樂他人に依るといふ風に、只この自分を力に爲て居るのに、——否、妻だとして、自分より數等思想の合つた、數等心に適つ

た、もつと好ましい男が廣い世の中には幾らも有るに相違ないのだ。けれど、それを犠牲にして、もう一度夫と定めた上からは、假令氣の合はぬところがあらうが、假令他に氣を移すやうな男があらうが、そんな事に頓着せずに、全身愛を捧げて呉れるのに、苟もそれに隠して、ある他の女性に愛を寄せるとは、實に、罪惡も罪惡、怪しからんと言はなければならぬ。

殊に、妻は自分に對して多大の犠牲を拂つて居る。妻の性質は一體文學者などといふじみな貧乏な生活には適して居らぬのである。軍人とか大學出身の奏任官とか世に時めく派手な暮しを爲て見度い方の性質であるのである。歌をひねくつて考へて見たり、小説を讀んで目を腫らしたりするのは、妻の眼には實に不思議にも可笑くも馬鹿々々しくも感ぜらるゝのである。それを押へてこの身に盡して呉るゝ不満、その不満は自分の妻から得られぬ文學的趣味の不満より何れ程大きく、何れ程深く、何れ程情なくあるであらうか。兎に角、自分はかの女を愛して居るからまだ好いが、自分のかの女を愛する分量より少く自分を愛して居るかの女にしては、殆ど堪へ難い苦痛であるかも知れぬ。勿論、かの女は無邪氣であるから、それ程まで深く考へては居らぬであらう。否、自分のやうに主我で無いから、更に苦痛と思つてすら居らぬかも知れぬ。けれど、知らぬからと言つて、それを欺くとは、何たる情無い心であらうか。かう思ふと、實に自分ながら自分の無節操、無主義に愛想が盡きて了ふやうな心が爲て、もうそんな事は思ふまい。かの國子と氣の合ふのは、決して戀などと言ふものではない、斷じて無い。唯、友人、

話の合ふ友人として交際して居るばかりであるとかう自から打消して了ふ。

けれど、さう打消して了つて、それで心が清々とするかと言へば、決して左様で無い。打消したすぐ跡から、國子の精神的性質である事やら、その感情の醇にして熱烈なる事やら、不幸なる經歷やら、最初の夜の烈しい印象やら、美しい、表情に富んだ清らかな眸やら、色の白い、髪の濃い、すらりとした立姿やらが、限りも無く跡から跡へと押寄せて來て、折角執り懸けた小説の筆をも傍に捨て、茫然たる事は幾度もあつた。

ことに、小説に耽つて居る八疊の机からは、國子の教鞭を執つて居る對岸の小學校の一部の白壁がよく見えるので、時間毎に水を渡つて響いて來る、拍子木の聲、續いて起る學童の騒聲、殊に正午の休憩時間には、其樹の間から生徒の遊んで居る數もちら／＼見えて、現に二三度その女教師が十五六名の女生徒を連れて、湖水の岸を散歩して居たのを認めた事もあつたのである。

否、そればかりではない。午後三時半になると、國子はいつも湖水を舟で渡つて歸つて來るのが例だ。

妻が机の傍で裁縫を爲ながら、

『ほら、學校の生徒が歸つて來るから、國子さんも直き見えますよ』

といふ。

見ると、學校の生徒を載せた舟が一艘、向ふの蘆荻の洲渚を離れやうとして居て、白髪の老船頭が一本の棹を弓のやうに強く強く突張つて居る。岸には、取り残された學童が一小隊ほど集つて居て、何か頻りに騒いで居るやうな光景。

それを悉皆渡して了ふには少くとも五度程往復しなければならぬ。その四度目か、五度目かあたりに、かの國子は歸つて來るので、見て居ると、その一方麥畑、一方桃林の緑紅相交つて居る間から、鼠茶の蝙蝠傘の日に光つたのがひよつくり顯れて來る。

「そら、國子さん！」

と妻は喜ばしけにいふ。

蝦茶の女袴を着けて、右の片脇に紫の唐縮緬の風呂敷包を抱へたなつかしい其姿は、畑道の間から段渡船場へと近づいて來て、少時立留つて、さてその船に乗るのであつた。

鼠茶の蝙蝠傘は、稍傾き始めた日影に光つて、段々此方の岸に近づいて來るにつれて、その影は極めて明かに、澄み渡つた湖水の面に倒に映るのであるが、自分は白い雲の影、鳥の影と共に映るその面影にいかにか心を動かしたであらうか。

此方の蘆荻の繁みに一寸隠れると思ふと、又見え出して、程なく此方の岸に着くと、其儘靜かに岸に上つて畑道を自分の丘の方へと進る。

「今日は寄つて入らつしやるかしら」

と言ひながら、妻は裁縫の手をとめて、凝と見て居る。

丘の中頃の道祖神の石の立つて居るところの道、そこが二筋に分れる追分で、自分の家に立寄るか否かは、實にその一角で分るのである。

國子は阪を上つて、今しも其追分の石の立つて居る處へと遣つて來たが、自分等が見て居るか何うであるかといふ事を確める爲めに、其處で暫と此方を見る。

立寄らずに、別の路に行き懸ると、

「國子さん！」

と妻は呼ぶのであつた。

すると、蝙蝠傘を少し傾けて、その白い顔を鳥渡出して、優しげに挨拶して、さて、靜かに向ふに行つて了ふ。

自分はその對岸の小學校の白壁、學童の騒ぐ聲、午後の舟渡し、鼠色の蝙蝠傘に向つて、如何に終日長くいろ／＼なる空想に耽りながら、進まぬ勝の長い／＼小説に筆を執つたであらうか。先年世に公にした『死の痛苦』、それが其時書いて居た作品で、其頃は確か、十二章のあの子爵の令嬢の結婚の處を書いて居た。

で、我々の交際はさういふ風で、僕と國子との間には少なからぬ低氣壓を來して居りながら、猶少しも曇らぬ秋の空のやうな光景を呈して居た。國子はよく訪問するし、妻はよくその相手になるし、僕は又よくこつそり國子の下宿を訪ねて夜を更した。僕の煩悶は依然たりで、甚しいのは、ある時次のやうな危険な思想を抱いた事すらあつた。

「神聖な戀愛は到底分割する能はざる者と思つたのは、甚しい誤りで、偶、其時ある一物に執着したから起つた偏つた考である。戀は、情の變形で、その情は一分、二分、百分しても、猶依然として元のまゝでなくてはならぬ。であるから、雙方から同じ情熱と同じ愛着とを灑がれた時は、人はそれを二つながらおのれの身に受けて些とも差支ないのである。否、それを道德の上から責めるのは、それは一種の社會律のやうな者で、第二義にも第三義にも下つた末の話である。だから、スピノザも理性の力を情の上に施すのを許さなかつたので、それが爲めにかれの倫理はそれまでの哲學者の夢想する能はざるところまで進歩した。情は情である、理性は理性である。假令、道德に反さうとも、社會に背かうとも、この恐るべき潮の横溢するを如何して防がう」
また、ある日の日記にかういふ事を書いた。

「男子は、情慾の交なくして、清く美しく、友人たるの情のみを異性の者に與ふ事能はざるにや。世の男女の間柄にして遂に一生友人の關係たるに止まる能はざるを見れば、兩性は同棲せざれば止まざるの

本能を有したるならん。然らば、互に相愛したるもの、相抱くに於て、果して、何の疼しき事是れあるべき。世は一夫一妻を唱ふ。されどこは現世の秩序の上に打建てられたるはかなき規則のみ」

「されど翻つて思ふ。人間は何が故にかく動き易き心とかく亂れ易き情を有せるにや。情は防ぐ可らず、理は捨つべからず。止むなくんばそれ、われは情に従ひてこれを決すべきか」

「否、否、否——」

實際、自分は甚しく迷つた。理性から言ふと、さる危険の地に臨んだのが、既に第一の過である。否、危険と知つたならば、既に一步を踏込んでも、急いで其處を避けやうと爲なければならぬのである。であるのに、自分の情は自分を驅つて、直ちにその深淵に陥らしめた。

で、自分等の間柄はいよゝ親密になつて、五月の末頃には一日でも逢つて話を爲なければ物足らぬやうな心地がするまでに立至つた。妻は内心では既にそれと感附いて居たには相違ないが、さりとしてそれらしい様な態度は露ばかりも顯はさなかつたので、或はこれは其身の文學的趣味を有つて居らぬ爲めだから仕方が無いと斷念めて居たかも知れぬ。あゝそれにしてもその二三ヶ月の間、自分と國子とはいかにその湖水の畔を逍遙したであらうか。夜はもう暖かになつて、麥の赤く色付いた穂の上に、螢が二三點、流星のやうに飛ぶのを見ながら、自分等は實に、實に、深い精神の問題に耽つたのであつた。殊に、自分等のよく行つたのは、湖水の南岸の、懸崖になつて居る、合歡の樹の下で、其處からは湖水の

一面が遠く瞥と見えるばかり、三方は全く萱やら雑木やらに蔽はれて居て、丸で別天地——確かに我々の爲めには此上もない別天地であつた。

其處に、我々は多く戀を語り、多く運命を語り、多く精神に響いて來る聲の神祕を聞いた。國子の初戀のあはれな物語を聞いたのも其處、その夫のいかに其身に残酷であつたかを聞いたのも其處、みだれ髪のを二人で聲を合せて面白く打誦したのも其處、今の文壇の作者に就いて、いろ／＼面白い批評を下したのも其處、自分の妻を戀した一伍一什を打明けて、今の平和の無意味であるといふのを語つたのも、實に其處の一角であつた。闇の夜の湖水の上に聴かしげに映る星の影、雑木林の暗い奥に微かにさし渡つた夕月の光——實に今でも眼に見える。

八

ある日、突然國子が、

『こんな事を言つては可笑しいですけど、私、今日變な事を言はれたのよ』

『誰に』

『黒瀬さんに』

と言ひ込んで、

『貴郎は此頃、餘り黒瀬さんにお逢ひなさらなくなつて』

『いや、遂昨日逢つた』

『何にも仰しやらなくなつて……』

『何にも……』

『それぢや、妾にばかり彼様な事を仰しやつたんですね』

と思ひ沈むのであつた。

『何うしたんです』

『何に、つまらん事ですけどもね』

『それでも言ひ懸けて聞かんのは、何だか揶られたやうで、餘り心地が好く無いですから』

『それぢや、言ひますがね』

と俄かに改まつて、

『廣瀬さん、私達はね、村中の大評判になつて居るんですと……』

『何うして?』

とは言つたが、自分は心の中にはつと思つたのである。

『何うしてつて、私達が一所にかうして歩いたり、何んかして居るのを、村の若い人達が彼方此方で

見たとか言つて、……それに、黒瀬さんの仰しやるには、僕は貴嬢を紹介したのだから、其様な事が有つては奥様に濟まんし、それに、貴嬢も教育家で入らつしやるからつて、かう仰しやるんですよ」

「馬鹿な！」

「本當にね、私達さへ潔白であれば、幾何そんな評判を立てられても、構ひはしませんのですけれど……それでもあまり評判が高いので、學校の方でも何だか種々話が有るつて言ひますから」

「それはお氣の毒ですね」

「いゝえ、妾は構ひやしませんわ。貴郎のお蔭で、色々面白いお話をうかゞつたり、此上もない御教訓を伺つたりしたんですから、學校なんて、何うなつたつて、そんな事は構はんですけれど……」

「馬鹿な話ですナア、然し」

「本當に、世間と言ふものは……」

と言ひ懸けて、少し躊躇ひ、

「けれど……然し、奥様もそんな風に考へて居らつしやるんでは無くつて？」

「何うしてとす？」

「何うしてつて、黒瀬さんの仰しやるには、奥様ももうあゝして懐妊して、來月は臨月で居らつしやるに、そんな事があつてはそれこそ大變だと仰しやいますし、それに、奥さんも、此頃ぢや……」

「いや、そんな事は無いです、斷じて無いです。よしんば又有つたに爲た處で、それは風評に止まるのですから」

「けども、假令風評でも、誤解でも、奥さんにさういふ考を起させ申しては、それこそ本當に濟みませんからねえ」

「そんな事は無いです」

「いゝえ、貴郎はさう仰しやるけれど……私は、何うも此頃は奥さんもさう思つて居らつしやりは爲ませんかと思ひますわ。何うも、お話を爲ても、昔のやうに打解けては下さいませんですし、何だか、かう間が抜けて居るやうですもの」

「いや、そんな事は決して……」

と自分は言つたけれど、此頃變つて來た妻の眼色、——一種言ふに言はれぬ不思議な眼色をゆくりなく思ひ出して、ゾツとして戦慄した。

「現に、一昨日御訪ね爲た時なども、何だか變で、私と貴郎と御話して居ると、以前は奥さんはその前にもちゃんと座つて笑つて聞いて居らつたものですが、此頃では、却つて悪からうと言ふやうに、態と席を外して向ふに行つてお了ひなさるぢやありませんか」

「何アに、さういふ譯でも無いですけれど」

「奥さんは、何とも貴郎に仰しやらなくつて」

「言ひませんとも」

「さう……」

と軽く言つたが、其儘に黙つて了つた。二人は其の湖水の南岸の別天地の草原の上に腰を休めて居るので、六月の爽かなる夜の氣はそこはかたなく衣を襲つて、今しも登り懸けた月は、前の湖水に美しい光を碎かうとしつゝあるのである。四邊はしんとして、靜り返つて、蘆荻の些の戦ぎすら、今は天地の平和を擾してはならぬと言ふやうに、全く音を絶つて居る。只、前の淵に、鯉の躍る聲がをり／＼高く聞えるばかり。

螢が一つふわ／＼と飛び過ぎた。

「あゝ人間は厭、厭！」

俄かに胸が迫つたやうに、國子は獻歎の顔を手中に掩ひながら、

「女は男の方とは友達として、御交際ひ申す事さへ出来ないのですねえ！」
と泣伏すのであつた。

君、其時の僕の胸の紛亂は何んなであつたと思ふ。簇々と鎧に立つ矢のやうに集つて来るその感情の毒矢を自分はいかにして拒いだと思ふ。僕は、殆ど身を國子の上に寄せ懸けて、此程思つて居るのに、

友達とは情ない！と言はうとした。

少時沈黙したが、

「妾は……」と國子は辛うじて言葉を續いで「私は、そんな考は少しも無く、……純潔に、神聖に、只兄様として御交際申して居るのに……あゝ、私は、どうせ不幸福、私のやうな者はとうに死んで了つた方が好いので御座いますよ。……今の世の中には、とても私のやうな者は向かないので御座いますよ」

自分は慰めるに言葉が無い。

「それにしても、私は何たる不幸福な、悲しい身でせう。叔母には酷めらる、戀人には捨てられる、夫と頼んだ人は放蕩で、薄情で、……漸くそれも通つて、貴郎のやうな氣の合つた、力になる人が出来て、嬉しい、忝ない、何か私の淋しくつて淋しくつて爲方の無い身體をその平和な暖かい家庭に加へて戴かうと思つたのに……それすら、出来なくなるとは！ 廣瀬さん、私のやうな女は淋しい孤獨の生涯を送らなければならぬのですねえ！」

と再び獻歎けた。

「何アに、そんな事は無いではありませんか。心に疚くさへ無けりや何と言はれたつて構はんではありませんか」

「いゝえ、それは駄目ですよ」

「駄目？ 何うして？」

「何うしてつて」

と手巾を眼に當てた。

國子はもうかう爲つては悲しいけれどお互の交際を止めなければならぬといふ事やら、場合に依つては、向ふから言出されぬ前に辭表を出さんけりやならぬかも知れぬといふ事やら、假令別れるやうな事があつても手紙の往復だけは許して下さるでせうねといふ事やら、先から先へと取越苦勞をして、自分がいくらそれをなだめやう、慰めやうとしても、更にその效が無かつたのである。

「忘れもせぬ、國子に別れて自分の家に歸らうとする途次、自分は何んな危険な空想に耽つたであらうか。その路傍の石、それに腰掛けて、何故に人間は互に相愛するものを相抱く事が出来ぬのか。何故に、互に深く相愛しながら、それを一片の友情に止まるなど、虚偽を言つて別れなければならぬのであらうか。自分の妻、妻にも會ては愛があつた。此世に二人と無いものとまで思つた。けれど、今はその愛が消えて、國子を思ふこと更にその百倍、千倍に及んだのである。然らば、何故に自分は國子と唯の友人——只無意味なる女友としてそれに別るゝ必要があるか。人間の心と言ふものは、千變萬化、一生の中には、如何なる事に逢つて如何なる現象を來すか、それは更に測度し難い者である。それであるの

に、愛の消えた女の冷たい肌に安んじて、千載の一遇とも言つべき烈しい戀愛を捨て、了ふとは、實に愚劣極まることである。

家に歸つた時には、恐らく自分の態度は毎時とは甚しく違つて、何處か激したやうな、それはくしたやうな様子が有つたに相違ない。妻はもはや臨月近い身の、大きな腹を抱へて、髪も東ね髪の亂れ勝に、瘦れはそこはかとなく其の顔にあらはれて居る姿を大儀さうにして迎へに出たが、自分の顔を見ると、突然、

「何うか爲すつて？」

と問うた。

「己よりもお前は何うかしたのか、泣いて居るぢや無いか」

妻は確かに目を泣腫して居た。

「何アに、色々一人で考へたのですよ」と莞爾して、妻は、何うかすると、悲しくなつて仕方が無くなつて了ふ事があつてよ。直き治つて了ふのですけれど……」

「何を考へたんだ」

「何つて……」

と躊躇して居る。

「話してお聞かせ」

「なアに、つまらん事なのですよ。けどもね、私はお産は重い方で、貞（長女の名）を生む時にも、もう死ぬだらうと思つた位でしたから、今度も何うだらうと思つて、……それにね、お産婆さんの話では、こんな大きなお腹を見た事が無いつて言つて、不思議にして居りますから」

「そんな事がある者か」

「そりや、ありやしませんのさ。そんな事が澤山有つちや、お産をする人は有りやしませんけれど、それでもね、人間は壽命ですから、何時、どんな事が有つて、死なゝい者でもありませんわ。それに女は産は大役で、棺の中に片足踏込んで居るやうな者だと言ひますからね」

自分は黙つて居た。

「だから、今も考へて居りましたのよ。お歸りになつたら、よく色々御話して、妾が死んでもあの貞ばかりはよく世話を爲て、面倒を見て遣つて下さいつて。あの子は弱蟲で、何ぞと言ふと、ひーくと泣いてばかり居りますから、本當にそればかりは貴郎に御願ひ申しますよ」

とほろり一雫。

「お前は何故そんな事を言ふんだ！」

「何故つて、唯……」

「何か、己に不満な事でもあつて、それでそんな事を言ふのかえ」

「いゝえ、左様ぢや無いんですよ。唯、さう、思ひ付いたから、言つたんで、他に何にも意味は無いのですよ」

「それぢや、そんな事は言はんでも解つて居るぢやないか」

「それは解つてますさ、けどもね、私は今さう考へたから、言つたので、私が死んだ跡には、何うせ、貴郎は男で居らつしやるから、一人では居らつしやらないに極まつて居る。そんな時に、世間に有り觸れた繼子苛めなど爲せられては、それでは、餘り可愛想ですからね」

「馬鹿！」

「馬鹿ぢやありませんよ。私が死ねば、極まつてさうなるぢやありませんか」

「大丈夫だよ」

「何うですか」

と言つた妻のやつれた笑顔を見て、自分は非常に可哀想に感じた。

「本當に大丈夫だから、そんな事は考へん方が好い。餘り、考へて、中の兒にでも障ると猶悪いから」

「何アに、妾ア、死んでも好いのよ」

『亭主と子供と残して、死んでも氣の毒とも何とも思はんのか』

『だつて、爲方が有りませんもの』

『だから、養生をして、そんな下らん事を考へずに、今度は立派な男の兒でも生むさ』
妻は黙つて居る。

少時してから、

『貴郎はもう私が居なくつても、好いでせう』

『何故』

『何故つて、言はなくつても解つて居ますわ』

『己には解らん』

『それぢや、好いわ。解るまで、待つて上げませう』

と淋しく笑つた。

其笑顔——そこには何んな苦しい悲しい思ひが潜んで居つたかと思ふと、今は實に腸を斷つやうな心地がする。けれど、其時は左程には思はなかつたので、寧ろそんな嫌味を當付けらるゝのを面憎く思つた。

其夜、自分は遅くまで眠られなかつた。それからそれへと思ひ遣ると、種々さまの空想が一つ矢

のやうに早く飛んで簇つて來て、そして又忽地にして何處へとも無く消えて行つて了ふ。……國子の言つた事やら、妻の繰返した述懐やらが、亂れて、こんがらかつて、果てはそれが七重にも八重にも取巻いた蛇か何ぞのやうに、堅く執念なく自分の精神に絡み付く……。

不圖——

『妻が死んだら……』

と思つた。死んだら、死んだら……と五度ばかり頭腦で獨りで繰返して言つた。死ねば、自分の運命は確かに一變する。今までの古い、厭々した生活を離れて、再び新しい面白い人生に入る事が出来る。

……かと思ふと、何だ、それは貴様の言ふ事か、神聖の戀、純潔の戀とあれほど叫んだ貴様の口から言へる事かと、誰か遠くで自分を罵る聲がする。すぐ打消して、理性は理性、情は情、その最も強い情が一番正しい勢力で、人間の良心はそれによつて判斷するのが一番好いのだ。何も恐るゝ處は無い、何も疚しい處は無い。今の場合確かに死ねば好い。死んで呉れゝば確かに難有い。

千歳の一遇！ と物狂ほしく叫んだ。

九

翌日、いつものごとく見て居たけれど、國子の姿はその渡頭に見えない。何うしたのであらう。いか

な日でも其姿の見えぬ事は無かつたのに……と幾重にも不審にして、夕暮に、鳥渡其家を尋ねて見ると、今朝早く至急な用が出来たと言つて、所澤の一番で東京に行つたとの事である。

失望して、其歸るのを待つて居たが、其翌日になつても、矢張其渡頭に姿が見えない。其翌日も。

何うしたのかと思つて居ると、その三日目の午後二時頃、何處の者とも知らぬ汚い六十ばかりの、鬚のもしやくと生えた老農が、とぼくと畑道を自分の庭に入つて来て、

「東京から来て居さつしやる先生タア、貴郎さアかね」と突然言ふ。

「東京から来た先生とばかりでは解らんが、名前は何と言ふんだ？」

「廣瀬さん言ふだア」

「それなら宅だ」

「そらア、美しい上さアから頼まれて来たアアが」と懐から一通の手紙を取り出し、

「これア、お前さアの處で、間違ナア無いかんべか」

見るとそれは彼女からの手紙！

「間違はない、宅だ！」と引手繰るやうに、その老農の手から取つて、そして自分は封を裁つた。讀下すと――

一筆申上参らせ候、かゝる倉卒なる別離と相成り候はんとは夢にも存じ候はざりしに、餘儀なくかかる事と相成申候次第、悪からず思召被下度候、かの夜お別れ致し候ふてより、道々つくづく獨り考へ見申候ふに、其時友としての交際のみ致し居候やうに申上けしは、心にもなき虚偽なる事追々に判然致し、妾は友としてのみならず、戀人として貴郎様を相愛し居り候ことを自覺致し申候、友情と申候やうなる淡き愛情にはとても満足致し兼ね候女の身ほど悲しき者はこれあるまじく、其夜は獨り遅くまで、月に向ひてつくづくと泣明かし申候、さりとて貴郎様の愛情を冷淡に申すにては夢無之、奥様さへなき御身ならんには、此方より強ひて御願ひ申してなりと、この燃ゆるごとき心を満さではやむまじきに、貴郎様は人一倍すぐれたまひしやさしき奥様を御持なされ、可愛ゆきお子様をさへ持ちたまへる平和の御身、それにごときはかなき者の爲にその平和を破り申候ことは、到底妾の忍ぶ事能はざるところに御座候。其夜遅くまでいろくんに思ひ返しつゝ、月に向ひて嘆き候ひし妾の涙、幸に御察し被下度、妾はこれよりいよく寂しく悲しく一人この長き世を送り申すべくと辛うじて決心仕候。されど貴郎様よりこの四ヶ月の間に受け候ひし感化は決して決して忘るまじく、貴郎様の姿は永久にこの胸を去ることあるまじくと存候。

あの翌日東京に参り候ふて、いろ／＼行末の事など相定め、昨日歸村の上、校長に面會致し、辭表差出し候ひしに、普通ならば出來得ぬ事も、あしき噂とやらの相立候爲めにや、忽地に相許され、再び鳥のごとき自由なる身と相成申候。其歸途、湖水を例のごとく渡り候はんと存じ、かの桃の林の處まで参り候ひしかど、姿を御家の人々に見せんことは却りて決心の鈍り候ことと思ひ返し、遠き路を態々廻りて、人知れずおのれの寓に歸り、荷物を纏め候ふて、其儘出立仕候。あれ程御世話になりし奥様に一言のお別れをも申上候はぬいかにも心苦しく候へども、これはよろしく貴郎様より御申譯被下度、行末も平和に楽しき月日を送り給はんことを神かけて祈り申候。貴郎様にも時々はこの廣き世の中の何處にか只一人さびしく悲しく日を送れるあはれなる妹あるを思ひ出し下され度かへす／＼も願上候。

國子

御兄上様

自分は腦の廻るやうに覺えた。

「何處、何處でこの手紙をお前は頼まれたのだ！」

「何處ツて、おらア飯能の在の横芝ちふ處の者だが、浦郷へ行くべい思つて、せつ／＼道を歩いて來ると、荷物と一緒に車に乗つた、若い、美しい神さアが私を呼び留めて、萱田へ行く人では無いかと仰

しやるだア、ぢや無えけど、通り路だア言ふと、それではツて言つて、これを頼まつしやつたどア」

「所澤の方へ行つたか」

「はア、汽車に乗んなはるだんべい」

所澤驛から發車する午後の汽車は三時三十分！ 自分は急いで、机の上に置かれてある時計を見た。

丁度三時！

急げば三十分で行かれぬ事は無い。一分前でも構はんから、まだその汽車の出ぬ中にさへ其處に行き着けば、何んな事をして——袖を引張つても必ず引き留める。此程烈しく思つて居る戀、それを少しも互に言ひ顯はさずに、他人のやうに別れて了ふとは、何うしても堪へられぬ。

「何處かへ往らつしやるの」

と妻は自分の立出やうとするのを遮つて入つて來た。

「鳥渡其處まで」

「その手紙は？」

と机の傍に驅寄つた。

「見ちやいかん」

と自分はそれを取らうとする。妻は一生懸命に見やうとする。二人は少時それを争つたが、

「勝手に爲ろ！ そんな事を仕ては居られん！」
 と言つて自分は飛び出した。

萱田から川越縁の所澤驛までは大凡一里。さして遠い路では無いが、其間には丘陵がいくつとなく起伏して、一寸越えなければならぬ峠のやうな者が三つまである。風情のある路で、松原を出ると、湖水。湖水を廻ると村。ことに、横芝村あたりの松原の趣に富んで居ることはそれは非常に、路はうねうねと其間を縫つて行くし、林の少し絶えた處から、鏡を磨いだやうな湖水の入江がをり／＼見えて、春などは紅なる桃の花が靜かに澄んだ水の面に美しく其影を蘸して、何とも形容する事が出来ない位。そして、その湖水の畔には、屋臺店を出した、村の若者のよく話に集つて来る茅屋が一軒二軒立つて居て、鬚の生えた老爺か、でなければ腰の曲つた婆が恭しく客に番茶を勧めて居るところなどは確かに名所圖會の一頁である。その茶屋の、所澤から来れば一番手前、萱田から行けば一番先の家には、僕が引越して行つた時、非常に美しい娘が居て、田舎にもこんな隠れた美があるものかと思つたが、それから二月ばかり経つた後、其湖畔に情死があつて、その女はこの美しい評判娘であつたといふ事を聞いた。現に、僕はある夜、一人で其處等まで散歩に行つて、その少女の香魂を弔つた事もあつた。けれど、其日は丸で無中、松原をどう通つたか、湖水を何う横に見て過ぎたか、最初の峠を何う越えたか、自分ながら自分の存在を自覺して居らなかつた。

胸には唯暴風雨！

六月の事であるから、驅つて行くと、非常に暑い。帽子を脱いで幾度となく拭ふのであるけれど、又時の間には、額から、頭から、すつかり汗になつて了ふ。二番目の峠の下で、兼ねて識つて居る村の農夫の馬を率いて来るのに逢つたが、

「何うか爲たゞか」

と聲を懸けられたのを覚えて居る。

「汽車はまだ來は爲まい！」

「はア、汽車にお乗んなさるんでござすか、まだ來めいけど、停車場には大分人が群つて居ましたッけ」

それで行き過ぎる。

三番目の峠を越えて、もう好いと思ふと、遠くに汽笛の音が聞えて、向ふの黒い森のこんもりとした間から、汽車はさながら長蛇の蟠るがごとく轟々として地を撼かして進んで来るのを認めた。一ところ、平原になつて居る田畝の間を汽車の線路は驀直について居て、ところ／＼電信柱の空に聳えて居るのも分明見える。

一散に自分は驅つた。

所澤停車場——その小さい淋しい停車場の孑然と町の隅に立つて居るのを認むるまで自分は更に脚を留めなかつたのである。けれど一瞬間、その一瞬間の中に、自分の運命は全く定まつて了つたので、停車場に入つて、やれ嬉しいと思ふと、

發車の汽笛がぴーと鳴つた。

車はごとんくと動き出した。あゝと思つても、もう駄目！ この不思議な運命は永久に自分の傍を去つて了つた。

『國さん！』

と自分は呼んだ。

五番目の列車の右の窓に座つて居るのは確かに其人！ そのなつかしい姿！ 其人は點頭いた。見送つて居ると、二三町も行つたと思ふ頃から、汽車の窓に白いそのなつかしい顔があらはれ出して、頻りにハンカチーフを振つて居たが、それも時の間に遠くく、果てはこんもりと茂つた黒い向ふの森の中に遂に見えなくなつて了つた。

* * * * *
自分は何うして歸る勇氣が出やう。その停車場の一隅の腰架に身を倒したまゝ、久しくなるまで起上らうとも爲なかつた。殘酷なる運命！ 何うせかく情ない運命であるならば、初めから、さる美しいもの、さる卓れたるもの、さる心を惑はすものを見せて呉れなければ好いの……かく烈しい深い誘惑の中に陥れて了ひながら、俄に去つて了ふとは。

そんな事を思つたつて駄目だ。

『けれど……』

不圖思返して起上つた。

『けれど……これで永久に運命が去つて了つたなどと思ふのは、まだその煩悶の薄い證據ではあるまいか。運命は此方の決心一つでいかやうにつくる事も出来るし、いかやうに呼び返す事も出来るのである。現に、自分は身を犠牲に供してまでも、戀に戀して居るならば、あんな薄弱な一片の手紙と、十數里を隔つる普通の別離とに由つてそれで忘れたやうに消えて了ふ者では無い、斷じて無い。戀しければ、行くが好い、跡を追つて其所在を尋ねるが好い。手紙にも、奥様さへ無き御身ならば……と書いてあつたではないか。妻が何んだ、子供が何んだ。精神と精神とがたまさかに相逢つて、光を發したその價値に比べて、何んなものでも、更に惜むべき犠牲は無い』

『跡を追はう、さうだ、必ずこの戀を満足させやう。運命などには従つては居らん。二つの魂が空間に相觸れた千歳の一遇！』

僕は無限の光明を得たやうな心地が爲て、勢よく其のベンチから起上つた。

そして、明日は必ず東京に行かうと決心して、其儘静かに歸途に就いた。

横芝まで来ると、もう薄暮で、明かな夕照の光も漸く湖水の上に消えやうとして、夏の夕暮の薄い霞は暮のやうに四邊の松林に蔽ひかゝつて居た。

不圖向ふから人が驅けて走つて来たと思つたが、いきなり、自分の前に立留つたのを見ると、それは黒瀬である。

「君！」

「ヤ、黒瀬君！」

「何處に行つて居るです、君、大變ですぜ」

「何が……」

「奥さんが急に産氣がついて、非常に御煩悶なさる。先取敢へず、産婆を呼んで来たのですが、何うも腹の具合が變で、産婆の手ではとても覺束ないといふ始末。それに貴郎は入らつしやらず、奥さんは手紙を持つて解らん事を言つて居らつしやる。本當に困つて了つたです」

「それは何うも……」

と一散に向ふに駆け出した。
自分も走つた。

君、運命の手には遂に打克つことを得ぬのであつた。僕が家に歸つて見ると、妻の苦痛煩悶はそれは非常で、到底僕はそれを傍で見居るに忍びなかつた。二つの靈魂のたまさかに相逢つた千歳の一遇、それなどのとても及ぶ所ではないので、僕はつくづく人間の意氣地なきを其時覺つた。

波濤の押寄せて来るやうに時々刻々と迫る其の苦痛！ その苦痛を自分は曾て一度心の底に望んだのである。死んだならば、自分等の新しい路は開かれると實に残酷なる考を抱いたのである。其罰として、自分はその妻の苦しむ叫喚の聲を受けるのは、それは當然である。

けれど、其罰として、わが最愛の戀人、わが最愛の理想なるそのやさしい妻をわがこの身より奪ふに至つては、天も亦餘り残酷過ぎるではあるまいか。

君、黒瀬が醫師を伴れて来た頃には、もう妻の靈はこの哀むべき夫を捨て、獨り遙かにかの樂しき天国へと赴いて居たのであつた。

自分は人目を憚からず、終夜、妻の遺骸に向つて、泣いて、泣いて、泣き盡した。あゝこれが何うして泣かずに居られやうか。

君、僕は最初にかの停車場でその不思議の運命は去つたと思つたが、それは決して左様では無かつた。その不思議の運命は實に君、その妻の死を以て始めてこの自分の身を離れたのである。

あゝわが亡妻、わが亡妻！

一〇

それから何うした、その女に逢はんのかと君は聞くのか。まア、待ち給へ、まだ一條の物語が残つて居る。其運命は今一度僕の身邊に迫らうとした。

君も知つてる通り、僕はその時から再び東京に出て、妻の忘れ形見なる長女の養育に専ら心を費した。妻の無心に言つたその言葉は僕の心靈の上に實に何とも言へぬ感化を與へたので、長女ばかりは何うかして満足に育て度い、母なき子は可愛さうだなどと他から蔭言を言はれぬやうに爲度いと、乳母を置く、實家の祖母に来て居て貰ふ、随分手しほに懸けたけれど、兎角男世帯といふものは駄目なもので、自分の爲めよりも子供の爲めに、僕は幾度妻を思つて泣いたか知れぬ。

ある人などはそれを見兼ねて、後妻を貰つては何うだと幾度となく僕に勧めた。それは君が亡くなつた妻君を忘れ兼ねて、後妻を貰はんと言ふのは、よく解つて居る。けれど、子供の爲め、母といふ者は何うしても無くてはならぬ者だ。母の無い子は到底不幸福、何んなに父親が面倒を見たからとて、とて

も女性のやうな細い世話は出来ぬ者だ。何うだ、子供の爲めに貰はんかと幾度自分は勧められたか。

けれど、何うして自分はその言葉を容るゝ事が出来やう。繼母の冷い手にかけて呉れるなどあれ程言つたばかりでなく、自分も亦何うして、愛も戀も無いつまらぬ後妻などを持つ事が堪へられやう。自分は少くとも一度は暖かい妻の手に幸福なる平和を送つた一人である。

で、僕は君の知つてるやうな生活を爲た。けれど淋しいのは此上もなく淋しいので、初めの二三年といふものは、こんな世の中ならいつそ死んで了つた方が好いとすら思つた位。

が、其中には長女は成長くなり、實家の祖母の手に托しても最早心配は無いといふ程になつた。それに、祖母は此上もなく長女を愛して、この子を抱くと、何だか娘でも來たやうな心地がすると片時も傍を離さぬ位であつたから、其の五歳の時に全くその方へと托して了つた。そして、自分は一人淋しくおのれの天職なりと信じて居る文學に力を盡して、終年倦む所を知らなかつた。否、あまりに寂寞に堪へ兼ねては、せめて天然の懐になりと慰藉を求めやうと、よく旅行には出て行つたが。

忘れもせぬ、妻が死んでから六年目の秋の中頃、別段用事とて有つた譯でも無いけれど、鳥渡下總の銚子の海水浴場に行つて見る氣になつて、その茫洋として限りも知らぬ影の多い海に向つて、獨りつくふくと人生を思ふの人と爲つた。秋の暴風雨の一過した後には、いづれの室も寂寞と音なく、湯殿に滴る水の音もいと鮮かに、自分は何んなに深い秋の海の趣を味つたであらうか。岸には岩に碎くる波、沖

にはひとり淋しく行く船、ことに夕暮の千鳥の鳴聲の悲しさはわが孤獨の胸の秘鑰を開いて、實にさまざまなる追懐の情に堪へざらしめたのであつた。

ある静かな、秋の中でも殊に静かな穏かな日の夕暮、自分は霧が濱の上の松原の中を逍遙して居たが、興も盡きて、家に歸らうとして、その赤い砂の、ひろくと海岸に下つて居る路を佛坂の方へとぼとぼと降り懸けた。不圖見ると、自分より廿間ほど先に、黒縮緬の羽織を着て、髪を束髪に結んだ同じ年恰好の二人の女が歩いて行く。矢張散歩して居る者と見えて、緩り／＼、黒塗の駒下駄を引摺るやうにして、其海岸を旅館の方へと縫つて歩いて居るのであるが、一目見た自分は、何だかその右の女の後姿に、何處か見たやうなところがあると思つた。

其歩行振——確かに見た事がある。

それでは何處で……と考へて見たが、容易に思ひ出せさうもないので其儘にして、敢て其後を追ふでもなく、靜かに旅館へと戻つて來た。

自分が旅館の門に入らうとした時には、二人は既に遠く長崎の鼻の方に向つて、頻りに何事かを語りつゝ、波打際を靜かに迎るのであつた。自分は暮れかゝつた海の色、深碧にもあらず、濃き鼠にもあらず、一種言ふに言はれぬ幽鬱なる色を呈したるを見ながら、頭上に聞ゆる微かなる松の響を聞くとも無く聞いて居つたが、——ふと、其女の一人は此方に向いた。

其の白い顔！

何うして忘れやう。

自分は慌て、門内に入つた。此方からはそれと分明見えたけれど、かの女はその對手の話にまぎれて、自分の姿は認めなかつたに相違ない。

何うしやう！ と室に入るや否、烈しく自分は思つた。此儘發つて行つて了はうか、かの女の誘惑は實に一度この身をして恐るべき罪惡を行はしめた。再び逢つたならば——再び逢つたならば……。けれどさう思ふのは、自分がかの女の誘惑を危む爲めである。自分は妻の遺骸に向つて、まことの戀の心を語つたのを忘れたのか。自分は亡くなつた妻の他に戀を寄するべからざる身であることを忘れて了つたのか。

十分程経つて、湯殿に行かうとして、長い／＼廊下を歩いて行くと、運悪く向ふから入つて來た二人！ 女はすぐ自分を認めた。流石にはツとした様子で、何だかかう既に久しき昔葬つて了つた幻影が再びその前に顯はれたのに驚くやうな態度で、二歩三歩後退つた。が、やがて思返したといふ風で、其儘自分に會釋を爲る。もう、かうなつては仕方が無い、自分は急いで其傍へと近寄つた。

かの女はねつから變つて居ない。其美しさは依然として昔のごとく、額にも顔にも未だ衰へたやうな面影を少しも宿さぬ。この不意の邂逅に激した紅なる色は薄く刷毛で撫でられたごとくに、美しく雙頬

の邊を掠めて居る。

曾て親しかつた友のごとく、馴々しく、自分の傍に寄つて、莞爾とやさしく笑ひながら、

「皆な存じて居りますのよ。あの日に奥さんのお亡くなりなすつた事も、何も彼も皆なよく存じて居りますのよ。本當に、御氣の毒で、お氣の毒で、私は何う爲やうかと思ひましたわ。……いゝえ、幾度、御手紙を差上げやうと存じましたか知れませんが……書かうと思ひますと、何時も言葉が出なくなるのでもの」

と言つた。

自分は答ふべき術を知らなかつた。かの印象の、自分の胸に、依然として最初の夜逢つた時のごとき深き感化を興ふるとは實に驚くべき限りである。その聲の調子、その黒い、をりくゝ感情的にかがやく眼、笑ふのを忘れて了つたかと思はるゝ美しい唇、一つとして昔の思出の料となつて自分の胸に迫らぬは無い。自分はその儘誘はれてかの女の室へと入つた。伴れの女はそれと見て一寸其處を外して呉れた。あゝ、君、僕は再びその不思議の運命の恐るべき襲撃を受けたのである。

胸には烈しき爆裂弾の投ぜられつゝあるにも拘らず、自分等は穩かに、靜かに、先旅行の事などをその對話の題目とした。聞くところによると、女は今度臺灣に行くので、その日本の名残を惜む爲めに、一週間の豫定でこの海岸に遊びに来たとの事である。

「何うせ、身體が悪いのですから、彼方の土になるものと覺悟して、参りますのですけれど……」と淋しく笑つた。

「一所に居らつしやるのですか」

と自分は無意味に言ふと、

「誰と……一所に……」

「ハズバンドと？」

女は卑けすむやうな眼色をして、じつと睨目に自分を見た。

「そんなものはまだ持つて居りませんのよ。相變らず、浪人で、まご／＼して居りますのですから」

「何うですか」

「虚言よ……本當に」と語尾に力を入れて、「本當にそんな者は持ちませんわ。虚言と思へば、連れの者に聞いて見ればよく解りますよ。今回、臺灣に行くのも、二三人の同僚と彼方の小學校に教育に行くので御座いますから」

僕は答ふべき術を知らなかつた。それは、不意の暴風雨が俄かに烈しく僕の胸中に渦き起つたからで、僕は再び善悪是非の差別を忘れやうと爲た。かの女は飛ぶ鳥のごとく自由である。そして自分は何を苦んで、今猶その感情の迸出するのを抑ゆる必要があるか。何を苦んでこのあはれむべき女を臺灣の

暑いところに遣るの必要があるか。自分の前には、美しい、會つて烈しく戀した女が座つて居る。そして、自分が手を出してかの女を抱きさへすれば、それで萬事意のごとく極めて圓滿にこの物語の終を告ぐるのである——けれど、自分には何うしてもその勇氣が出なかつた。妻の自分に盡して呉れた真心、最後に煩悶したその苦痛、自分と國子との間には、路は開かれて自由であるけれど、猶一つの劍は依然として其途に横つて居て、何うしてもそれを取除くことが出来ぬのである。で、自分はじつと前に横れる夕暮の海の靜かに穩かに暮れて行くさまに見入つたが、次第に心は明かに穩かになつて、悲しいけれどもしかも分明と、もし自分が今この心の一半をこの前に座つて居る女に與へたならば、それこそ不義不道德であらうと思つた。「妻は安らかに眠つて居る。この身と最期までの愛を續ける爲めに……」この言葉が烈しく自分の耳に響くと共に、前には美しきやさしき人が座つて居るにも拘らず、ゾツとして、一種の寒い戰慄を總身に覺えた。あゝ暖かき血汐の漲れる現在よりも、さびしい妻の冷かなる遺骸の影こそ、自分の魂の上に更に大なる勢力を有して居た。

妻は死して、そしてその己の戀愛を護つたのである。

國子も自分の内心の煩悶をそれと知つたらしく、じつと黙つて座つて居つたが、何だかかう言ひ知らず胸苦しうで、呼吸もそれとなく迫り勝であつた。お嬢さんは何う爲すつた？ と自分に向つて問うて置きながら、自分の答を満足に聞いて居るやうにも思はれなかつた。それにしても氣の毒なは、この

美しい、情のある、不幸な女の身の上——まだ、さして老いたといふ身でもないのに、其前途に些少の幸福の影だに見出す希望が無いとは！

實際、人によつては、僕はその女を抱くのを躊躇した臆病の態度を、愚かなる不自然なる行爲として笑ふかも知れぬ。けれど、君、君は、僕がかの女と一緒に爲つて、果して將來までをも幸福に暮すことが出来たと思ふか。死ぬほど戀した僕の妻にすら、あれ程悲しい情ない記憶を残した人間の儚ない身、長い月日の中には何ういふ運命に弄ばれて、何ういふ不幸な谷底に墜落して了はん者でも無い。それを思ふと一步前の運命すら知り得ぬ人間の身の悲しさ、儚なさ。自分は慨嘆せずには居られぬのである。

伴の女は此時、室に入つて來たので、一座の意味深い沈黙は全く其儘破られて了つた。

自分は其女に紹介される。茶は煎られる、いろ／＼な雑話は始められる、全く普通の、意味も何も無い賑かな席と爲つて了つたのである。

少時して、

「まだ、未だに歌を詠むですか」

と自分は問うた。

「いえ、碌に詠みも致しませんけれど……それでも餘り淋しかつたり、何か致しますと、考へて見る氣になりますの」

『少し、承り度いですナ』

『いゝえ、そんな大した者はありません……』と少し考へて、『それにしても、萱田に居た頃は、よく歌を詠みましたねえ。何も彼も皆な歌にしてつて、よく貴郎を困らせましたねえ』

『萱田には餘程長く居らしたの』
と伴の女は不意に訊ねた。

『いゝえ、ほんの半年ばかり……』と國子は軽く答へて、『それにしても、私も随分氣隨者ですわねえ。あれから、東京に来て、麴町に三月、深川に一年、本所に半年、郡部にも二三度出て行きましたし、京都の方にも一年ばかり行つて居りました。自分ではいつでも今度こそは長くつとめる氣で居りますのですけれど、二月も経つと、色々な事が出来て、其處を退かなければならないやうになつて仕舞ひますけれど、淺野さん、今度は駄目ですね、臺灣ではさう鳥渡は歸つては來られませんからね』

『左様ねえ』

と其淺野といふ女は笑つた。

最後に別れたのは、それから三日目の朝で、自分の東京に歸らうとするのを、かの女は佛坂の上まで送つて來て呉れた。靜かな朝で、まだ松原には薄い朝靄がかゝつて居たが、日は渺茫たる太平洋から一竿の長き程上つて、まだ光の無い、赤い、赤い影は丸で火の玉でも海の上に轉がしたやうに思はれた。

犬吠の燈臺の掲旗の一端が金鳥のやうにびか／＼と光つて、霧が濱に打寄せる波は丁度一刷毛に撫でたやう。

松原の角に来て、

『廣瀬さん、もうお別れねえ。運が無かつたのね!』

と突然國子は言つた。

自分は黙つて答へやうとも爲なかつた。

『けども……もうそんな事は申しますまい。お體を大事に……』

聲は曇つた。

『貴嬢も……』

と自分は辛うじて言つてそして別離を告げた。

一步步松原に隠れ、草村に隠れ、路にかくれて、遂に見えなくなつた。

其後、聞くと、今も臺灣に健全に暮して居るとのこと。

(明治三十六年二月)

山小屋

山 小 屋

女峯山の麓、馬立といふ處は日光から栗山に通ふ路で、前には大眞名子小眞名子の森林帯が此地方でも珍らしい程に深く生茂つて、ところ／＼の卑湿地から落ちて集つた小溪の流のさながら笛を吹くやうなのや、深山の空氣に濡れて木の葉の重々しげに戦ぐ音の恰も夜行く人の微けき足音のやうなのや、殊に、時ならぬむさ／＼の叫喚、猿の啼泣、秋になるとをり／＼猪にも邂逅することがあるさうで、滅多に此處を越えて行く者も無いのである。

裏見瀑の上流に立つて、遙かにこの一帯の地を望むと、森林は一刷毛に塗つた苔のやうに、山の西の溪間から、七八合目とも覺ゆる邊まで黒々と濃く靡き渡つて、其上には白い雲の一二片、それが何の事は無い吹流の旗のやうに美しく晴れ渡つた日に光つて、消えやうとして消えず、簇がらうとして簇がら

ざる具合、實に何とも言へぬ。けれど慈観の瀑聲を後にして、一步は一步よりその森林帯の中に入つて行くと、白樺、檜、榛などの樹が隙間も無く生ひ茂り重り合つて、果ては満足に日の光を認めることが出来ぬといふ光景。遠くから見た男體山は何の方面、女峯山は何の方角、否、指して行く方すらも果ては解らなくなるのである。そして、路と言へば、草に埋れ、熊笹に没して、おまけに山道と稱する中途で消えて失くなる支脈が非常に多いので、まごころすると深い深い谷底に迷ひ込んで、到底出ることも何も出来なくなつて了ふ。幸ひ、それが晴れた日で、空氣の非常に澄んだ時でもあると、何うかすると、遠くの遠くに、丁度山嶺を風でも渡るやうに、

日光好い山、檜木が多い……伐つて、倒して、——
とか、

日光好い山、木小屋が多い……木小屋狭いが、人目が無うて、ぬしと二人を松の風——

とかいふのが聞える。これを聞くと、溪谷の底に陥つた旅客で無くとも、はつとして耳を傾けずば居られないのである。否、誰も一刻も早く其聲の主を尋ねて、たどれる路の正しきや否を聞き、その所謂木小屋なるものに渴きし咽喉を醫し、勞れし脚をも休め度いと願はぬものは無いのである。けれどこの聲をたどるのが實に容易で無い。丁度、霧の深い海に溺れて死んだ未^ひ死^まの魂の叫聲に誘はれると均しく、近ければ近く程、愈々その所在を失つて了ふのが例である。かと思ふと、歌も聞えず聲も無しに、路傍の高い草叢をかさ／＼と音させて、兎か猪のやうに不意に顯はれて來る異様の人間——山袴の様なものや短かに穿いて、頭には小さい手製の槍笠を被り、荒縄よろしくといふ帯には腹から腰のあたりまで鋸やら鎌やら鈍刀やらをぐるりと差し、濃い鬚の中からきよきよと眼ばかりばちつかせて、氣の弱い者は、一眼見てあつと言つて氣絶も爲兼ねまじき姿、これがあの美しい歌をうたふ人種とは何うしても思へぬ。

處が此方から言葉を懸けると、彼方は思つたよりは非常に優しく、折が好いと、その特色なる山中の木小屋へと誘はれて、澁茶の一盃位は振舞はれる。

山中の木小屋、それは孰れも路から十町乃至二三里に行渡つて居る谷間、或は山腹につくられてあつて、其住民は皆な日光裏山の栗山郷から遣つて來るのであるが、彼等は其故郷が既に山また山の奥で、獸獵の外には耕作すべき田地も無く、執るべき職業も無い處から、春の末になつて雪が消えると、皆なこの十數里に亘る日光連山の中に稼ぎに出で、殆どその一年をこのさびしい太古のやうな山中に暮すのである。そして彼等の樂みは、月に二三回、木材を背負つて、日光に出で、貴い酒、旨い味噌を買ふて歸つて來る事で、冬の初、山を下りて、故郷に歸る時には、その包に多少の銀貨と二三の土産物とを藏するのである。

木小屋の數十五六。多くは森林の深く生茂つた、餘り水に遠くない、一帶の低地にあるのが例で、四

邊の深樹を伐拂つて僅かに微かなる日光を得るやうにしてあるのであるが、唯一つ、作兵衛の小屋といふのは、その附近の森林に似合ぬ日當りの好い小高い處にあつて、朝は拂曉から夕は日没に至るまで、晴れやかな美しい暖い日の光に浴せぬ時は無いのである。それさへ既にこの山中の民の一方ならざる羨望の種であるのに、其附近には殊に卓れた木材が多く、他の小屋の人々のやうに、態々山を越え、溪を涉つて、木材を探して歩く必要も無く、皆なその小屋の周囲で材料を得る事が出来たので、作兵衛の小屋の名は到る處に喧しく唱へられて、誰もその天分の厚いのを羨しく言はぬは無い。

けれど、作兵衛の小屋の名高くなつたに就いて、今一つ原因がある。それは共に住んで居る甥の清太郎、年は十九の若盛、山中に見る事の出来ぬ程の姿の清らかな、氣の冴え／＼した、面白い少年で、これがまた山中を背負つて立つと言つても好い位の歌の名手。

曉のまだ日の昇らぬ前、微月の淡く男體山に懸つた夕、其聲は何んなに清く、何んなに美しく、何んなに冴えて、この寂寞たる山中に響き渡つて聞えたであらう。無心に木を挽きながら、

日光好い山――

を始めると、今まで囀つた鳥は聲を潜め、流るゝ水の音も絶つて、四邊の物皆これに耳を傾くるかの如く實にしんと成つて了ふので、歌は簡單で、調子は單調で、別にこれといふ節も無いけれど、其中には若々しい少年の氣とさびしい山の氣吹とが名残なく吹込まれて、しみ／＼耳を歌てると、思はず感極

つて涙を滴さずには居られぬのであつた。それであるから、山中の木小屋では誰一人この美しい歌の主を知らぬはなく、殊に、若い女などは其歌が始まると、孰れも遣り懸けた仕事の手を留めて、恍惚とそれに引入られるやうになるのが常であつた。否、段々とその感嘆の念は高じて果ては、若い女の群に、

日光好い山、檜の木が多い、木小屋の清太さんの歌もよい――

との歌が流行するに至つた。

殊に、作兵衛、清太郎の境遇が一層山中の人の同情を深くしたので、作兵衛といふのは昔は草分の家柄で、父の代までは木小屋になど出稼に出なくとも、立派に生活を爲て行かれる身分であつたが、父と云ふ人が非常な徳望家で、村の事にすつかり其の財産を蕩盡して了つたので、今では何うする事も出来ぬあはれな民の一人になつて了つて。作兵衛は早くから妻を失して、老いて子の無い身を絶えず口癖のやうに嘆いて居つたが、妻の兄の、これも村の道路の爲めに力を盡し、ある年の洪水に水に溺れて死んで了つたその一人息子の清太郎を引取つて、それからは二人一緒に、其間の睦しきはさながら父子の間柄も及ばぬばかりで、殆ど村の一美談として語り傳へらるゝのである。

清太郎も亦この深山に生れたのであるから、決してこの山中に世を送ることを辛しとも悲しとも淋しとも思はぬのである。けれど、何故か知らぬが、渠は稚い時からよく山の彼方に夕日の落つるのを見て

は泣いた。父の膝に取附いてはこの山の向ふに何かあるかといふ事を幾度となく聞いた。其稚い心には水の流れるのも、雲の動くのも、皆なある意味があるやうで、其身の知らぬ處にある大なる祕密が籠つて居るやうに思はれて何うも爲らなかつた。十二歳の時であつたが、餘りに山の單調に倦んで、何うかしてこの重圍の中を脱して、廣々とした、晴れやかな處に出たいと思つて、二日二夜山の中を迷つて、大に父母の心配を招いた事もあつた。殊に、渠の記憶に残つたのは、ある夏の日、好事の學生がこの山の中に入つて来て、迷つて其家に宿つた時、いろ／＼聞いた賑かな面白い東京の話である。自分も何うかしてさういふ所に出て、出来る者ならば、何か卓れた事も爲度い、何か面白い變つた物も見たいとかう絶えず思つて居た。それ故、山にでも登ると、必ず展開された遠い地平線の末を望むで、何うかしてこの渴いた望を醫したいものだと思つた。けれど父の生きて居る中こそそのやうな望みも遂げられる希望があれば、あはれなる孤兒の身と爲つてはそれも出來ず、さりとて一人黙つて飛出すことも爲得ずに、せめては日光近く行かれる身を樂みに、叔父と共に山中の木小屋に来てさびしい生活を送つて居た。若き心の烈しき亂れ、これやがてこの少年の歌の天籟に富んで居る所以であらう。

二

夕日は既に男體と大眞名子との間に落ちて了つて、一際赤く焼けた空も山腹から簇々ト過ぎ上る薄鼠

色の雲に漸く包み蔽はれやうとして、低い山には既に暮色が被衣のやうに襲つて來た。他の木小屋ならばもう今頃は手元も見えぬ位に暗くなつて、煤けた暗い手洋燈を點けて、干棚の下に松の火の赤いのを見る頃であるが、此處は高く開けて居る丈にまだ明るく、木挽の鋸の線も微かながらには見えるので、遣り懸けた丈は遣つて了はうと、作兵衛は片肌を爲つたまゝ、頻に鋸を挽いて居た。

見ると、其前には鋸の屑や、鉋の屑や、木の破片などが殆ど小山のやうに堆くなつて、其向ふには一軒蕭然たる低い小屋、何の事はない乞食の住んで居るやうなもので、屋根には樹の皮、柱には丸木、扉には荒板を合せたるものを用ひ、其廣さと言へば、僅か六疊一間位。よく是で山の暴風雨を凌がれたものと疑はれるのである。勝手元とも覺しき處に圍爐裏がはりの土竈が一つ。傍に二町ほど下の溪流から汲んで來た水桶が、もう残り少なくなつて先程作兵衛が一口柄杓から飲んだ時既にガラ／＼と鳴つて居た。奥には長い棚が高く造られてあつて、其上に一尺位に小さく伐られ削られた山毛櫨の樹片が幾箇となく白く夕暮の色に際立つて見えて居る。これは、町で下駄などを造る材料で、棚の下の焚火の跡は、これを早く乾かす爲めに燃すのである。

夕暮は次第に夜に爲つて、右の女峯山の凹處には既に銀のやうに聰しけな星の影を認めたが、もう何うにも彼うにも仕事が出来なくなつたので、作兵衛は鋸を其儘にして、徐かに小屋の中に入り、先、火を起し、黒猫のやうに燻つた鐵瓶にガラ／＼した水桶の水を汲み、頻りに夕餐の準備にと取懸つたが、

ふと戸外に迫り來れる夕暮の色を寂しげに見て、

『遅いが、何うしたべい？』

と獨語ちた。

これは今が始ては無いので、既に三四度『遅いナア、何うした？』と思つた。甥の清太郎は今日木材を日光の間屋に負つて行つたので、歸りには旨い酒と味噌と干物とを買つて來る筈。いかな日でも大抵、午後の五時には歸つて來ぬ例は無いのであるのに、今日は此の遅れやうは何うした譯。もう子供でも無いから、何か面白い物があつて、それに見惚れて居る氣遣もあるまい。それに、彼奴は吾甥ながらも、物の道理をよく心得て居て、叔父が遅いつて待つて居るだらう位は知らぬ事は無い。不思議ぢや、何うも不思議ぢやと思つたが、不圖思付いたのは、もしや……東京にでも出奔したのではあるまいかといふ事である。

かう遅いを見ると、或はさうかも知れぬと作兵衛は思つた。現に、彼奴が女峯の林の角に立つて向ふを見た儘、黙つて涙を流して居たのを見た事がある。三番の炭焼小屋の新藏に東京の話聞いて、三日程恍惚と喪心者のやうになつて、己に叱られた事もある。

到頭行つて了つたか。

と思ふと、作兵衛は非常に悲しい。力にした甥にも見捨てられて、もうこれから此山中に一人暮さな

ければならぬかと思ふと、叔父を捨てた甥が憎くつて憎くつて堪らぬやうな心も起る。けれどもこれは己の思過ぎ、何か不意の用事でも出來て、それでかう手間を取るのかも知れぬ。己にあれ程懐いて居る彼奴が如何に山を出度いからとて、己に斷らずに黙つて行くやうな事は爲まい。思過ぎ思過ぎと自から己に不利益不愉快なる想像を思捨て、又、生憎にも思はれるは、その事、その始末。

氣に爲ると、色々な考がさまざまなる方面から集つて、もしや溪川に落ちて死んだのではあるまいかなどとも思ふ。あの裏見瀑の登口は非常に険しいから、もしや彼處から落ちて頭でも碎いて死んだのではあるまいか。それならばかうしては居られぬ……と思つて立上つた。

戸外に出ると、四面の林は既に十日ばかりの月に微かに照されて、夏ではあるけれど、深山の冷氣は到處に満ち渡つて、樹上の露の美しく煌めける、風の思出したやうに折々吹過ぐる、蟲の遠くに鳴く、溪流の遙かに流るゝ、山中の夜の静けさ、淋しさ、實に堪へられぬ。

作兵衛は思返しては思ひ、思つては思ひ返し、湯の沸立つのも、腹の空くのも全く忘れ果て、只そはくゝと出たり入つたり、殆ど二時間ほど空しく過ぎた。

けれどまだ歸らぬ。

月は次第に西に傾いて、樹の影は漸く長く、茫然と立つて居る老樵夫のさびしい姿もいつか其影の中に包まれて了つた。いつもならば山の淋しさには似ぬ木小屋の中の賑かさ、叔父の燃せる干棚の松の火

は赤くその皺多き顔に反映し、甥の木を削る鉋の音は喧しくあたりの森の寂寞に響きて、をり／＼歌ふその清く高く冴えたる調は、さゝやかなる溪流の響と共に遠く深山の空翠に傳へらるゝのが例であるのに……。

三

けれどそれも瞬時。

不意に樹の鳴り、葉の動き、草の亂るゝ音！

「叔父さア——」

と叫んだは、正に其聲。

「オ、清太。」

作兵衛は雀躍する程の喜悅。

「火も點けないで、何うしたよ。」

「それよりは貴様は何うした？」

「まア、緩り話すだア。」

かう言つて、少年は肩に荷つて來た、一升樽、味噌曲物、其他いろ／＼の物品を包める風呂敷包をど

つかと下し、

「叔父さア。何處に居るだア。」

と眞暗な小屋を覗く。其後に、

「此處に居るだ。」

と云はれたので、吃驚。

「何だ、そんな處に居るのけえ、……吃驚したよ。」

「清太、貴様何うか爲てるナ。」

「何うか爲ねえ譯にや行かねえ、叔父さア、己ア、こんな思を爲たのア、生れてから始めてだ。」

「何うしたよ？」

「まア、緩くり話すだアで、それよりも燈火を點けねえぢや、何うする事も出来ねえ。」と言ひながら、手搜りに、棚の傍に藏ひて置きたる古洋燈を出し、「燈火が無えだて、己ア、既の處、行き過ぎて了う處だつた。叔父さア、何故、今時分まで燈火も點けねえでそんな處に蹲踞んで居さしやつた？」

「己ア、貴様、東京へでも突走つたんべい思つて、一人ではア、何の位心配したか知れねえ。それだで、夕餐も何もまだ食ひやしねえ。」

「馬鹿ナ。」

『だつて、夜になつてから、二時間も経つて歸つて來べいとは思はねえだからナア。』
洋燈は點火せられた。

少年の顔は極めて蒼い。一見して非常な感動を與へられたのがすぐ解る。
作兵衛はそれを認めて、

『非常に顔が蒼いが、……本當に何うしたア？』

『裏見瀑に投身があつた。』

『投身？』

『はア。』

『それで、そんなに恐へて居るんか。』

『何アに、當り前のなら、そんなに驚きやしねえのだけれどナ、叔父さアその身を投げた人と言ふナア、それア、はア、非常に綺麗な女で、衣服は何ちふか、己共にはよく解らねえが、それははア大した者で、金の指輪を三つ迄箆めて居つた。』

『それも、己ア、只聞いたり見たりしたばかりなら、そんなに何でも無いけど……。』と言ひ懸けて、
老樵夫の顔を見、『まア、己の今日の話を悉皆爲べい、長いけど、叔父さア、聞いて下つさい。己ア、荒澤に出たのは何でも二時頃だつた。今の事だ、随分いろ／＼な風を爲た見物人が澤山來て居た。』

髻の生えた男やら、小せい蝙蝠傘——あれでも目除になるべいかと思ふやうな小せい蝙蝠傘を差した女やら、それア、随分いろ／＼のが居た。己ア、珍らしいで、一人々々、皆よく見て、こんなに立派にして居る人間も居るに、己アこんなつまらねえ、こんな汚い着物を着て……なんて下らねえ事を考へて行つた。するとあの中禪寺道の處まで行くと、向ふから人力車に乗つた綺麗な女が來た。女は大抵男と一緒に連れ立つて來るだが、不思議にも其女ばかりは一人きりで、あとから男の車も來ねえ。己ア、一寸見たばかりだが、何と、まア綺麗な美しい女だんべい。世の中にはこんな美しい女もあるものかナアと思つた。年は幾歳位と言ふのかね。左様さ十七位だんべいか。色の白い、眼のぱつちりした、それア、實際、錦繪にもあんな美しい女は見た事は無い。己ア、叔父さア、笑つちやいけねえが、その後姿の見えなくなるまで見送つた。今でも眼に見えるやうだが、かう紫の蝙蝠傘が遠くその細い路をゆられ／＼裏見瀑の方へ行つたさまは……けれど何時まで見て居た處で仕方が無いで、急いで鉢石に行つて、問屋に荷物を下したア。』

『何時もの通り呉れたかナ。』

『呉れるにや呉れたけれど、やれ樹の削りやうが粗雑だの、やれ節があつて使ひ道にならねえのと色々難癖をつけやがツて、おまけに今手許に金が無えから、一時間程待つて呉れと言ふだア。遠い路で、日が暮れては困るだから、此方は成丈早い方が好いけど、さう勝手も言へねえで、つくねんとして

待つて居たよア。ところが、はア、一時間が二時間になつても呉れねえ。見るともう四時半ぢやねえか。まご／＼して居られねえから、己ア、催促したよ。」

『本當にあの家は拂が汚なくつて何うも困るだよ。』

『すると、叔父さア、かう言ふぢやねえか、此方で買つて遣るのに、一時間や二時間待つて催促する法は無えつて……。己ア、番頭の腦天打割つて呉れ度い思つたが、そんな事を爲ちや、叔父さアの爲にも爲らねえし、折角叔父さアの待つて居る旨い酒も買つて行かれねえ思つて、蟲を殺していろ／＼詫びたり、口説いたりして、漸と金さア攫んだのは、五時半。』

『酷い奴だナ。』

『それから酒と味噌とを買つて、急いで、飛ぶやうに爲て歸つて來たよア。暗くなつちア山道は難儀だし、叔父さアも遅い／＼待つて居さつしやるべいと思つて、それア實際走つて來たよ。それでも、もう荒澤に來ると、日はすつかり落ちて向ふの山は薄暗くなり出したよ。で、何時も休んで來ねえ事は無えあの婆さんの小屋にも聲を懸けたばかり、休まずに、段々裏見瀑の方へと上つて來た。晝は随分見物人の多い處だが、日暮になると、あの谷には人一人居ず、瀑見茶屋の爺もとうに下りて了つたと見えて、瀑の落つる音ばかり四邊に凄まじく鳴響いて聞えるだア。けども己ア、山に育つた人間だアで、そんな事を別段淋しいとも何とも思ひやしねえ。只急いで遣つて來たよア、すると、あの瀧見茶屋

の石段の上の處で、手に提げて來た風呂敷包がゆるくなつて、上から味噌がころがり出さうに爲つた。

これから山に懸るんだから、これは一層包み直して、しつかり背負つて行く方が好いと思つて、茶屋の榻の角に荷を下して、それをいろ／＼と包み直し一升樽も其中へと入れて、皆な後に背負つて了つた。

さて行かうとしてふと傍を見ると、其處に美しい一本の小さい蝙蝠傘。はてナ、誰かまだ此處に居るか知らん、それとも誰か見物人が忘れて置いて行つたのか知らんと、思つて四邊を見廻すと、岩の一寸出て居る處に、美しい色の鼻緒の下駄がちらと見えた。はツと思つて、瀧壺を見ると、何うです、叔父さア、丈にも餘る黒髪が瀧に打たれて、丸で藻の散ばつたのかと思はるゝやうに亂れて其處に一人の若い女が身を投げて居る。』

『はア、それは何うも……。』

と甥の話上手に叔父は思はず言葉を添へた。

『己ア、吃驚して、丸で呼吸が塞つて了ひはせんかと思つたよ。けども、じつとして見て居た處で何うも爲方が無いだで——、いや、まだ死切らないかも知れねえ思つただで、己ア随分大膽だったが、其の儘、瀧壺の方へと下りて行つたよ。不動尊の立つて居る處から飛込んだに相違ねいので、今打上けられて長く横つて居るのは、その右の小さな岩の下の處だ。近くに行つて見ると、顔は打伏になつて居るからよく解らねえが、美しい縮緬の衣服がすつかり水に浸されて、何だかえら光々する指環を箆めた右

の手の指からずつと捲くれた細い腕の白さ、美しさ、水の碧色の中に映つて、實に何とも言へぬ光景。己ア、其儘、瀧の飛沫に懸るのも忘れて、その側へと近寄つたが、もう投身してから一時間近くも経つたと見えて、呼吸も無ければ、身體も冷たく全く死切つて居るぢやねえだか、己ア、打伏した顔を抱上げたが、一目見て、はッとした！』

『何うした？』

『叔父さア、それア、己アが鉢石に行く時綺麗な人だア思つて、其車の見えなくなる迄見送つた女ぢやねえか。』

『あゝ、先刻言つた……何うして投身なんぞ遣つたんべい。』

『何うして遣つた？か、から解らねえ。あんな綺麗な扮装なまを爲て、何不足なく暮して居る人でも、死なうけりや爲らねえやうな事があると思ふと、己ア、何だか變な心地が爲て仕方がねえだ。』

『里ぢや、皆な左様だつて、此間も村の先生様が仰しやつた。綺麗な衣服を着たり、旨いものを食べたり、車や馬車に乗る人に限つて、屹度、はア、えれい心配があるものだつて……。』

『それア、左様だんべい。けども、その死ぬやうな心配などは、この山中に居ては解らねえだ。この山の中ぢや……。』

言はうとするを遮つて、

『だから、この山の中は平和で好い、何も他に楽しみも無い代り、そんなえれい心配などは爲たくも無し。』

『だけど……』

言ひ懸けて清太郎は言葉をとめた。渠は山中の平和に安じて靜かに世を送るよりは寧ろ死してもまことの人の世の複雑せる悲劇を知り度いと言はうとしたのである。けれど流石に叔父の前を憚つて、其口元まで出やうとした言葉を押へて了つた。話は少時途絶えて、四邊にはをり／＼過ぐる風の音、微かに啼く蟲の聲、遠くを流るゝ水の私語。

山中の夜の淋しさ！

『それから何うした？』

と叔父は更に問うた。

甥は胸に簇り來れるさま／＼の空想から急に覺めて、

『それから、仕方が無いだで、己ア、一生懸命に走つて、裏見の下の茶屋に報知に行つた。すると、茶屋では大騒ぎ、實は先程立派な由緒ありさうな婦人の方が一人で瀑の方に行つたのは覺えて居るが、餘り忙しいので、其の歸る處は見なかつた。もう、とうに歸つた事と思つて居たとの話。いや、まだ、あの婦人を曳いて來た車夫も居た筈だ。それを段々尋ねると、車夫は録藏の裏に晝寝を爲たま／＼』

つすり夜になるのも知らずに居る。さア、大騒、あの狭い村は丸で火事でも始まつたやう、瀧壺の方に走つて行くものもあれば、荒澤の屯所に知らせに行くものもある、巡查、村長、裁判所の人などの漸く遣つて来たのは、それから二時間ばかりも後で、己ア、歸り度いにも、最初に発見した證人だと言ふで、歸る事も出来ず、その儘事件の濟む迄引留められて居たゾア。」

「それで、其女の素性は解つたゾカ。」

「いや、少しも解らねえだ。持つて居たものは、立派な信玄袋とか何とか言ふ面白い袋と、小さい蝙蝠傘とばかりで、その袋の中にも五六枚の鼻紙と一本の色鉛筆とが入つて居るばかり、素性が解るやうなもの一つも無い。」

「遺書なども無いのかな。」

「無いだ。」

「それでも何ういふ風の、何ういふ人位の鑑定は附けたんべい。」

「それア、附けて居たゾ。其の衣服の様子といひ、身嗜の好い具合といひ、何うしても上流の人に相違ないとの事だつたゾ。一番、まア種になつたのは、乗せて来た車夫で、その話によると、何でも三番の汽車で東京から来たのださうだ。停車場を出る時からもう一人きり、車を雇つても、小西神山に寄らうでは無し、神社を見物しやうでも無し、のつけに日光ホテルに行つて、其處に泊つて居る何とか言ふ

人を訪ねたさうだ。ところが、其人は遂ひ昨日發つたばかりとかで、夫を聞くと、非常に落膽して、急には口も聞けぬといふ位だつたといふ事だ。それから、仕方が無いといふので西洋料理何かを食ひ、車夫にも何か御馳走して、この裏見瀧に遣つて来たのださうで、待つて居ても中々歸つて來ないのは何うしたのだらうと思ひく、遂疲勞れて寢込んで了つたものですからと車夫は頭を掻きく、巡查に向つて言ふて居たゾア。」

「それぢや、何うして死んだか解らねえんだナ。」

「解らねえだ。多分その日光ホテルに情人か何かと泊つて居たんだんべい、處が來て見ると、それが心變りか何かして居なかつたもので、懊惱じやくしやして、氣が變になつて、それで身を投げたんだんべいつて、専ら皆々が言つて居たが、それも何うだか、分明とは解らねえだ。」

「それで、死骸は何うしたゾ？」

「素性が解らねえから、仕方が無い、假埋葬にするとか言つて、村役場の役人が戸板に載せて擔いで行つたゾ。」

作兵衛は今まで聞いた一伍一什を再び心に集めると言ふやうにじつと洋燈の光を見詰めて居たが、

「年は何歳位だつて……。」

「十八九。」

『可愛想に、その若さで。』

作兵衛もほろりとした。

二人は暫時じつとして黙つて居たが、清太郎は傍に捨てられた一升樽に眼を付けて、

『叔父さア、まだ飯前ぢや、腹が空いたんべい。』

『貴様も空いたんべい。』

『何アに、己ア、あれを考へると、飯も何も食ひ度かア無いだ。』

『それでもまア、少し食へ。』

で、圍爐裏の火は燃され、一度冷めた鐵瓶の湯は再び沸されて、作兵衛の前には爛徳利を載せた膳が其儘整然と据ゑられたが、それも瞬く間に濟んで了つて、月が西の森に全く影を隠して、只遠くの山の絶巔ばかりその微かな反映を受くる頃には、木小屋の燈火は消えて久しく、遠くを流るゝ溪流の音ばかり極めて明かに深山の空氣に響いて聞えた。

四

いつもの如く叔父と背中合に寝たけれど、清太郎は何うして穩かに眠に就くことが出来やう。自分には何だか其事が非常に關係があるやうに思はれて、其時の光景、藻の如く溪流に亂れたる黒髪、碧の水

に透徹けて見ゆる白魚の如き指、腕、びたりと肌に着きたる美しき衣服、ことにその笑を含みたる顔の生けるが如きなど、思ふまいと爲ればするほど、愈々眼前にちらついて、唯これが裏見瀧の若い女の投身とばかり、冷かに思つて居ることは何うしても出来ぬ。渠は叔父に出来る丈正しく、出来る丈詳しく、この一伍一什を語つた。けれどその時の烈しい感、その時の強い印象、これは充分に叔父に語る事を爲し得なかつたので、其身は叔父に語つた位の感動ではなく、もつと強い烈しい、譬へて見れば、これが爲めに自己の一生の運命を支配されは爲まいかと疑はれる許の印象を受けたのである。

渠は思つた、山の中ほど平和な處は無いと言つた叔父の言葉は確かにそれに相違ない。この靜かな、この淋しい、この穩かな山中では死に度いからと言つて、とても死ぬ程の烈しい感動を受ける事は出来ぬ、けれど死ぬ程の烈しい感動——あの優しい、あの美しい、あの脆弱い女の身を瀧の奔湍の中に投じて了つても猶悔いない程の烈しい感動を何故我々は受けることが出来ぬであらうか——と思ふと、寝てなどは居られぬやうな若々しい考が順序次第もなく蜂の巢のやうにその小さい頭腦に集つて来て、死んでも好いから、自分等の今まで夢にも知らなかつたその複雑した浮世の事を見たい、その浮世の新しい流に浴し度いといふ考が瀧津瀬の如く奔つて来る。

思はず長太息を吐くと、

『何うした、まだ寝んのかえ。』

と一眠りして覺めた叔父は怪んでかう訊ねた。

『何んだかどうも眠れなくつて……』

『下らんことを考へねえで、早く寝ろよ、明日はまた、朝から裏山に木を伐りに行かねけりやならねえだ……』

返答も聞かずに叔父は再び深い睡眠に入るのであつた。

裏山に伐木！ 自分等の職業は唯これきり。朝起きて、飯を焚いて、木を伐りに出懸けて、さて歌の一つも歌ふと、それでもう單調の日は暮れて行くのである。一月、一年、十年は時の間に過ぎて何一つ新しい事も仕出來さず、何一つ新しい考へをも起さずに、其儘山中に老いて了つた人は幾何もある。否、叔父にしろ、他の仲間にして、皆な左様だ。自分もまご／＼して居ればその一人に爲つて了ふのだ。

清太郎はこつそりと身を起して、其儘山下駄を引懸けて、木小屋の外に出た。月はとうに西に落ちて、夜は眞の闇であるけれど、星が降るやうに出て居るので、遠くを劃れる山、森、丘などが微かではあるがそれと指點されるやうに見えて居る。渠は徐かに足を進めて、其儘左の林の中にと分け入つたが、これはかれが何時も行く一帯の平地に續いて居るので、其處からは男體、女峯兩山の間から流れ出づる溪流の行衛をも指すべく、山々の間から細く靡く人家の烟をも見るべく、空氣澄みて山靜かなる時

には、蜂の唸るやうな遠い遠い市聲をも聞くことを得るのである。

今はそれも見えぬ眞の闇、けれど渠の心は常より猶烈しく強く躍つた。渠は晝間腰を息める石に身を凭せ懸けて、いつも歌ふ美しい歌の調をも出さずに、沈黙して獨り深く何事をか思つた。

五

『昨夜、貴様は何處かに行つたどか。』

『はア。』

『何處に行つたど。』

『いくら寝やうとしても寝られねえから、原に行つて、少し氣を安めて來たど。』

『あの夜半に。』

『はア。』

『何にも見えやしめいがナ。』

清太郎は黙つて居た。

やがて何時もの如く水桶を擔つて、徐かに水汲みにと出懸けて行つた。今日も非常に好い天氣で、空氣の澄徹つて居る事は實に夏の空とは思はれぬばかり。朝日はまだ女峯の凸處に碍えられて、その美し

い晴々しい光をこの附近一帯の地に投げぬので、林はまだ一種名状せられぬ濃い亮やかな影をつくつて、をりをり思出したやうな風の一過に、ばら／＼と露の雨の如く零つる具合、實に山中でなければ味はれぬ曉の清らかさを備へて居る。朝夕の水を汲む溪流はその木小屋から丁度二町ばかり隔つて居て、其處に達するには熊笹の深く腰邊まで生茂つて居る叢原を分け、檜の林の疎らな間を抜けて、岩石の危ない間を七八間向ふに出なければならぬ。と、今まで音ばかりして流は見えぬ幅三間ばかりの、大石小石のごろ／＼と轉つて居る一道の溪流は、三角形にこの林の裾を洗つて、小やかなる音を立てつゝ、極めて風情ある様に流れて居る。其溪流の岸、殊に少年がいつも桶を入れて水を汲む邊には、秋の花が既に二つ三つ咲き綻びて、紫、赤、白などの色彩がその玲瓏透徹たる水の上に亂れ切つて其影を蘸して居る。

裏見瀑はこの下流である。

作兵衛は水を汲みに行つた甥が待つても待つても容易に歸つて來ないので、待ち勞れて、果ては何を爲して居るであらうと、こつそり後から行つて見た。

林を越えて、岩の後まで行くと、いつも水を汲む處の傍に、少年は後向になつて、じつとして立つて居る。さながら水の流の中に何か面白いものでもあるかのやうに、只一意其水面をのみ見詰めて居る風で、體なら一とこ動かさうともせぬ。傍なる水桶には未だ水が充されて無い。

何を考へて居るのだらうと思つたが、今少し見て遣れと思つて、其儘、岩の背後に隠れて立つて居た。少年はそれとは少しも知らず、猶少時じつとして立つて居たが、やがて長く苦しうな長息を洩して、傍なる石に腰を懸けた。

少時経つた。

『何を見てるんだ？』

叔父は遂に樹間から身を顯はした。

清太郎は狼狽して、

『水を……水を見てたんだよ！』

『水なんぞ見て、何うするだよ。遅いから來て見たんだが、貴様は餘程何うか爲て居るぞ。』

『いや、叔父さま、この水……この水であの女が死んだんだと思ふと、己ア、何だか變な氣持に爲つて。』

『馬鹿！ 今更そんな事を思つたつて、仕方が無えぢやねえか。』

『それや仕方が無えけれど……。』

『まア、そんな事は考へねえ方が好いだ。里の女が身を投げて死なうが活きやうが、そんな事は、己等山の人間にや何うでも無えだよ。』

少年は少時してから、

『己ア、何うも左様思へねえ。』

『ぢや、何う思ふだ。』

『己ア、何だか己の身に關係して居るやうに思はれて仕方が無え。』

『それで何う爲やうと言ふだ。』

『叔父さア、それは解らねえ。』

『馬鹿!』

と作兵衛は一喝して、

『そんな狐に魅まれたやうな事を考へて居るより、匆卒と水を汲んで呉れやい。』

促されて少年は進まぬながらもざんぶと桶を溪流の中へと投じた。清潭に映つて居たさまざまの花の影はさながら瀑の下の美しき衣の亂を見るかのやうに、ちら／＼と美しく面白く靡き渡つた。

あゝこの水! この水の流の末は?

清太郎は胸の騒ぐのを禁じ得なかつた。

この溪流の畔はこれより渠の物を思ふ所となつた。

六

一度攪き亂されたる少年の胸は水の容易に澄まぬと均しく、絶えず物思勝に、木を挽くにも、板を削るにも、常のごとく快活な性質は更に其態度の上に現はれなくなつて了つた。従つて、その美しい歌の聲も全く日光山一帯の地に絶えて、若い女の燃ゆるやうな願も久しく満さるゝ事なくして徒にさびしい日のみ過ぎるのである。

五日程過ぎて後、その美しい女の投身に就いての後聞が、微かながらもこの山中の木小屋に聞えた。

『己ア、其の事に關係した人から聞いたんだから、間違はあんめえと思ふんだが。』と今日里に下りて聞いて來たといふ樵夫仲間の一人が話した。『昨日の事ださうだ、東京から、非常に立派な由緒ある人が荒澤の村役場に遣つて來て、この裏見瀑に女の投身があつたさうだが、心當りがあるからその遺骸を見せて呉れると言ふので、村長立合の上、いろ／＼信玄袋やら下駄やら蝙蝠傘やらを見せて遣ると、これに相違ないといふので、其素性を聞くと、村長は吃驚しないものか、何でもそれア華族でも非常にえらい、名を聞きさへすれや、すぐあの人かと誰でも知つて居るやうな人の秘藏娘な相で、それが五日前から姿を見せないで、邸では上を下への大騒動、八方に人を走らせて、残りなく彼方此方を探したが皆目知れず。昨日、始めて宇都宮の新聞に其事が出て居たのを見て、それではもしやと思つて遣つて來た』

との話。屋敷の名が出ては非常に困る、何うか穩便に、人の口に上らぬやうに爲度いと言ふので、村長始め警察署の署長から其時かゝり合つた巡査まで一々金が出たさうで、其の晩の中に、荒澤の修行寺から死骸を掘り出して、終列車でこつそり東京に持つて行つたつて言ふだア。』

『何といふ華族か聞かなかつたか。』
と作兵衛は訊ねた。

『聞いたつて、誰が教へるべい。奴輩、もう皆な旨い汁を吸つてけつかるだアで……けどもあの新田の婆、お前も知つてべいが、あれがその死骸を掘る時分、寺に手傳に行つて居たよで、よく其時の事を話して聞かせて呉れたよア、其屍骸を掘つたのは八時頃、それを棺から出すと、まだ納めた時の儘で、顔などには笑を含んで居たつていふ事だ、婆さん、一目見たばかりだけれど、その美しいのうつつ魂消て、世の中にや、あねえに美しい人も居るだんべいかと言つて居たよ、だアで、こゝの清太などは死んだ骸でも、兎に角そねいな別嬪を抱いたなア、幸福者だアナ、あはゝゝ。』

と笑つた。

少年は笑はうとも爲なかつた。

『するとなア、其の死顔を見るとナ、年老つた、家扶らしい男が、姫様何故こんな事を爲て下すつたつて言つて、ほろ／＼と涙を滴したとよ。そして其場から直ぐその死體を引取つて、呉々も人々に口留

をして東京に歸つて行つたと言ふだア。』

『何うして死んだんだか解らねえだか。』

『から、解らねえ。けど、死ぬからにや、何うせ男の事だんべいといふ専ら評判だ。』

『何うせ左様だんべい。』

『夫にしても、死ななけりやなんねえとは可愛想だ。それに、はア、そんな立派な華族の姫様と生れて、何不足ねえ身分で、そんな事になるとは此方等の山の中の者には、何うしても呑込めねえ。』

『ほんに、清太などは其れから此方何か頻りに考へては鬱ぎ込んで居るだが、山の中位、安氣な、穩かな、心配の無え處はねえナア、もし。』

『本當だ。』

と樵夫も言葉を合せた。

けれど清太郎には何うしても左様は思はれぬのである。悲しい美しい人の一伍一什を聞けば聞く程、胸は烈しく波立つて、今迄會て覺えなかつた一種の悲哀を感じずには居られぬのである。

其心の感動を譬へて見れば、平和なるこの深山の裏には何だか浮世の新しい波が巴渦を作つて押寄せて來たやうに思はれるので、今まで何とも思はなかつた水の流、山の姿にも無限の新らしい意味が加はつたやうな心地がして、自己の穩かに平和であつた胸には、丁度風の山嶺を渡るやうに、又は水の岩石

に觸れて凄じい響を立てるやうに、解すべからざるある響が傳へられて居る。さりとして、それは單に美人の不幸を悲む心でない。否、自分でも解らぬある私語を四邊から微かに微かに吹込まれるやうに絶えず心を攪すのである。

七

『作兵衛さん、お前處の若い衆は此頃何うか爲たつて言ふ評判だぜ。』
作兵衛は振返つた。

後からは馬に丸太をつけた五番の木小屋の婆が手綱を長く、だらし無い風をして、馬立の林の坂をぼつくりぼつくり登つて来る。

『何故や?』

と足を留めて作兵衛は問うた。

『何故やつて、専ら評判がすア。それに、はア、お前處の若い衆は色男だアで、若い女衆が、やいやい言つて、その鬱ぐのを氣にして居ますだア。』

『熊婆さア、相變らず面白い事べい言つてるだナア。』

『だつて、はア、専ら評判だアで、向ふの溪の若い女こちよなどは、お前處の若衆を取捕へて、薩張此

頃は歌を歌はねえのは何うしたんだべいつて、えら苦情を並べて居つたつけがナ。

『若い者は困るだよ。』

『それに、何でもはア、裏見の瀧に美しい女の身を投けてから、お前處の若い衆は、えら鬱ぐやうになつたと言ふだが、それは本當けえ。』

『何アに、そんな事は有んめい。』

『だつて、女ちよは皆言ふだア。』

『それア、屹度かうだんべい、一番始めにあの野郎、身投の女を見付けたもんだで、それで、其様な噂言ひ觸らすんだんべい。』

『何んだか知んねいが、若い女ちよ共は、そんなに鬱いで居るのを、黙つて見ては居られない言つて、今もあの、お前處の若衆の木を伐つて居る所へ寄つて集つて、元のやうに美しい聲で歌をうたつて聞かせて呉んろつて、駄々を捏ねて御座つたア。』

『歌ア、うたつたか?』

『いや、何うしても歌はねえ。歌へつて言つたつて、歌へるやうな気分にならなけりや歌へねえつて。』

『それから何うしただ?』

「すると、女共はそれぢや歌へるやうな氣分に爲て遣るツて、右左から取附いて、えらい騒を爲て御座つた。」

馬の路草を食ひ始めるのを叱々と追つて、杉の小枝で、尻の邊を軽く一つ叩くと、馬は驚いて駈出した。

『馬鹿畜生！』

と口汚く罵つたが、再び、

『作兵衛さん、お互に血の氣のある内で無いけりや駄目さナア。もう、かう白髪になつちや——。』

『本當だ。』

わかれ道の角に來たので、作兵衛は其儘右の小道に入つた。

『左様なら。』

『左様なら、氣を付けさつしやい。若い血のある内は、それア、本に何んな事するか知れねえだアで。』
一歩、二歩、叱々と馬を叱る聲と共に、

日光好い山——

と歌ふ聲、高く四邊の翠微に響いて聞えた。

八

『清太、貴様は叔父を出し抜いて、突走る氣か。』

作兵衛は非常な權幕、少年は其小屋の隅に小さくなつて跪まつて坐つて居る。夜はもう遅く、四邊は常に變らぬ風の音、水の流、蟲の聲、山中の寂寞は更に一層の寂寞を加へて、この時ならぬ一喝は凄じく沈黙した空氣に響き渡つて聞えた。少年は夜に乗じてこの山を脱しやうとしたのを、目敏い叔父はそれと認めて直ちに衾を蹴つて跳起きたのである。

『叔父は何んなに貴様を力にして居るか、知らんのけえ。』

恐入つて少年は答が無い。

『本當に、この位の事が解らん貴様でも有るめい。叔父がこれ程力にして居るのに、山を出度いなら出度いとちやんと斷つて行くが好いちやねえか、出し抜いて、黙つて出懸けて行くつていのは何ういふ了簡だ。』

『言へば留められるに決つて居るだアで。』

『それぢや貴様、何うしてもこの山を出る了簡か。』

少年は黙つて居る。

『うむ、これ？』

『叔父さんには濟まねえが、己ア、世の中が見度いだ！』

『世の中が見度い、それぢや何うしても山を出る積りだナ。』

『何うしてもと言ふ事も無いだけど……。』

『清太……。』と作兵衛は聲の調子をやさしくして、『貴様はまだ若いから、左様思ふのも無理は無い。髻の生えた人や、美しい衣服を着た女などを見ると、左様いふ了簡が起るのは、尤だ。けれどよく叔父の言ふ事を聞け、貴様の見度いその世の中ほど悲しい事だの、辛い事だの、情ない事だの、腹立しい事だの多い處は無えだぞ。山の中に居れば、溪の水を飲んで、罪の無い山の人と交際つて、何一つ苦勞になる事もなく、これほど安氣な處は無いのに、……いや、現に、貴様も裏見瀑の投身の女の話聞いたぢや無いか。立派な家に生れて、何不足が無え身分で、それでも身を投げて死ななけりやならない——。』

『叔父さア、己ア死んでも構はねえだ。』

『死んでも、この山に居るのは厭、世の中を見度いと言ふのか。』

少年は點頭いて見せた。

『それぢや爲方が無い……けども、少しは叔父の身になつて考へても呉れやれ。この叔父はナ、何んなに貴様を力にして居ると思ふ。貴様がかう遣つて一緒に働いて呉れ、ばこそ香氣に楽しく面白く日を

送つて居るだアが、貴様が居なくつちや、かうして山の中に働いて居る事も出来ねえし、村に歸つても樂みが無い。それこそ坊さんにでも爲つて了ふばかりだア。』

『叔父さア、勘辨して下さい。』

と悲しくなつたか、清太郎はほろ／＼と涙を零した。

『何も勘辨するも爲ねえもねえ、行きたけりや行くだア、その代り、屹度後悔して、叔父さアがあの時あゝ言つたけと思ひ出すことがあるに違ひねえだ。』

『叔父さア、勘辨して……。』

少年はさまざまの感動に堪へ兼ねて、其儘身を打伏して了つた。老樵夫もその上の言葉を懸けやうも無いので、枕を着けた儘、久しく少年の最後の一語に就いて、さまざまの考を下した。勘辨して呉れとは、果して無分別の考を起したのを許せとの意か、それとも亦恩を忘れても猶世の中に出でやうとするのを許せとの意か。

それを幾度か分明と聞き糺さうと思つた。けれど甥は打伏になつた儘、頻りに涙を^{すゝ}歎^つけて居るので、これは叔父を不憫に思つて、その非望の願を思ひ止まつたに相違あるまいと思つて止した。

翌日も少年は常のごとく働いて、更に平日に異る所が無いので、叔父は大に心を安んじた。

* * * * *

けれど雲は行く、水は流れる、一度動き始めた感は纏かなる障礙の爲めに、果して永久に留るであらうか。日光裏山一帯の地に、『日光好い山、檜の木が多い。木小屋の清太さんの歌もよい——。』の若々しい聲は聞えても、その美しい、清い、亮え渡つた、さながら天の笛を聞くやうな縹渺たる歌聲を今も猶耳にする事を得るか何うか。

裏見瀧は依然として日夜世間に向つて落ちて居る。

(明治三十六年六月)

春 潮